
IS インフィニット・ストラトス ゲッターを継ぐ者

剣聖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ゲッターを継ぐ者

【Nコード】

N2270W

【作者名】

剣聖龍

【あらすじ】

不慮の事故によって死んでしまった滝沢光牙。しかし現れた神によつてISの世界に転生する事に！光牙は神に貰った力で何をするのか？今、時空を越えゲッターがチェンジする！！

一夏は出ません。

プロローグ

「ここどこだ？」

確か散歩してた帰り道に道路に飛び出した子供を助けようとして…

「君は死んだんだ」

「え！？」

後ろを振り向くとなんか綺麗な服を着ている男が立っていた。

「君は子供を助けようとして車に跳ねられて死んだんだ」

「そ、そんな！」

「だが君のお陰でその子供の命は救われた。なので君には別の世界に転生してもらう」

「ちよつと待つて下さい！そもそも貴方は誰なんですか？転生とか言つてましたけど？」

「私は様々な世界を統べる神、ただそれだけです」 世界を統べる神つて…

「ちなみに君が転生する世界はISの世界だ」

インフィニット・ストラトス

「インフィニツ

ト・ストラトス！？マジですか！？」

「なので君のISが必要になる。何が良いかな？」

「何でもいいんですか？」「もちろん」

「だったら真ゲッターロボで待機状態は赤、白、黄のラインが入ったガントレットが良いです！」

「分かった。真ゲッターだね。他には？」

「出来れば女性に対しての魅力を上げて下さい！」

「了解だ。後、向こうでの君の立場だが…まず主人公の織斑一夏君は出ない代わりに君が一夏君の立場になっている」

「え？つまり、千冬さんの弟つて事ですか？でも大丈夫なんですか？」

「そこは大丈夫だ。君は途中で親戚に預けられたという事になっている。さて、そろそろ準備は良いかな？」

「はい！大丈夫です」

「よし！では第2の人生へ転生せよ、滝沢光牙！」
そう言うと僕の周りが真っ白になった。

プロローグ（後書き）

次は主人公紹介です。

主人公紹介（ネタバレあり）

主人公について

名前 滝沢光牙

（たきざわ こうが）

年齢 15才

誕生日 12月15日

適性ランク A

見た目 原作の主人公、織斑一夏とあまり変わらないが、一夏と比べて少し背は低く、体形は筋肉は充分あるが細身。

性格 普段は気配りの効くやさしい性格だが許せないと思った時は勇気を出して立ち向かう。一夏程ではないがかなり女心に鈍感。しかし気付く事もある。 幼少時に父から格闘技と剣道を教わっていて身体中にその修行の傷跡がある。

中1の時から両親が仕事で帰れず、ほぼ1人だった。その為、家事全般と料理ができ、マッサージも得意。中3の時、G遺伝子が見つかり、ゲッターヒューマンだと言う事が分かった。

それ以降は運動や、勉強等様々な能力が上がったが、それによって周りから軽蔑され、親にまで化け物扱いされた。

中学の後はゲッターの学校に通っていたが、入学してから1ヶ月も経たない内に事故に遭い、ISの世界に転生した。

・ゲッターヒューマンについて

ゲッターマトリクス

ゲッター線によって変異したG遺伝子を持つ人間の事。この遺伝子がある事で、ゲッター線に同化されなくなる。

また、ゲッター線と融合している為、運動能力等が通常の人間と比べて高く、傷の治りも早い上、ゲッターロボの武器や能力を使用出来る。

主人公紹介（ネタバレあり）（後書き）

次回は第1話です。

感想等、募集しています。

第1話 波乱の入学

（IS学園）

今、僕はIS学園にいる。転生した時の時系列は中学3年の夏、つまり物語が始まる半年前だった。それから主人公の織斑一夏同様に高校受験の時にISを起動させてしまい、そこから試験を受ける事になって、真ゲッターで相手を倒したらなんか合格という事で入学する事になった。男の制服を着て校門の前に立っていると後ろから声をかけられる。

「おい」

「ん？」振り向くと原作の主人公、織斑一夏の姉の織斑千冬が立っていた。

「久しぶりだな、光牙」 「千冬姉さん！お久しぶりです」

そうか、僕は一夏の代わりだったわけ。つまり千冬さんの弟になる訳だからしつかりしないと！でもやっぱり千冬さん綺麗だなあ…

「光牙、どうした？」

「はっ！いえ、何も！！」

「？そうか」

（何だか変わったな。それになんか可愛いし…）

「はっ！私とした事が、いかんいかん」

「??」

「ん？光牙ちよつと腕を見せろ」

「え？はい…」

腕を出すと千冬姉さんが右腕に装着している真ゲッターの待機状態のガントレットを見る。

「これは…お前のISか？」 「はい」

「どこで手に入れた？」

神様に貰いました。なんて言える訳も無く…

「ある人に貰いました」 というベタな返し方に。

「…束か？」

「違います。でもこれ以上はいくら姉さんでも言えません」

「…そうか。とりあえず今から入学式だ。早く行け」「はい！」
入学式が終わるとそれぞれのクラスに案内された。

「私が1年1組の副担任、山田真耶です。よろしく願いしますね。
ではこれから皆さんに自己紹介をして貰います」

出た、恒例の自己紹介。

憂鬱だなあ…そんな事を考えている内に僕に回って来た。

「はじめまして、滝沢光牙です。これからよろしくお願いします」

沈黙『き』

「き？」

『きゃあああああああ！！あ』

「うおおお！！」

いきなりなんか声援が上がった。

そんな時、聞き慣れた声が響く。

「静かにせんか！！」

振り向くと後ろに千冬姉さんが立っていた。

「千冬姉さ「学校では織斑先生と呼べ。」は、はい…」

そう言って千冬姉さんが教卓に立つ。

「私が諸君らの担任、織斑千冬だ。諸君らにはこれからISの知識を半月で覚えて貰う。その後の実習の基本動作も半月で覚えて貰う。分かったな！」

また沈黙

『きゃあああああああ！！』

またかよ。

「本物の千冬様よ！」

「美しすぎます！」

「お姉さまに憧れて来ました！」

「お姉さまの為なら死ねます！」

なんか凄い…って何最後の人死亡フラグ立ててんだよ！

「静かにせんか！馬鹿者！」

その一言で周りが静まりかえる。さすが千冬姉さん。「全く、毎年よく馬鹿ばかり集まるものだ。山田先生、続きを」

「は、はい！とりあえずこれでSHRは終わりますが何か質問はありますか？」

「はい！」

1人の女子生徒が手を上げる。

「織斑先生に質問があります！」

「何だ？」

「何で男の滝沢君がいるんですか？」

「…変な誤解をされん内に言っておく。滝沢は私の弟で専用機持ちだ」

『ええええええ！？』

…いちいちうるさい。

「でも名字が…」

「滝沢は中学から親戚に預けられていたのだ」

「そ、そうでしたか…」

それでもクラスからはざわめきは消えなかった。

〈休み時間〉

「はあ…」

ため息の理由は女子だ。なんかさっきから視線とかを感じる。

しかも廊下には所狭しと先輩の人達までいる。

…はつきり言って辛い。

「一夏の気持ちちが分かるわ…」

「光牙、話がある」

声がした方を向くとそこにはポニーテールの女の人、篠ノ之箒がいた。

「箒…さん？」

「いいから早く来い」

「は…はい」

「……………」

「……………」

とりあえず移動したものの、会話が成り立たない。
本当は赤の他人だし。

（とりあえず原作通りに行くか）

「久しぶりですね、篤さん」

「え？」

「すぐ分かりましたよ。髪型が同じでしたし」

「…覚えていたのか」

「そりゃそうですよ」

（本当はアニメとかで知ったけど）

そんな事を考えていると何故か篤さんが睨んでいた。（ちょっと怖いけどやっぱ篤さん可愛いなあ…）

「な、なんだじろじろ見て」

「いや、篤さんが可愛いと思ひまして」

「な！わ、私が可愛い？」そう言つと篤さんは顔を赤らめた。

「はい」

「そ、そうかそうか。私は可愛いのか…」

「どうかしましたか？」

「な、何でもない！」 「？」

その時チャイムが鳴る。

「そろそろ時間か。戻るぞ光牙」

「はい」

（1年1組）

「ではまず再来週のクラス対抗戦に出る代表を決めたいと思う。自薦他薦は問わない。誰かいるか？」

「はい、先生！滝沢君を推薦します！」

「えっ、僕！？」

「私も賛成です」

「私も！」

「ちよっ…僕は…」

「他薦された者は拒否権等なしだ。他に誰がいなければ無投票当選になるぞ？」「そんな…」

「納得いきませんわ！！」

その瞬間、クラスに大声が響き渡った。

振り向くとやっぱりか…金髪の女の人でイギリス代表候補生のセシリア・オルコットだ。

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！実力から行けばイギリス代表候補生の私セシリア・オルコットが代表になるのは当然です！何せ私は入試で唯一教官を倒したエリートですからね！」

「教官なら僕も倒しましたけど？」

そう言うところが一瞬で静まり返った。

方も教官を倒したのですか！？

「は、はい。一応は…」

「くう…まさかこんな極東の島国で男に比べられるなんて…」

「イギリスも島国ですよ」「うっ！？…しかし私には今だに信じられませんか。貴方が、かの有名な織斑先生の弟で世界初の男の操縦者だなんて。ねえ、皆さん？」

そう言うところから「確かに…」とかの声が聞こえた。

「まあ、良いでしょう。とりあえずクラス代表と貴方の実力を確かめる為に決闘を申し込みますわ！」

「…良いでしょう、受けて立ちます」

「話はまとまったようだ。勝負は来週の月曜日、放課後の第3アリーナで行う。オルコット、滝沢の二名は準備をしておけ」

「…はい！」

「なっ！！貴

「放課後、教室」

「うーん、なんとか基礎は分かったけど…」

ISについて書いてある教科書を見ながら呟いた。

「真ゲッターを起動したのはいまのところ一回だしなあ、それに経験はあっちの方が上だし…どうしよう…」

「あ、いたいた。滝沢君まだいたんですね」

「山田先生？」

「実は寮の部屋が決まりました」

「え？でも一週間は自宅からだって聞きましたけど？」

「事情が事情なので無理矢理突っ込んだそうです」「でも荷物が…」

…

「それなら私が手配してやった。」

「ちふ…織斑先生？」

「着替えと充電器があれば十分だろう、ありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます…」

今度帰ったら私物少し持ってこよう…

「寮」

「1025…ここか。」

部屋に入るとアニメ通りの豪華な部屋だった。

「はあ…疲れた」

ベッドに横たわる。しかし僕の頭に一筋の事がよぎる。

「はっ！このパターンは…」

「誰だ？ああ、同室になった者が」

そう言うに出てきたのはバスタオル一枚の箒さんだった。

「こんな格好ですまない。私は篠ノ之箒だ。よろし…」

「！こ、光牙…」

「いや、これは…」

「見るなあああ！」

箒さんが近くに立てていた木刀を振り下ろす。

「おりゃあ！」

しかしその一撃を真剣白刃取りで寸前に止める。

「な!？」

「さすがですね、箒さん」「こ、光牙……」

「とりあえず着替え終わるまで外にいますから呼んで下さいね」

「あ、ああ……」

そう言つて僕は一旦、部屋から出た。

（10分後）

箒さんが入つて良いと言つたので再び入る。

「で？なんでお前が私の部屋にいるんだ？」

「それはですね……実はかくがくしかじか……と言つ訳です」

「そうか……」

不満そうな声をあげる箒さん。

「もしかして僕だと嫌ですか？」

「そ、そう言う事ではない！決してない！」

なんか真っ赤になつて訂正された。

「それより！そのISはどうしたんだ!？」

箒さんが僕のガントレットを指した。

「とある人から貰つたんです」

「……姉さんか？」

「……違います」

「そうか、なら良い。私はあの人と関係ないからな」「え？」

「何でもない。それよりもう寝るぞ！」

時計を見るといつの間にか10時だった。

「そうですね。じゃあ箒さん、お休みなさい」

「お休み、光牙」

「なあ、光牙」

「なんですか？」

「その……良かったら私がISについて教えてやっても良いぞ」

「良いんですか？じゃあ是非お願いします」
「分かった。放課後は空けておけよ」

〽次の日の放課後〽

「箒さん…なんで剣道なんですか？」
「それほど腕は落ちてないようだな。」

無視ですか…

「しかし昔はお前の圧勝だったのに、中学は何に所属していた？」
「帰宅部です」

「何だと!？」

「でも一週間に一回は竹刀や木刀を降っていま「なおす…」え？」
「私が鍛え直してやる!放課後三時間は毎日稽古をつけてやるからな!」

「あの…ISは？」

「それ以前の問題だ!明日から特訓してやる!良いな!」
そう言って箒さんは行ってしまった。

「はあ…やっぱりこうなるか…」

〽その日の夜〽

「……やっぱこのままじゃ駄目だ」

そう言って僕はベッドから起きて箒さんを見に行く。「すう…すう…」

「可愛いなあ…はっ!違う違う!箒さんの状態よし」それから僕は箒さんを起こさないようにそっと部屋から出ていった。

「ここら辺でいいか。人目につかないし。さてと、やるか!」

僕はガントレットに意識を集中させた。

それから月曜日まで放課後は箒さんの稽古、夜はISの自主特訓をした。

「日曜日の夜」

「よし、こんな所かな」 ISを解除して呟く。

無理して明日に響いたら大変だし。

「見せてやる、とっておきの…ジャイアントキリングをな!!」
そう言って僕は寮の部屋に戻った。

第1話 波乱の入学（後書き）

光牙が言った「ジャイアントキリング」という言葉は「どんでん返し」と言う意味です。

次回、遂に真ゲッターロボが登場します。

第2話 降臨！時空を越えたゲッターチェンジ！

「月曜日、第3アリーナ」滝沢、準備は良いな？」千冬姉さんが聞いてきた。「いつでも行けます」

そう言つてガントレットに意識を集中させるとガントレットが三色の光になって飛び出す。

赤色は真イーグル号、白色は真ジャガー号、黄色は真ベアー号に姿を変えた。

「こ、これは!？」

山田先生が驚く。当たり前だな。

「これが僕のISです」

「え？この戦闘機が?」「はい」

そう言つて僕は真イーグル号の上に飛び乗る。

「じゃあ織斑先生、篤さん、行つてきます」

「行つてこい、光牙」

「ありがとう、千冬姉さん」

「ふっ…織斑先生だ」

「光牙、勝てよ」

「了解です」

「滝沢光牙、行きます!」そう言つて僕を乗せた真イーグル、真ジャガー、真ベアーの順でピットから飛翔して行つた。

真イーグルから降りて既にISを展開しているセシリアと対峙する。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「……」

「その戦闘機達が貴方のISかしら？私のようなエリートはそんな戦闘機ごとくでは倒せなくてよ!」

「勘違いしているようですね。だったら僕のISの真の姿を見せてあげます」

「何ですって？」

「今に分かりますよ！」

そう言つて僕は飛び上がった。

「チエエエンジツ！ゲッター１！」

掛け声と共に三機のゲットマシンが飛んできる。

真ベアーが下半身に、真ジャガーが腰の部分に、最後に真イーグルが両腕、胸部、頭部に鎧のように合体し、背中から翼が生えて真ゲッター１への合体が完了した。

「な！？全身装甲タイプですって！？」

「これが僕のIS、真ゲッターロボだ！」

「ピット内」

「あれが…光牙の専用機…」

「……」

「アリーナ」

「くっ！いくら全身装甲タイプでもエリートの方が負けるはず無いですわ！喰らいなさい！」

そう言つて手にしているライフルから射撃を放つ。

「ふっ！」

それを移動して避ける。

「なんて機動性…だったら行きなさい、ブルーティアーズ達！」

そう言つと四機のビットが射出されビームを放つて来る。

その中を高速移動してかくぐる。

「くっ！だったらビットを叩く！ゲッターブレード！」

そう言つと両腕の刃でビットを斬りつける。あつとい

う間に二機を破壊した。残り二機。

「ゲッタアアア！トマホーク！」

頭部の両サイドに収納されている斧、ゲッタートマホークを構える。

「おりゃあああ！」

接近して斧を振り下ろすと残りのビットを両断した。「くっ！このっ！」

ライフルからビームがいくつも放たれるもゲッター1の機動性を活かし、そのまま一気に接近して懷に飛び込む。

「もらった!」

「甘いすわね! ビットは6機ありますのよ!」

両腰のビットからミサイルが放たれる。

「この距離なら避けられせんわ!」

セシリアの言う通りにミサイルが直撃する…はずであった。

「だったら! オープンゲッター!」

そう言うゲッター1が三機のゲットマシンに分離してミサイルをかわす。

「分離ですって!?!」

ゲットマシンで距離をとる。

「次はこいつだ! チェイエンジ! ゲッター2!」

そう言う今度は真ジャガー、真ベアー、真イーグルの順で合体して白い細身のボディで背中にブースターと右腕にドリルを搭載した真ゲッター2に合体する。「な、何ですって!?!」

〈応援席〉

「滝沢君のISの形が変わった!」

「すごい!」

〈アリーナ〉

「一体何なんですの! そのISは!?!」

「僕の真ゲッターロボはベースとなる三機のゲットマシンの合体順によつて三機の形態へ変形合体できるんですよ!」

「そんな!?! くっ…そんなふざけたIS、私が破壊して差し上げますわ!」

遂にキレたのかライフルとミサイルを撃ちまくってきた。しかし真ゲッターの中で一番のスピードを誇るゲッター2なら被弾無しで避けきる事も簡単だ。

「さっきより早いなんて!?! そんなバカな事が!」

「ドリルアアアムツ!」右腕のドリルを高速回転させ、ブルー

ティアーズに一撃を入れる。

「きゃあっ!？」

その一撃をもろに喰らい、シールドエネルギーが一気に削られて残りが204になった。

「オープンゲット！チェンジ！ゲッター1！」

分離して再度ゲッター1になりトマホークを構えて突っ込む。

「ええい！またですよ！」ライフルからまたビームが放たれる。

「ビームならこっちだって！ゲッターアア！ビィイム！」

そう言っ腹から赤色のビームを放つ。

二つのビームがぶつかる。だが出力はこっちの方が上なのでセシリアが放ったビームがかき消される。

「そんな!？」

予想外の事態に動揺したセシリアを赤い閃光が包む。「きゃあああっ!！」

「止めだ！」

完全に体勢を崩したブルーティアーズとの距離を一気に詰める。

「うおりゃあああ！」

渾身の力を込めたゲッタートマホークを思いっきり振り下ろした。

その瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴る。

『試合終了。勝者、滝沢光牙』

「ふう、勝った」

その瞬間、応援席から大歓声があがった。

「滝沢君かっこいいー!」「今度私にIS教えてー!」「あ、ずる

ーい。私も!」「今度デートしてー!」

とりあえず、適当に手を振っているとセシリアの異変に気付く。

「……………」

「セシリアさん？」

返事はない。だが次の瞬間、ブルーティアーズが落下しはじめた。

「――セシリアさん!」

「えっ…きゃああああ!」「間に合え!」

ゲッター1で一気に接近し、ブルーティアーズを抱えて着地する。

「セシリアさん、大丈夫ですか？」

「はっ…大丈夫ですわ」「それは何よりです」

「あ……」

「どうしましたか？」

「その…そろそろ降ろして下さい…恥ずかしいですわ…」

「え？」

セシリアさんが顔を赤らめながら言う。よく見ると今の体勢は完全にお姫様抱っこだった。

「あ！すいません！！」

「良いんですよ。それよりこの間の失礼を謝罪させて下さい」
そう言つて頭を下げるセシリアさん。

「い、良いんですよ！全然気にしてませんから！」

「そうですか、なら良いですわ…」

なんかセシリアさんが赤くなっているけどどうしたんだろう？
とりあえず、この決闘は僕の勝利で幕を閉じた。

くその帰り道く

「よくやったな、光牙！」「問題はあるがひとまず合格、と言った所か」

「ありがとうございます。篝さん、千冬姉さん」

「浮かれるなよ？まだまだ問題はあるからな」

「はい、肝に命じておきます。それに…」

「それに、何だ？」

「いえ、何も！じゃあ僕は先に戻ってますから！」

そう言つて僕は走り出した。明日からも頑張るぞ！

「篠ノ之」

「何ですか、先生」

「お前、光牙の事をどう思う？」

「…はつきり言つて変わったと思います。前はあんな風に敬語なん

か使用しませんでしたし、それに…」

「それに？」

「…可愛いと思います…」 「おお、光牙にも彼女が出来たか」

「か、彼女！？そ、そんな事は…」

「そんな赤い顔で言っても説得力無いぞ？まあ確かに可愛いがな」
「ううう」

「お前が彼女では無いなら私が取ってしまうぞ？」

「なっ！それは駄目です！」

「ほれ、そんな事を言うとはやっぱり好きではないのか？」

「だから私は…」

『光牙の事なんか好きじゃないんですー！』

「…え？」

いつの間にか千冬がマイクを持ってニヤニヤしていた。

「あ…あ…いやああああっ！！」

箒は真っ赤になって走って行った。

そしてその声は学園中に響いたと言う…

「へくしゅっ！あれ？風邪ひいたかな？」

ちなみに光牙はくしゃみのせいで気付いていなかった。

第2話 降臨！時空を越えたゲッターチェンジ！（後書き）

ゲッター3は後々登場します。

第3話 黄色の眠り

（火曜日、1年1組）

「…という訳でクラス代表は滝沢君に決定しました！」
パチパチパチパチ…

山田先生が言うのと拍手が起こる。

「はぁ…（…クラス代表の事忘れてた…）面倒だ…」
「でもセシリアもいさぎ良く引き下がるなんてさすがね！」

「やっぱり男子が居るんだし持ち上げないと！」

「それほどでもありませんわ」

「という訳だ。滝沢、クラス代表はお前だ。責任を持って取り組み分かったな？」

「はい…」

その後、授業を受けて次の授業がISの訓練だったので着替えてグラウンドに向かった。

その授業で専用機持ちの僕とセシリアさんが手本を見せる事になった。

「ではオルコットからやってみろ」

「はい！」

そう言っただけという間にセシリアさんはブルーティアーズを展開した。

「次！滝沢だ」

「は、はい！」

ガントレットを構える。

「チエエンジ！ゲッター1！」

そう言っただけで緑色の光が僕を包み、ゲッター1になった。

「筋は良いな、滝沢」

「ありがとうございます！」

「しかし…その声はどうにかなんのか…？」

「いや、僕の真ゲッターは音声認識なのでこればかりはどうにも……」

「そうか。だがそうだとしても、もっと早く展開しろ」

「はい」

「次は武装の展開を試みる」

「はい！」

「ゲッタートマホーク！」だが僕がトマホークを出し終わる前にセシリアさんはライフルを展開していた。「遅いぞ滝沢！もっと早く展開しろ！」

「頑張ります……」

「オルコットは目立つ問題は無いな。さすが代表候補生と言ったところか」

「それほどでも無いですわ」

「ただ、その構えば止める。その真横に向けた銃で誰を撃つ気だ？」セシリアさんを見ると確かに真横に銃を構えていた。「え、でもこれは私がイメージする為に最適で「直せ、分かったな？」はい……」

そう言うときセシリアさんは黙り込んだ。

さすがにセシリアさんでも千冬姉さんに逆らえないか。

「今度は飛行訓練だ。やってみろ」

「はい！」

そう言うときセシリアさんはあっという間に飛んで行った。

「よし、僕も！バトルウィング！」

バトルウィングを展開して飛翔する。一気に加速するとセシリアさんに追い付いた。

「なかなかやりますわね、光牙さん」

「どうも」

「もしよければ私がより詳しく飛行の原理について教えてあげましょうか？」

「……いえ、結構です……」

「そう……残念ですわ」

あの試合以来から何故かセシリアさんが僕の訓練を見てくれる。
(でも説明は分かりやすいな)

たまにしてくれる説明もすごく分かりやすい。正直助かっている。
『いつまでそうしている？次は急降下と完全停止をやって見せろ。』

目標は地表から10センチだ』

千冬姉さんの声が響いた。「はい！」

「ではお先に失礼します」そう言ってセシリアさんが急降下していき止まった。「よし、行くぜ！」

ウイングを展開して急降下する。そしてタイミングを見計らって完全停止をする。

「よし、合格」

「はあゝ良かった」

その後も訓練をして授業が終了した。

「つ、疲れた…」

「光牙さん、大丈夫ですか？」

「まあ、何とか…」

「全く…だらしないぞ、光牙」

箒さんが厳しい一言を放つ。

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは常識でしてよ？」

「常識か。お前のような猫かぶりに言われたくないな」

「猫かぶりですって？鬼の皮を被るよりはマシですわ」

そう言くと箒さんとセシリアさんから火花が散る。

(やつぱり日増しに仲が悪くなってるような気がする…)

そんな事を考えていると、「滝沢くくくん！」

後ろから女子に声をかけられる。

「何ですか？」

「今日の夕食の後って暇？」

「え？特に何も無いですけど…」

「やったあ！じゃあその後私達にちょっとつき合ってくれない？」

「良いですよ」

「良かった！じゃあ忘れないでね」

そう言つて手

を振りながら行つてしまった。

「…なんだ、あれは？」

「…さあ？」

「夕食後、食堂」

「というわけでっ！」

「…どういう訳で？」

『滝沢君、クラス代表おめでとう〜〜！！』

クラッカーが鳴つて中身の紙やらなんやらがまとわりついてきた。
どうやら僕の歓迎会を開いてくれたらしい。

「滝沢君かつこよかったよ！」

「今度のクラス対抗戦頑張つてね！」

「ど…どうも」

「人気者だな、光牙」

篤さんが不機嫌そうに言う。

「…本当にそう思いますか？」

「ふん」

そう言つて篤さんはそっぽを向いてしまった。

「あ、いたいた。君が滝沢君だね？」

「ん？」

声がした方を向くとメガネをした女の人が駆け寄つて来た。

「話題の新生入生をインタビューに来ました！私は新聞部の黛薫子です。これ名刺、よろしくね」

そう言つて名刺を渡された。

「ずばりクラス代表になった感想とか聞かせてくれるかな？」

「そうですね…じゃあ」

「おっ！何？」

「クラス代表については自分なりに努力をして誠心誠意、取り組みたいと思います。そして…」

「そして？」

「もつと強くなってるいつか、織斑先生に勝ちたいと思います！」

『おお〜』

「大きく出たね、もうOKだよ！頑張ってるね、私も応援するから」
「はい！」

「じゃあ最後に写真良いかな？折角だし、セシリアちゃんもどうかな？専用機持ち同士として良いと思うよ。」

「えっ！？私ですか…」 何故かセシリアさんは顔を赤くしている。
「ほらほら、早く！ついでに握手とかしていると良いかも！」

そう言っただけで僕とセシリアさんの手を握らせた。

「！！」

「じゃあ行くよ。3、2、1…」

その瞬間、周りの女子と篤さんが入った来て全員での写真になった。

「ちよっ！何で皆さん入って来ますの！？」

「まあまあ良いじゃん」「抜け駆けはさせないよ」
「うう」

（なんか、良いな。こういうのも）と僕は思った。

（篤・光牙自室）

「やっと解放された…」

その後、歓迎会が終わったのは9時過ぎだった。

「今日は楽しかっただろう、良かったな」

「どこがですか…」

「ふん」

「何処行くんですか？」

「シャワーに決まってるだろう！良いか、決して覗くな！」

「はい…」

そう言っただけで篤さんがボタンと扉を閉めた。

「よし、やるか」

右腕のガントレットのデータを表示してプログラムを起動させる。

「やっぱゲッター1とゲッター2だけじゃキツイな、早くしないと……」

起動させたのは真ゲッターロボの第3形態、真ゲッター3のプログラム。

ゲッター3はゲッター1、2とは比べ物にならないパワーを持ち、更にこの形態のみが強力な射撃の武器、ゲッターミサイルを使える。だがその分プログラムが複雑化しており、プログラム自動補正にしていってもかなり時間がかかるので今は手動でプログラムを補正している。

しかしそれでも時間がかかるのは変わらず、一週間前からやっているにも関わらず、まだ全体の46%しか終わってない。

「とにかく早くしなきゃ……」

そう言つて僕はプログラムを補正し始めた。

（30分後）

浴室から簞さんが出る音が聞こえたので補正を中止する。

「なんとか52%までできた……」

「上がったぞ、光牙」

そう言つて簞さんが出てきた。

「あ、はい」

その後、シャワーを浴びて出た後、そのままベッドに入って僕は眠りについた。

（翌日、1年1組）

「あ、滝沢君、おはよう」「おはようございます」「そう言えば、

滝沢君はあの事聞いた？」

「え？何をですか？」

「2組に転校生が来るんだって！」

「転校生？」

「なんでも中国の代表候補生らしいですわ」

「あ、セシリアさん」

「別にこのクラスに来る訳でもないのだろう？騒ぐ必用などあるま

い」

「中国の代表候補生か…」「気になる（んですの？）（のか？）」「まあ、一応はですけど」「今のお前にそんな余裕はない！来月はクラス対抗戦があるんだからな！」

「そうですね！対抗戦に向けて実質的な訓練をしましょう！相手は私が務めさせて頂きますわ！」

「でもうちには専用機持ちが2人もいるし、楽勝だよ！ね、滝沢君」「はあ…」

「その情報、古いよ」
後ろから聞き慣れない声がしたので振り向くとアニメで見たことのあるツインテールの女の人が立っていた。

「2組にも専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないから」「貴女は…もしや…」

「そうよ、私が中国代表候補生、凰鈴音。久しぶりね、光牙」

その後、チャイムに気付かず、鈴さんが千冬姉さんにぶつ叩かれたのは言うまでもない…

（昼休み、食堂）

「で？」

「で？」

「光牙さん！この人とはどういう関係なんですか！？」「まさかお前の彼女じゃないだろうな！？」

「か、彼女だなんて…」

赤くなっている鈴さん。

「そうです、幼馴染みですよ」

「幼馴染み？」

「あ、そうか。鈴さんと篤さんは入れ違いになって転校したんですよ」

「そ、そうだったのか」「私の事を忘れてもらっては困りますわ、中国代表候補生の凰鈴音さん」

「…誰？」

「なっ！？イギリス代表候補生の私をご存知ないの！？」「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、何ですって！？で、でも私は貴女なんかに負けはしませんわ！」

「ふーん、でも戦ったらあたしが勝つよ。あたし強いから」

（どんだけ自信家なんだ…）「それより光牙、クラス代表なんだって？ISの操縦あたしが見てあげても良いけど？」

「本当ですか？じゃあ是非…」

「バアンツ！！」

「うおっ！？」

何かと思うと篤さんとセシリアさんが机を叩いた音だった。

「光牙に教えるのは私の役目だ！」

「貴女は2組なのだから引つ込んでいて下さい！」

「あたしは光牙に言ってるんだからそっちこそ引つ込んでよ。それにあたしの方が付き合い長いし」

「それなら私の方が早い！光牙とは何度も家で食卓を囲んだ仲だからな！！」

「食事ならあたしもそうだけど？」

「…！？どういう事だ（ですの）！？」「いや、僕は

1人の時に鈴さんの実家の中華料理屋さんに食べに行つてただけですけど…」

「なんだ、店か…」

「お店なら不自然では無いですわね」

「それより、光牙。今日の放課後どっか行かない？」鈴さんがそう言つと篤さんとセシリアさんが僕の肩を掴んできた。

「生憎だが、光牙はISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている！」

「そうですわ！今は対抗戦に向けて、特訓が不可欠ですから！」

「ふーん…まあいいわ。じゃあそれが終わったら行くからね。その

後は空けといてよ！」

「は、はい……」

そう言うのと鈴さんは行ってしまった。

その放課後は篤さんとセシリアさんを同時に相手するという（2人が言うには）訓練をした。だが、いくら真ゲッターでも流石に無理があり、結局フルボッコにされたという結果だった。

（更衣室）

「痛てて……あれ訓練って言うのかな……？」

その時更衣室のドアが開く。

「光牙」

「り、鈴さん！？」

「はい、これ」

そう言っで鈴さんがタオルとドリンクを渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。随分酷くやられたみないね」　そう言っで鈴さんが僕の体に触れる。

「いつ！？」

「あつ、ゴメン。痛かった？」

「いえ、大丈夫……！」

鈴さんを見ると、アニメよりも可愛く見えた。

「？どうしたの？」

「な、何でもありません！」「？まあ良いや。それより光牙、約束覚えてる？」

「約束？」

「惚けないでよ」

（約束って何だったけ……アニメでもよく分からなかったし……）

「え、えーと……」

「ちよつとどうしたの？まさか忘れたの！？」

「いや、その……」

「最低……」

「え？鈴さん…？」

そう言っていると鈴さんが僕の頬に平手打ちを喰らわせた。「バカ！女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて男の風上にも置けない奴！犬に噛まれて死ね！！」

そう言っただけ鈴さんは立ち去ってしまった。

僕は鈴さんがいなくなった後もその場に立ち尽くしていた。

否、それしか出来なかった。

第3話 黄色の眠り（後書き）

感想など募集しています。

第4話 喧嘩と仲直りは紙一重

鈴さんにぶたれてから数日、僕はクラス対抗戦に向けて放課後は箒さんとセシリアさんに特訓をしてもらい、1人の時にはゲッター3のプログラム補正をしている。あれから鈴さんは僕の事を避けている。その為、謝ろうにも謝れずにいた。そんなある日…

「アリーナ」

「はあ… やっぱ鈴さん僕の事露骨に避けてるなあ…」 「…が… 光牙…」

「どうすれば謝れるかなあ…」

「光牙ッ…!」

「うわあッ!？」

突如、箒さんの大声が響く。

「全く… クラス対抗戦が近いんだぞ、ボーッとしている奴があるか!」

「すいません…」

「明日からは対抗戦の為にアリーナが使用できない。今日はビシバシ行くからな!」

「はい…」

だが僕の気持ちはその直後、一変した。目の前の自動ドアが開くとそこに鈴さんが立っていたからだ。

「鈴さん!」

「……」

鈴さんは無言のまま、僕を見ている。すると僕の隣にいたセシリアさんと箒さんが間に割って入る。

「貴様! どうやってここに入った!？」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですよ!」

「あたし光牙の幼馴染だから関係者だし。それより、あたしは光牙に用があるの。だから脇役は引ッ込んで」

「脇役（だと！？）（ですって！？）」

「光牙、少しは反省したかしら？」

「…はい、しました。それで鈴さんに言いたい事があるんです」

「あたしに…？」

「鈴さん」

「な、何よ…」

「約束をわすれてしまって、本当にごめんなさい！」そう言って僕は頭を下げる「ええええ！？」

鈴さんは何故かあたふたしていた。

（何よこれ！昔と全然違うじゃない！昔は敬語なんか使わなかったし、まさか素直に謝るなんて思ってたし、それになんか可愛いし…）

「もう良いわよ…頭を上げて」

「え？あの…許してくれるんですか？」

「光牙が謝ったら許すつもりだったの！」

何故か鈴さんが赤くなっていた。

「それよりも良い事を思い付いたの」

「良い事？」

「今度のクラス対抗戦で、あたしと光牙で負けた方が勝った方のお願いを1つ聞くこと。良いと思わない？」

「はあ…でもなんで急にそんなことを？」

「あゝもう！そんなことはどうだっていいの！（告白の為にだなんて言える訳ないじゃない…）とにかく！やるかやらないかどっちなの！？」

「……分かりました、やりましょう」

「随分素直ね。じゃあ忘れないでよ！当日になって取り消しとか無しだからね！」

そう言っただけ鈴さんは立ち去った。

「おい光牙！あんな約束して大丈夫なのか？」

「そうですね！もし負けたら鳳さんのお願いを聞かなければいけない

いのですよ?」

「だったら負けなければいいだけです。それに僕にだって作戦くらいはありますよ」

「作戦?」

「とりあえず、今は対抗戦に向けて特訓あるのみです。箒さん、セシリアさん、お願いします」

「分かった(分かりましたわ)」

その後は今日がアリーナが使える最後の特訓なのでいつもより厳しい特訓を受けて終了した。

その後の放課後は個人で出来る特訓や勉強をし、1人の時間を見つけては、ゲッター3の補正をした。

そんな内にいつの間にか対抗戦前日になっていた。

「箒・光牙自室」

「こ…これで…終わりだ…」

そう言つて最後のプログラムの補正が終了した。

『全てのプログラム補正完了』

「よっしゃあああつ!!」一気にテンションが上がる!

だが―

『初期設定完了。第一次移行を開始します』

「…へ?」

データを見ると第一次移行完了までが%で表されていた。

そう、今まで僕が補正していたのは初期設定のプログラム。そして初期設定は完了したのは今。つまりまだゲッター3は第一次移行すらしていない。

「にやんですとおおお!?!」

「次の日、アリーナ」

「はあ…」

僕のため息の理由は言わずともゲッター3。今日の作戦はまだ使っていないゲッター3がメインなのに…

ちなみに今は72%。

しかも運の悪い事に僕と鈴さんが一番最初の組み合わせに。

これだと鈴さんとの試合中に完了するか分からない。そんな重い足取りで僕は開会式へ向かった。

くピットく

「間に合わなかった…」

結局、89%の所で僕の番が来た。

「光牙（光牙さん）」 名前を呼ばれたので振り向くと篤さんとセシリアさんが言った。

「お前なら大丈夫だ。あの特訓に耐え、光牙は確実に強くなっている」

「特訓の成果を見せて下さい、光牙さん」

「篤さん…セシリアさん…はい！行ってきます！」

（そうだ。例えばゲッター3が使えなくてもあんな厳しい特訓に耐えたんだ。やれるだけやろう）

「チェンジ！ゲッター1！」

そう言っ僕はゲッター1になり、ウィングを展開して発進した。ピットから発進すると既にIS「甲龍」を展開した鈴さんがいた。

「逃げずに来たようね、光牙」

「鈴さん…」

『両者、指定の位置まで移動して下さい』

アナウンスが響き、僕の真ゲッター1と鈴さんの甲龍が移動する。

『では…試合開始！』

「ゲッタートマホーク！」トマホークを取り出すと、青竜刀を構えた鈴さんが突っ込んできた。

「おりゃああああっ！」

青竜刀が振り下ろされる。それをトマホークでガードするも僕は後ろに吹っ飛ばされる。

「ぐうつ！？」

僕は鈴さんから少し距離を取る。

「良いことを教えてあげるわ。攻撃力の高いISなら絶対防御を突破して本体に直接ダメージを与えられるのよ。勿論、この甲龍もね！」

言い終わると接近して青竜刀で連続攻撃を加えて来た。僕はその連続攻撃をなんとかトマホークで防いでいる。

「くっ…！」

（さすがにこのままじゃ不味い。ここは一回距離を取ってゲッター2に…）

「甘い！」

甲龍のブースター上部の砲口から何かが僕の脇腹に当りその衝撃で地面に叩き付けられた。

「があっ…！」

『光牙！』

「ピット」

「何だ今のは…何も見えなかったぞ…」

「今のは「衝撃砲」…空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、余剰で生じた衝撃を砲弾にして撃ち出すとてつもない攻撃ですわ…」

「光牙…」

篤は必死にモニターを見ていた。

「アリーナ」

「よく耐えたわね、「龍砲」は砲身も砲弾も見えないのに。」

「うう…」

（厄介だな…空間の歪みをハイパーセンサーが捉えてゲッター1の機動性で移動したから直撃はしなかったけど…）

それでも未だに脇腹を中心に痛みが走る。

「ゲッター3は…」

プログラムを表示する。現在95%。

「まだか…」

（だけど僕は負けない！特訓をしてくれた篤さんとセシリアさんの為に、そして何よりも自分の為に僕は負けたくない！）

「やあああつ！」

鈴さんが青竜刀を構えて迫って来る。

そして青竜刀が振り下ろされる直前にそれを実行した。

「今だ！オープンゲット！」

3機のゲットマシンに分離して青竜刀をかわす。

「なに！？」

「チェンジ！ゲッター2！」

そう言つて真ゲッター2にチェンジしてドリルを構える。

「プラズマドリル！ハリケエエェン！！」

ドリルを回転させると青いプラズマが発生し、更に回転によって発生した竜巻と合わさり、プラズマを纏った竜巻、「プラズマドリルハリケーン」が甲龍に襲い掛かる。

「うつつ！？」

竜巻とプラズマによるダメージを鈴さんはまともに受けた。

「なかなかやるじゃない、光牙」

「ここからは全力で行かせて貰います！」

「良いわ！掛かってきなさい！」

そう言つて僕と鈴さんが突っ込んだのは同時だった。僕はドリルアームで、鈴さんは青竜刀で突っ込み、その2つの武器が交わる…事は無かった。

突如、僕と鈴さんの間にアリーナの遮断シールドを破壊して浸入した何かによつて攻撃を中断された。

それは僕と同じ全身装甲の何かだった。

『か、会場内に所属不明のISが出現！』

アナウンスが響き渡るとそれに動揺した生徒達が逃げ始める。

「光牙！試合は中止よ、今すぐピットに戻つて！」

「え？」

「遮断シールドを破壊して浸入するなんてとんでもない攻撃力を持つてるに違いないわ。あたしが時間稼ぎするからあんたは早く…」
だが謎のISは左腕を構え、拳からビームを放った。

「鈴さん危ないっ!」

そう言つて僕は鈴さんを抱えて攻撃範囲から離脱する。

「鈴さん、大丈夫ですか?」

「あ…ああ…」

「鈴さん?」

「バカ! 離しなさいよ!! 大体どこ触つてんのよ!」

鈴さんが暴れ出す。よく見ると今の体勢はお姫様抱っこだった。

「ちよっ…危ないですつて!」

そんな事をしている内に敵が拳を僕達に向け、ビームを発射する。

「!」

僕と鈴さんはビームを左右に避ける。

「別に良いわよ」

「え?」

「あいつを倒すんでしょ?」

「鈴さん…」

「あたしが援護するからあんたはそのドリルであいつに風穴開けてやりなさい!」

「了解です!」

敵が僕達に拳を向ける。

「行くわよ!」

「はい!」

第4話 喧嘩と仲直りは紙一重（後書き）

次回はオリジナル要素あります。

第5話 異世界の来訪者

くピットく

「滝沢君！鳳さん！もしもし！聞こえますか！？」

「落ち着け」ビシッ

「ひゃうっ！？お、織斑先生！通信が切れてしまって…早く2人の救助に行かないと！」

「山田先生、これを見る」「え？こ…これは！」

モニターには遮断シールドがレベル4に設定され、ステージに通じる扉等も全てロックされている事が表示されていた。

「まさか…あのISが…？」「恐らくな。シールドの解除は3年の精鋭達に任せているがあと何分かかかるか分からない。しばらくあいつらには持ちこたえて貰えばならない。解除が済み次第、ステージに部隊を突入させる。部隊以外の教員は生徒を屋外に避難させるように。山田先生、全教員に連絡を」

「わ、分かりました！」

「私達にも何か出来る事は…ねえ、篠ノ之さ…あら？篠ノ之さん？さつきまで居たのに…」

くステージく

「ドリルアーム！」

ゲッター2の機動性で一気に詰めて突進するも、全身のスラスタで一気に離脱される。

「これで五回目よ、しっかりやってよ光牙！」

「やってます！でもあいつの機動性が異常なんですよ！」

「っ！また来るわ！」

鈴さんがそう言って僕が目を敵に向けると回避した後の回転ビーム攻撃を放って来る。それをなんとかゲッター2の機動性で回避する。
「このっ！」

鈴さんが甲龍の龍砲を放つも、簡単に防がれる。

「龍砲を八回も防ぐなんて…何なのアイツは？」

「……鈴さん」

「何よ？」

「なんかあれ、機械みたいじゃありませんか？」

「え？」

「僕達の攻撃の後に回転ビーム攻撃をして、鈴さんの龍砲を防いでそれを繰り返す。普通の人間がここまで精密に出来るとは思えませんが」

「な…ちょっと待ってよ！ISは人が乗らなきゃ動かないのよ？」

「でも何処かの国が極秘で開発した物かもしれません」

「じゃあ…アイツが無人機なら勝てるの？」

「一応秘策はあります」「どんなの？」

「鈴さんはアイツを引き付けて下さい。その間に僕は秘策の調整をします」

「勝算は？」

「…六割位です」

「良いわ、やってあげる」「本当ですか！？」

「その代わり、終わったら何かおごりなさいよ！」

「了解です！じゃ、行きますよ！」

そう言っただけはプログラムを起動させて、アッププログラムの作成を開始する。『……？』

「アンタの相手は私よ！」（光牙、急いで！）

「ここをこうして…こうすれば！プログラム実行！」『ロードアッププログラム開始。ロードスピードを二倍にアップします。』

今は98%にまでアップしていた。

「もう少し…！」

その時、ステージに声が響き渡る。

『光牙あつー！』

「篤さん！？」

見ると篤さんが放送室からマイクを使って声を発していた。

『男なら…男ならそのくらいの敵に勝てなくなるとする!!』

「箒さん…」

「光牙! 後ろ!」

「なに!?!」

見ると敵は鈴さんを吹き飛ばして箒さんに照準を向けビームをチャージしていた。

「やめろおおっ!」

ゲッター2で体当たりをし、敵にしがみつく。

『……! ドゴッ!』

敵が肘打ちでしがみついている僕を吹き飛ばした。 「うわあああ

あっ!!」

『光牙!』

弾き飛ばされた僕に敵が照準を向ける。

「やらせないわよ!」

そう言つて鈴さんが敵にしがみついた。

「鈴さん!」

「光牙、早く!」

その瞬間、ロードが完了した。

「よっしゃ! 行くぜ、オープンゲッター!」

そう言つてゲッター2を分離させた。

「きゃあああっ!!」

鈴さんは敵の振り払いで吹っ飛ばされていた。

敵はその鈴さんに照準を向けるが、ゲットマシンが間をよぎって中断される。

「見せてやるぜ! 真ゲッターロボの第3形態を! チェエエンジン! ゲッター3!!」 そう言つと真ベアー、真イーグルが合体し、黄色がメインカラーの無骨な外見の上半身になる。

ここまではゲッター1、2と同じだが、真ジャガーは背部に合体し、下半身ではなくキャタピラーのついたタンクになった。

この戦車のような形態が水中戦と陸上戦を得意とした第3形態、真

ゲッター3だ。

「行くぞおおお!!」

そう言ってキヤタピラーを全開にして敵のビームを回避しながら突っ込む。

「ハンマーパンチ!」

両腕の黄色い豪腕で殴り付ける。敵は咄嗟にガードするも、背中から覆っているアーマーごと、クロスさせた腕の装甲を破壊する。

だが予想外の出来事が起こった。僕は装甲の下は機械だと思っていた。しかし敵の装甲の下に見えたのは緑色の肌のようなものだった。

「なに!?!」

（あれは…まさか!）

僕の頭を1つの予想が駆け抜けた。

確かに敵はアニメと比べて少しゴツい形になっている。

（だとしたら!）

「どりゃあああ!!ゲッターアアアムツ!!」

両腕の豪腕は伸縮自在でそれを敵に放って絡めとる。「大雪山!おもしろiiiiiii!!」

そのまま引き寄せて、高速回転しながら敵を放り投げる。

「ゲッターホーミングミサイル!」

更に落ちてきた敵に肩に装填されている四発のミサイルを放つと敵は大爆発を起こした。

その中から火に包まれ、装甲がボロボロになった敵が落下してきた。

「やったの?」

「いや、まだだ!」

敵は確かにまだ動いてる。装甲が剥がれ、その下から緑色の肌が露出し、更に腕や足の先には鋭利な爪が生えており、体のあちこちに機械的な部品が付いていた。

「な…何、あれは…?」

頭部の装甲が剥がれるとそこにはトカゲのような頭をした物、ゲッ

ターロボの宿敵「メカザウルス」がいた。

「グアアアアッ!!」

メカザウルスは雄叫びをあげると、体中からミサイルを放ってきた。
「させるか!ミサイルストーム!!」

そう言うのと背部のタンクのカバーが開き、そこから大量のミサイルが発射され、メカザウルスのミサイルとぶつかり合って爆発した。
(何でメカザウルスがこの世界にいるか分らない。けど今はやるしかない!)「オープンゲット!チエエンジ!ゲッター1!」
そう言うて僕はゲッター1にチェンジしてゲッタートマホークを取り出す。

「トマホークウ!ブーメランツ!」

僕はトマホークをブーメランのようにメカザウルスに投げ付ける。
するとメカザウルスの右腕を回転するトマホークが切り裂いた。

「グアアアアッ!!」

メカザウルスが叫び声のようなものをあげる。

「ゲッタアアア!ビィイム!」

僕は腹部からゲッタービームを放つ。メカザウルスに対して、ゲッターロボのゲッター線が効果的だからだ。

「グアアアアアア!」ゲッタービームを喰らい、メカザウルスはドロドロに溶解して爆散した。

謎のメカザウルスは倒したものの、僕の心には不安があった。

(何でメカザウルスが…別世界から来たのは僕だけじゃないのか…?)

だがそこで僕の意識が揺らぎ、真ゲッターは解除されそのまま倒れたのだった。

「保健室」

「光牙…」

今、保健室には意識を失った光牙が横たわっていた。その横に鈴が椅子に座っていた。

「う…」

「光牙、大丈夫!？」

「鈴…さん…うつ」

「え…？」

そう言う光牙はまた意識を失った。

「……ありがとう、光牙……」

そう言う鈴の表情は何処か嬉しそうだった。

く廊下く

「山田君、あの兵器について何か分かったか？」　　今、メカザウルスの残骸は学園のドックにて調べられていた。千冬はそれについて訪ねていた。

『殆ど駄目です、中枢に関わる部分が破損していて…ただ…』
「何だ？」

『これはISではありません。何処にもコアが無いんです』
「すると全く別の兵器だと？」

『恐らく』

「分かった。また何か判明次第、連絡を」

『はい』

そう言う千冬は携帯を閉じる。

「あの兵器は…一体…？」この時千冬は気がつかなかった。
黒い何かが飛び去っていくのを。

その後、対抗戦はこの事件で中止になったという。

第5話 異世界の来訪者（後書き）

感想等お待ちしております。

第6話 金と銀

〔 簀・光牙自室 〕

その夜、山田先生が僕達の部屋に来て「お引越です」と言った。

どうやら部屋割りがついたらしく、簀さんがそこへ行くことになった。

それを簀さんは拒みながらもしぶしぶ承諾して出ていった。

「はあー一人は気楽だなあ」

ベッドに寝そべってそう呟く。すると僕の目の前になんか光がちらついて、そこから出てきたのは…

「やあ、光牙君。元気してるかい？」

「神様：来て大丈夫なんですか？」

「まあ、君は転生者だからね。様子を見に来たんだ。それで、調子はどうだい？」

「どうもこうもありませんよ…なんでこの世界にメカザウルスがいるんですか？」

「それを聞くとおったんだよ。実はちょっと問題が発生してね…」

「問題？」

「別の世界、つまりゲッターの世界で倒した恐竜帝国の生き残りが規則を破って別の世界を支配しようと転生したんだ。そしてその世界が…」

「ここ（インフィニット・ストラトス）ですね？」

「そうだ。本来なら我々だけでなんとかしたいのだが既に奴らはどこかに隠れて力を蓄えている。下手に我々が手を出すと、この世界が崩壊しかねないんだ。なので光牙君。恐竜帝国を倒して欲しい！転生社の君しか居ないんだ！タダでは言わない。何か条件があったら言ってくれ！」

そう言って頭を下げる神様。いくら僕が転生者だからって神が頭下

げるなよ…

「じゃあ条件として、真ゲッターの形態に1つずつ、新しい武器とメカザウルスが現れたら真ゲッターが反応するようにして下さい」
「分かった。メカザウルス探知については、メカザウルスが接近すると緑色に光るようにしておく。武器は何かいいかな？」

「ゲッター2にはビームガン、ゲッター3はゲッターミサイルに敵を凍らせるフリーズミサイル、爆発すると煙幕を出すスモークミサイル、さらに爆発するとその場にバリアを展開するバリアミサイル、この三種類の追加とゲッター1には太刀が欲しいですね。」

「なるほど。2と3はOKだ。太刀は今その太刀をイメージしてくれ。そのとおりに具現化するから」

「わかりました」

そう言つて僕は目を閉じて太刀をイメージする。

すると僕の望んだ太刀が具現化して手におさまった。「蒼い太刀か…名前は？」「決めてあります。こいつの名前は「蒼月刃」です」
「そうか。一応それは生身でも使えるようにしておいたから頑張ってくれ！では！」

そう言つと神様は光になって消えた。

「ふう、とりあえず新しい武器の調整して寝よ」

〓翌日、1年1組〓

「ねえねえ、あの噂聞いた？」

「なになに？」

「今度のトーナメントで優勝すると滝沢君と付き合えるんだって！」

「ええ！本当！？」

「優勝すると…」

「光牙さんと…」

「「付き合える！？」」

「おはようございまーす」『……………！？』

「あれ？なんか盛り上がってますね。何かあつたんですか？」

『何でもないよ!!』

ハモリで否定された。

「おい滝沢、席につけ」 「あ、はい！」

いつの間にか後ろにいた千冬姉さんにせかされて席につく。

「まず最初に今日は転校生を紹介します」

山田先生が言うときざわめきが走る。

そんな中、ドアが開いて転校生が入って来た。

「じゃあ自己紹介してくれるかな？」

「はい。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしく願います」

転校生は金髪で紳士的な印象の子だった。

「…男？」

「はい、こちらに僕と同じ待遇の方が居ると聞いて、本国より転入して来ました。」

『…き』

「？」

このパターンは…!

『きゃあああああああ!!』

「ええ!？」

「転校生!しかも2人目の男の子！」

「超美形!守ってあげたい系の!!」

また女子が騒ぎ出す。

「うるさい!静かにせんか!!」

千冬姉さんの一言で教室が静まり帰る。

「次の授業は2組との合同授業だ。場所は第2グラウンドだ、遅刻するなよ。それから滝沢はデュノアを見てやれ。同じ男ならなにかとやりやすいだろうからな。それでは解散！」

織斑先生がそう言うと、女子達が準備を始める。

「君が僕と同じ待遇の方だね。僕は「自己紹介は後で良いですから早く行きましょう!」え?うわっ!？」

デュノア君の手を掴んで走り出す。

（まあ真実は知ってるけどここは知らないフリ、知らないフリ）

「ねえ……？なんでそんなに走ってるの？」

「僕達はアリーナの更衣室で着替えなきゃいけないんですよ。それも毎回ですから急がないと間に合わないんですよ！」

「あ……なるほど」

だが僕達の前にそんな事情を知らない者達が現れた！「いた！転校生君よ！」

「げっ！」

「しかも滝沢君と一緒に！」よく見ると前と後ろを完全に女子達に塞がれていた。「こっちです！」

「う、うん！」

横道に行く。だが！

「あ！逃げた！」

「者共、であえ、であえい！！」

「いつの時代じゃ、おのれらは！！」

冷静にツツコミを入れている間に何処からともなく女子達に完全に塞がれていた。

「ここから先は新聞部の黛薫子を通さないわよ！大人しく取材させなさい！」

「ああもう！仕方ない！！デュノア君、しっかり捕まっててよ！」

「え？うん……」

意識を集中させ、道筋を見極める。そして道筋が光のラインとなった。

「真ゲッタービジョン！！」そう言っ僕は真ゲッター2の能力で機動力を底上げし、幻影が見える位のスピードで女子達の間を駆け抜け、向こう側に抜けた。

「あれ！？滝沢君達がいらない！？」

慌てている女子はほつといてと。

「行くよデュノア君！」

「うん！」

そのまま僕はアリーナに走っていった。

「アリーナ、更衣室」

「危なかった…」

「ふう…あのありがとう」「別に良いですよ。自己紹介がまだでしたね、僕は滝沢光牙です。」

「よろしく。僕の事はシャルルで良いよ」

「よろしくお願いします、シャルル君。とりあえず早く着替えないと！」

そう言っ僕が制服を脱ぐとシャルル君は驚いて後ろを向いていた。「どうしたんですか？早く着替えないと間に合いませんよ？」

「う、うん…その、後ろ向いててくれない？」

「ああ、確かに着替えをジロジロを見るわけにもいきませんしね」
僕は後ろを向いて着替えた。

僕が着替え終わると既にシャルルは着替え終わっていた。
「なんかそのスーツ、僕達のは違いますね」

「これはデュノア社製のオリジナルだからね」

「ん？デュノアって確か…」

「僕はデュノア社の社長の子なんだ」

「なるほど。ってもうこんな時間！急がないと！！」

その後、どうにか僕は授業に間に合った。

授業は実習訓練で元候補生の山田先生と専用機持ちのセシリアさんと鈴さんの勝負から始まり、結果は流石は先生と言うべきか山田先生の圧勝で終わった。

その後は専用機持ち事にグループを作って練習をして、授業が終わった。

学校が終わると、僕の部屋にシャルル君が新しいルームメイトとしてやって来た。

「よろしくね、光牙！」

「此方こそ」

「ねえ、光牙。明日の放課後って空いてる？」

「放課後ですか？多分空いてると思いますけど」

「じゃあ僕とISの訓練しない？僕も光牙のIS見てみたいし。」

「良いですよ」

「やったあゝあ、そういえば授業の前に使ったなんか早くなるのって何なの？」「ああ、あれは僕のISの能力ですよ。僕のISは少し特別で僕自身もその力が使えるんですよ」

「ふーんそうなんだ…これが謎のISの力…」

「何か言いましたか？」

「ううん！何でも無いよ！それより早く寝よう光牙！」

「そうですね。じゃあおやすみなさい」

「おやすみなさい」

「次の日、1年1組」

「えーっと…今日も転校生を紹介します…ドイツから来たラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

シャルル君に続き、今日も転校生が来た。今度は銀髪で片方の目に眼帯をした軍人のような人だ。

「自己紹介をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

（教官？って事は千冬姉さんがドイツにいた時の人かな）

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……沈黙

「あの…以上ですか？」

「以上だ」

そう言う僕を睨んで近づいてきた。

「……」

「あの、何か…」

バシッ！！

その瞬間、強烈な平手打ちを喰らった

『！！！！！！！！』

！
」

「痛てて…」

「光牙、大丈夫？」

はれた頬をおさえる僕の前に平手打ちを喰らわせた本人が立っていた。
た。

「私は認めん！貴様があの人の弟であるなど…認めるものか！」「
僕の波乱万丈な学園生活は始まったばかりだった。

第6話 金と銀（後書き）

次回はゲッターについてです

真ゲッターロボについて (ネタバレあり)

機体名 真ゲッターロボ

世代 無し

シールドエネルギー

1000

待機状態 赤、白、黄のラインが刻まれたガントレット

光牙の専用機。『真(チエ

ンジー!)ゲッターロボ 世界最後の日』の真ゲッターロボであり、見た目や性能等は殆ど変わらないが、ゲッター線による再生能力等、原作には無かった機能がある。

通常のISとは違い、“纏う”のではなく、“融合”する。その為、分離機能や変形合体が可能だが、ダメージもシンクロする。

メカザウルス ルシバーとの戦闘の時、ゲッターエネルギーを使いきってしまい、戦闘後、休眠と進化の為、消滅した。その後、第2形態に進化して光牙の前に現れた。

特殊能力

・ツインモード

『ISモード』と『バトルモード』という2つのモードに切り替えられる能力。

『ISモード』は通常のISと同じ形態。

『バトルモード』はゲッターを“兵器”としての能力を解放した形態。

バトルモードの時はシールドバリアーと絶対防御が消滅し、封印されていた能力が使用可能になる。

普段はバトルモードにリミッターが掛けられており、使用出来ない。

・ゲッターヒーリング

バトルモードの時のみ使用可能。周囲のゲッター線を吸収し、エネルギーを補給したり、傷付いた部分を再生させる能力。

・探知機能

メカザウルスが出現した時、緑色に発光

して知らせる能力。

形態について

ベースとなる3機のゲットマシン、赤色の真イーグル号、白色の真ジャガー号、黄色の真ベアー号の合体順によって3つの形態に変形合体出来る。

どのゲットマシンにもミサイルが搭載されている。

ゲットマシンの時、光牙は真イーグル号と融合している。

・真ゲッター1

真イーグル、真ジャガー、真ベアーの順で合体し、空中戦闘を得意とする形態。メインカラーは赤。

武装の1つであるストナーサンシャインは普段はリミッターが掛けられており、使用出来ない。また、最強の武装、真シャインスパークはバトルモードの時のみ使用可能。

武装

バトルウイング

ゲッタートマホーク

ゲッターブレード

頭部ゲッタービーム

（緑色）

ゲッタービーム

（腹部、赤色）

蒼月刃

トマホークランサー

Wゲッターブラスタ

神速月龍斬

真ゲッターチェンジアタックR

ストナーサンシャイン

真シャインスパーク

・真ゲッター2

真ジャガー、真ベアー、真イーグルの順で合体し、高速戦と地中戦と地上戦を得意とする形態。

メインカラーは白。

ボディは細身で、背中には巨大なブースターが2つあり、スピードは3形態トップを誇る。

武装

ビームガン

ドリルミサイル

プラズマドリルハリケーンドリルハリケーン

真ゲッタービジョン

真マッハスペシャル

真ゲッターチェンジアタックW

・真ゲッター3

真ベアー、真イーグル、真ジャガーの順で合体し、水中戦と地上戦を得意とする形態。

メインカラーは黄。

他の2形態と違い、重戦車のような形態で、ホバー移動をする事も可能。

パワーは3形態の中で最強を誇る。

武装

ゲッターホーミングミサイル（N、S、F、B）

ハンマーパンチ

ミサイルストーム

（N、S、F、B）

大雪山おろし

真ゲッターチェンジアタックY

単一仕様能力

『ゲッターバースト』

発動すると内部に貯蔵されているゲッターエネルギーを解放し、機体が緑色に輝く。ゲッター1の時には背中からゲッターエネルギーの翼が形成される。

使用中は機体性能が跳ね上がるが、不安定なシステムの為、5分前後で解除されてしまう。

しかも機体と搭乗者にかかる負担が凄まじい上、内部のゲッターエネルギーを殆ど使ってしまうので使用後、しばらくは戦闘能力が殆ど皆無になってしまう諸刃の剣である。

真ゲッターロボについて

(ネタバレあり)(後書き)

次回から本編に戻ります。

第7話 真実を知る者、知らされる者

「放課後、アリーナ」

放課後、シャルル君と一緒に訓練をする為に僕達は今、アリーナにいる。

「へえー、光牙のISは全身装甲タイプなんだ」

シャルルが僕のゲッター1を見て感想を言う。

「シャルル君のは第2世代機でしたっけ？」

「うん、と言つても僕のはカスタム機だけだね。

ところで…それは射撃武器はないの？」

トマホークを構えたゲッター1に対して意見を言う。「実は真ゲッターはあまり射撃武器はないんです。ゲッター1はゲッタービームとトマホークを投げる位しかないし、2はドリルミサイルとプラズマドリルハリケーンにビームガン。3には一応ミサイルがついてますけどね…」

「ふーん。じゃあ僕の武器使ってみる？もしもの時の為にさ」

そう言つてシャルルは手に持っていたアサルトライフルを差し出す。それを僕は受けとる。

「よし、やあつてやるぜ！」

前の世界で好きだったロボアニメの決め台詞をいいながらアサルトライフル構える。シャルルは後ろから僕を支えていた。

一方こちらは…

鈴「ねえ。」

第・セシリア「なんだ？（なんですの？）」

鈴「あの2人、くつつき過ぎじゃない？」

2人「確かに…」

鈴「まさか…あの2人はあっちの趣味が…！」
なんか不毛なやり取りをしていた。

ライフルを構え、的を撃ち抜く。真ん中には当たらなかったが、全体的には命中した。

「なかなかやるね」

「シャルル君ほどではないですよ」

「ねえ、あれって……」

「嘘！あれドイツの第3世代機じゃない！？」

「「え？」」

振り向くと黒いボディのISを纏ったラウラがいた。

ラウラは此方に気付くと僕を睨み付けてきた。

「滝沢光牙！私と戦え！」……お断りします。僕には貴女と戦う理由がありません」

「そうか。だが私には貴様と戦う理由がある！」

そう言っていると右肩のレールカノンを放ってきた。

「な！？」「……っ！」

それを前に出たシャルルが防ぐ。

「いきなり撃ってくるなんてドイツの人は余程沸点が低いんだね」

シャルルがラウラに言う。「フランスの第2世代機か……そんな量産もどきで私の相手をするつもりか？」

「コストばかり高くて量産のメドが立たない機体よりはマシだよ！」

そう言ってシャルルはラファール・リヴァイヴ・カスタム2の武装を構える。

「……何だと？」

『その生徒！何をやっている！』

放送がアリーナに鳴り響く。誰かが先生に知らせたようだ。

「邪魔が入った。今日の所は見逃してやる」

そう言ってラウラはISを解除して立ち去った。

（更衣室）

「……」

「光牙、大丈夫？」

横からシャルル君に声をかけられる。

「はい、なんとか…」

「じゃあ僕は先に行くね」「はい…」

そう言つてシャルル君は更衣室を後にした。

「……」

シャルル君が立ち去つた後も僕は座っていた。今朝、言われた言葉が響く。

『私は認めん！貴様があの人の弟であるなど認めるものか！！』

「はあ…とりあえず戻ろ…」

僕は着替えて部屋に向かった。

「光牙・シャルル自室」

「ふう、疲れたあ…」

部屋に戻り、ベッドに横になる。浴室からはシャワーの音が聞こえる。

「あ、そういえばボディソープ切れてたっけ。シャルル君持ってたかな？」クローゼットを確認するとボディソープの新品があった。

「やっぱりか、持ってたかないと」

そのまま浴室に向かう。

「シャルル君。ボディソープ持ってきた『ガチャ』よ？」

僕が浴室のドアを開けたのと、シャワールームのドアが開いたのは同時だった。そこには、シャルル君にそっくりな女の子がいた。

「ひ……ひゃあっ！」

女の子が悲鳴をあげる。ちなみに相手は一糸纏わぬ姿だ。

「あの…これ、ボディソープ…」

「ありがとう…」

ボディソープを渡すと僕は浴室から出た。

（そういえばこんなシーンあったな…）

僕は頭にアニメを思い浮かべる。

その直後、浴室からドアが開く音がして出てきたのはやはり女の子。そこからしばらく沈黙。

30分後、僕達はお互いベッドに腰掛けていた。

「……」

「えーっと…とりあえずなんか飲みますか？」

「うん…」

僕は一緒に飲もうと思って買っておいたジュースの一本を渡す。

「はい、どうぞ」

「ありがとう…」

そこからジュースを少し飲んでから僕は切り出す。

「…つまり、シャルル君は女の子だったんですね」「う、うん…」

「どうしてそんなことを？」

「…光牙になら話してもいいかな」

そう言ってシャルル君もとい、シャルルさんは話し出した。

自分はお父さんの愛人の子である事、自分のお母さんが死んだ時にお父さんの部下が来て、IS適正が高かったので極秘にデュノア社のテストパイロットをする事になった事、お父さんとは殆ど話した事がない事、デュノア社が経営危機に陥り、このままではIS開発の権利を剥奪されてしまうので世界で唯一、しかも謎のISを使える僕の事を知り、そのデータを収集する為に男に化けて転入した事を語った。

「…それでシャルルさんはこれからどうするつもりなんですか？」

「どうなるかな。女だってばれちゃったし、政府が黙ってないだろうね。きつと強制的に連れ戻されて牢屋行きかな…ごめんね光牙。

騙したりして」

軽そうに語るシャルル君を見ていて遂に僕の怒りがMAXを越えた。

「そんなんで良いわけないだろ！」

「えっ!?!」

大声を張り上げるとシャルルさんが驚く。

そのままシャルルさんの肩をつかんで僕は語った。

「確かに親がいなけりや子どもは生まれない！だからって子どもの人生を好き勝手にするなんて間違ってる！」

「光牙…？でも僕はもう女だってバレてるんだよ？」「だったら僕が黙っていれば良いだけだ！それにこの学園にいれば世界中の機関とかからは手出しできないはずだ！」

「それって確か特記事項の1つだよな？よく覚えてるね。全部で5個もあるのに…」

「記憶力には自信がありますからね。だから僕が黙ってれば三年間は大丈夫です。その間に何か対策を考えましょう！」

「良いの？」シャルル君はもつと他人を頼って下さい。まずは僕に甘える事から初めると良いです！…ありがとう、光牙。僕の為に…」

だがその時、

コンコン

「…！？」

「光牙さん。よろしければ今から夕食に行きませんか？」
セシリアさんが来たようだ。

「ヤバイ！早く隠れて！」「え、ちよつ…わあっ！？」シャルル君を横にして布団をかける。

「光牙さん？入りますよ？」

そう言ってセシリアさんが入ってきた。

「ああ、セシリアさん」「あら、いらしたのでしたら返事を…デユノアさんどうかなさって？」

「いやシャルル君が風邪をひいてしまったので看病していたんですよ」

そう言くとシャルルさんが咳をするがはつきり言っただけだ。

「ところで何か用ですか？」

「実は光牙さんがよろしければ一緒に夕食をと思ひまして。デユノアさん、光牙さんをお借りしても宜しいですか？」

「ど、どうぞ」

「じゃあ先に行って下さい」

「分かりました。デュノアさん、お大事に」
そう言ってセシリアさんは出ていった。

「ふう、ギリギリセーフ…」

「セーフじゃないよ…」

「え？」

「手が…」

「手？…あ」

よく見ると先程横にした時にシャルル君の胸を掴んでいた。それに気づいて手を離す。

「もう…光牙のエッチ…」
「ご…ごめん」

（触りたいなら言ってくれば良いのに…／＼／＼）

「とりあえず夕食に行ってきます。ご飯は僕と同じ物で良いですか？」

「うん、良いよ」

「じゃあ行ってきますね」僕は部屋を出ていった。

（40分後）

「只今帰りました」

トレーを持ちながら来るのはかなり辛い。

「あ、ありがとう光牙…」トレーを見た瞬間、シャルルが固まる。
持ってきたのは焼き魚定食。

（あ、しまった。たしかシャルル君は…）

「ぐぐぐ…」

「箸は苦手？」

「練習はしてるんだけどね…」

「すいません、スプーンとフォーク取ってきます」
「あ、このままで良いよ」「え？でも…」

「大丈夫だよ。光牙が食べさせてくれるから」

「…は？」

「だってさっき光牙に甘えて良いって言ったよね？」
「う…はい…」

「じゃあ、いきますよ」「うん」

「あーん」

「あーん」

魚の身をシャルルに食べさせる。

「美味しいですか？」

「光牙が食べさせてくれるから凄く美味しいよ」

「どうも」

「今度はご飯が良いな」「ご飯ですね。はい、あーん」

一口サイズのご飯を運ぶ。「あーん」

〈20分後〉

「ご馳走さまでした！ありがとう、光牙」

「嬉しければなによりです」

「ねえ光牙、僕の名前聞いてくれない？」

「名前…ですか？」

「僕の本当の名前は…シャルロット、シャルロット・デュノア。僕のお母さんが付けてくれた名前」

「シャルロットか…じゃあシャルさんですね」

「え？」

「呼び名ですよ。シャルロットさんじゃちょっと長いですから。嫌なら良いんですけど…」

「うっん！全然良いよ！ありがとう」

「どういたしまして」

〈アリーナ〉

夜中のアリーナにラウラの影が浮かんでいた。

「教官…その圧倒的強さに私は心奪われた。なのに…」

ラウラの中に1人の人物が浮かび上がる。

「滝沢光牙…！教官に汚点を与えた張本人…私はあいつを排除する」

「どんな手段を使っても！」
そう言ってラウラが眼帯を外すと、その目は金色の輝きを放っていた。

第8話 トーナメントの始まり

（廊下）

「ねえ光牙。今日も特訓するの？」

「はい。トーナメントまでもうすぐですしね」

その時、僕達の横を女子達が走り抜ける。

「なんかアリーナで代表候補生3人が模擬戦やってるって！」

「ええっ！？」

（アリーナ）

アリーナに着いた僕達が見た光景は鈴さんとセシリアさんがドイツの第3世代機、「シュバルツェア・レーゲン」を纏ったラウラに2人がかりで戦っているも、ラウラが優勢に立っている状況だった。

「このっ！」

鈴さんが龍砲を放つ。だがラウラは手を前に構えるとそこから結界のような物が発生し、龍砲を防ぐ。

（あれがA I C…またの名を電子結界と呼ばれる物か。実物は初めてだな）

そんな事を考えていると、鈴さんとセシリアさんが時間差で攻撃するも、ラウラはそれを簡単に避ける。「鈴さん！さつきからどれだけ空振りをしていますの！？」

「アンタこそ、しっかり狙いなさいよ！一発も当たってないじゃないっ！」

「ほう…敵の前で喧嘩をするとは、余程余裕があるのだな！」

そう言っただけシュバルツェアからワイヤーブレードが放たれ、2人はそれから退避するがその内回避しきれなくなり、遂に2人にワイヤーブレードが絡み付く。

「はあああっ！」

「きゃあああああ！！」ラウラは鈴さんとセシリアさんに絡み

付いているワイヤーブレードを使い、2人を激突させる。

鈴さんとセシリアさんはそのまま地面に墜落する。

「こんな物が…イギリスと中国の実力は…」

ラウラは2人に止めをさすように落下地点に接近するが、土煙が晴れたその時、セシリアさんのブルーティアーズが両腰のビットからミサイルを発射する。

「喰らいなさい！」

「っ！？」

放たれたミサイルはシュバルツェア・レーゲンに直撃。だがシュバルツェアは健在していた。

「よくも…舐めたマネを…！」

そう言つてラウラは落下の衝撃で動けない2人に攻撃を仕掛ける。しかしそれはもはや一方的な暴力とも言う位の物だった。

その攻撃によつて2人のISが破壊されていく。

「不味いよ光牙！このままじゃ2人が…」

いくら絶対防御があるから死なないとはいえ、言い方を変えれば、

“死なない程度には痛ぶる事ができる”という事だ。

「もう見てられません！僕が行きます！」

「大丈夫なの！？」

「鈴さんとセシリアさんをこのままほっておくなんて出来ません！」

「…分かった、気を付けてね、光牙」

「分かってます！チェエエンジン！ゲッター2！！」

緑色の光が包み、ゲッター2への展開が完了する。

「ドリルアアムッ！！」そのままシールドにドリルアームを突き立てる。ドリルアームにはバリアー無効化の機能が備わっており、この他にも真ゲッターには操縦者の意思によつて任意に使用できる機能が幾つかある。

バリアー無効化によつてシールドを破壊して内部に突入。その後、ゲッター1にチェンジして2人の元へ飛翔させる。

「やめろおおおお！！」

「!？」

ゲッタートマホークをシュバルツェアに降り下ろす。それを回避したシュバルツェアは距離をとる。

「どうしてこんな酷い事をするんですか！？鈴さんとセシリアさんは関係ないじゃないですか！」

「貴様は正義の味方のつもりか？丁度良い…今ここで滝沢光牙、貴様を排除する！！」

そう言うトラウラはプラズマ手刀を展開して突進して来た。僕もトマホークを構えるもプラズマ手刀とトマホークが交わる前に何かが割って入る。

「織斑先生！？（教官！？）」

そこにはISの近接ブレードでプラズマ手刀を受けている千冬姉さんがいました。「全く…これだからガキの扱いは苦勞する」

「どうしてここに？」

「デユノアが教えてくれた。模擬戦は構わんが、アーリーナのシールドまで破壊するのは黙認しかねる」

「すいません…」

「滝沢、ボーデヴィツヒ。この決着はトーナメントでつける。良いな？」

「「はい」」

「ではこれからトーナメントまでの期間、一切の私闘を禁止する！」

〈保健室〉

「あれくらい光牙さんが介入するまでもありませんでしたわ」

「あんたが来なくてもあのまま行けば勝ってたわよ！」

2人がぼやくも、負け犬の遠吠えにしか聞こえないのは気のせいだろうか…

その時、保健室のドアを破壊して多数の女子達が入って来た。

『滝沢君！デユノア君！』『な、何ですか？』

『これを！！』

そう言つて女子達が一斉に紙を差し出す。その内の一枚を読む。

「なになに……」今月のトーナメントは実戦に近付ける為、タッグマツチとする。その際、参加する生徒は必ずペアを組むこと。当日までに決まらなかつた生徒は抽選でペアを決定する』？」

「滝沢君！私と組んで！」「お願い、デュノア君！」とか何とか声があがるも、僕はあの事を話す。

「申し訳ありません。僕はシャルさんと組むことになっているので無理なんです……」

その発言を聞いたシャルはなんか驚いた表情をしており、女子達もそれを聞くと納得したのかトボトボと退出していった。

「ちよつと光牙！デュノアと組むなんて聞いてないわよ！」

「そうですね！ここは私と組むべきです事よ！」

「お二人は駄目ですよ！」「……山田先生？」「……」

「お二人のISはダメージレベルがCを越えています。こんな状態では今後問題が発生しかねませんからね。学校側として、出場は許可出来ません！」「……そんな……」

項垂れる2人。自業自得だと思つたのは内緒だ。

（光牙・シャル自室）

「あの光牙、さっきはありがとう……」

「ペアの事ですか？」

「うん。あれを聞いた時、すごく嬉しかったんだ」「気にしない

で下さい。他の人と組んでシャルさんが女の子だってバレたらヤバイですから」

「光牙は優しいね」

「そ、そうですね？」

「うん！」

そう言つてシャルさんが微笑む。

「あ……」

「どうしたの？」

「可愛い…」

「え！？」

聞いた途端シャルさんが真っ赤になる。

「か、可愛いって僕が！？」「はい」

「本当に！？」

「本当ですよ」

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして、明日も早いから早く寝ましようか？」

「そうだね」

そう言っ僕達は眠りについた。

トーナメント当日、更衣室

「うわ…、凄い人ですね」モニターを見ながら呟く。「3年には各企業からのスカウト、2年には1年の成果を確認する為なんかに来てる人が多いからね。あ、組み合わせが出たよ」

「どれどれ…ええっ！？」

「そんな…！？」

僕達は組み合わせを見て驚愕の声をあげる。

何故ならその組み合わせとは…

滝沢光牙、シャルル・デユノアペア

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒ペア

(原作通りかよ！)

思わず心の中でツッコむ僕だった。

その後、開会式やらが終了し、僕達の出番が来た。

僕は真ゲッター1、シャルさんはラファール・リヴァイヴ・カスタム2。

ラウラはシュバルツェア・レーゲン、箒さんは打鉄を展開している。「篠ノ之さんは僕が相手するから光牙はボーデヴィツヒさんを頼む

ね」

「了解です。」

『では試合を開始します。…始め!』

その合図と同時に僕とラウラ、シャルさんと篤さんが戦闘を開始した。

「喰らえ!」

ラウラがレールカノンを放つ。それをかわして接近しようとするも、6つのワイヤーブレードがそれを邪魔する。

「くそっ、近付けない!」「これで終わりか?」

「まだまだ!ゲッタービィイム!」

腹部から放たれた赤いビームがワイヤーブレードの1つを破壊する。その隙間からトマホークを構え、僕は突進する。

「うおおおお!」

トマホークを降り下ろすがプラズマ手刀に防がれる。「はあっ!」

プラズマ手刀がトマホークを押し返し、左手のプラズマ手刀がゲッター1に迫る。

「オープンゲット!」

プラズマ手刀が突き立てられる前に分離して回避し、ゲットマシンは遠ざかる。「ここはスピードで攪乱だ!チェンジ!ゲッター!」

「かかったな!」

そう言うに残っていた5つのワイヤーブレードの2つが真ジャガーと真ベアーを拘束する。

「しまった!これじゃ合体出来ない!」

「ふふふ…確かに貴様のISは合体順によつてあらゆる状況に対応出来る。だが、それはあくまで合体した時だ!合体前なら戦闘力は格段に落ちる!」

「くっ…ゲッターの弱点を見抜かれていたか…!」

「それに、これを破壊すればお前は合体出来ない!」ラウラがレールカノンを真ジャガーと真ベアーに向ける。

「ゲットマシンに武器が無いと思ったら大間違いですよ!ミサイル

発射！」

真イーグルからミサイルを放つがAICで防がれる。「無駄だ！」

「それはどうかな？僕達はペアなんだよ」

「何！？」

シュバルツェアの後ろにはラファールの両手に銃器を持ち、2つのゲットマシンを拘束しているワイヤーブレードを破壊したシャルさんがいた。

「シャルさん！ありがとうございます！」

「光牙、早く合体を！」

「了解！チェンジ！ゲッター2！」

ゲットマシンを合体させ、ゲッター2に変形する。

「箒さんは？」

「あそこ」

シャルさんが指差した先にはボロボロになった打鉄を纏っている箒さんがいた。「さあ、反撃だよ！」

「了解です！」

シャルさんに援護してもらいながら僕のゲッター2はドリルアームを構えてシュバルツェアに突進していった。

第9話 想いの蒼き剣（前書き）

20000アクセス突破ありがとうございます！
今回は少しピンクなシーンがありますのでご注意ください！

第9話 想いの蒼き剣

「はああああっ！」

ドリルアームをシュバルツェアに向け、僕は突進する。ラウラはそれをかわすも、シャルさんの射撃を喰らう。

「ちいっ！このおお！」

ラファールにプラズマ手刀を突き立てるもあっさりかわされその間にゲッター2のビームガンを放つ。

「ぐあっ！？おのれ滝沢光牙！」

シュバルツェアがレールカノンを放つ。

「オープンゲット！」

だがゲッター2はゲットマシンに分離し、攻撃を回避する。

「チェンジ！ゲッター3！」

今度は重戦車形態のゲッター3にチェンジする。

「ミサイル発射！」

両肩から四発のミサイルがラウラに放たれる。

それをレールカノンとプラズマ手刀で撃墜するも、ミサイルから煙幕が噴射され、ラウラの周りを覆う。

「何！？煙幕だと！？！」

今発射したのはスモークミサイル。爆発すると煙幕を噴射するタイプだ。

視界を煙幕によって閉ざされたラウラに今度は前後左右からミサイルが襲う。

「おのれええ！」

前と左右のミサイルは破壊したが、背後からのミサイルが直撃する。爆発で煙幕が吹き飛ぶとそこには下半身が凍っていて身動きが取れないラウラがいた。

「オープンゲット！チェンジ！ゲッター1！」

僕はゲッター3からゲッター1にチェンジする。

「決めるよ！光牙！！」

「了解！来い、蒼月刃！！」そう言うとき蒼い太刀が出現し、それを構えて突進する。

「はあああああっ！！」

高速で接近し、すれ違い様にレールカノンを両断しレールカノンが爆散する。シャルさんはアサルトライフルとショットガンで攻撃を加える。

「くうっ！舐めるな！！」

凍結を粉碎し、5つのワイヤーブレードを放つラウラ。しかしゲッター1は太刀とビーム、ラファールは銃器でそれを全て破壊した。

「だあああっ！！」

ラウラは最後の武器であるプラズマ手刀をゲッター1に降り下ろすが、敵機は太刀で受け止める。

「ちいっ！」

「かかりましたね！ゲッタービィイム！！」

そう言うときゲッター1の額から緑色のビームが放たれる。ラウラは直前に回避するも、左肩の装甲が溶解した。

「まだ終わらないよ！」

「何！？」

後ろから迫ってきたシャルさんのラファールはシールド内部に格納されていた武器、シールドピアーズを構えていた。

「シールドピアーズだと！？」

「でやああああっ！」

ラファールのシールドピアーズがシュバルツェアに直撃し、そのまま壁に叩き付ける。

「いっけえええ！！」

シャルさんはシールドピアーズで連続攻撃を放つ。

シールドピアーズはリボルバー式のいわばパイルバンカーだ。攻撃を喰らう度にラウラが仰け反る。

「ぐっ！！がっ！！があっ！！」（私は…負けるのか…）

その時、ラウラに謎の声が響く。

『汝、力を求めるか？』

「力…だと？」

『そうだ。誰にも負けない力が！』

「欲しい…圧倒的力が、欲しい！！」

その瞬間、シュバルツェアからおびただしい電撃と光が走り、シュバルツェアが姿を変える。

粘土のようにドロドロになり、そこから刀を持った人型の物体に姿を変える。

「な…あれは…千冬姉さん！？」

そんな事を考えていると敵機は僕に接近して刀を降り下ろす。

「うわあああ！！」

蒼月刃で受け止めたが勢いを殺しきれず、吹っ飛ばされる。

「う…う…」

『緊急事態発生！トーナメントは中止！生徒、来賓は職員の誘導に従って避難して下さい！！』

放送が響くと、シャッターが閉まっていく。

「光牙、大丈夫？」

「何とか…それよりラウラさんを止めないと」

「そんな！？まだやる気なの！？今回はかりは相手が悪いよ、ここは先生に任せて…」バカ野郎！！「ひっ！？」

「目の前で仲間が苦しんでるのに見捨てるなんて出来るか！僕は絶対諦めない！必ずラウラさんを助ける！！」

「光牙…ごめん…光牙の言葉で目が覚めたよ！僕も手伝う！」

「シャルさん…ありがとうございます！」

「僕がアイツを引き付ける。その間に光牙はボーデヴィツヒさんを助けて！」

「よし！行きましょう！！」そう言うとシャルさんは銃器を乱射しながら敵機に突進する。

「やああああっ！！」

それに気が付いた敵機がラファールに斬りかかる。シャルさんは刀を受け止めたが、少しずつ押し込まれていく。

「光牙、早く！」

「了解！うおおおお！」ゲッター1で一気に加速し、距離を縮める。

「必殺！神速月龍斬！！」

ゲッターエネルギーをチャージし、緑色に輝く蒼月刃で敵機を目にも止まらぬ速さで両断する。

敵機は形が崩れ、その中から出てきた意識を失ったラウラさんを抱える。

その後、現場にはシュバルツエアの残骸が残っていた。

（保健室）

「う…ここは…」

ラウラが目を覚ます。

「気が付きましたか？」

「滝沢光牙…何故私はここに？」

「覚えてないんですか？僕達と戦っている時にシュバルツエアのVTシステムが発動して暴走したんですよ」「そ、そうだったのか…すまない、私のせいで」

VTシステムとは現在は製造すら禁止されているいわば暴走モードである。

「良いんですよ。ラウラさんもこうして無事だったんですから」

「…あ、ありがとう。そのだな、滝沢光牙。私の過去を聞いてくれないか？」

「良いですよ」

ラウラさんは自分の過去を語り始めた。自分が試験管ベビーだという事、幼い時から戦闘訓練を受け軍のEースになった事、ISが発表されてから左目にハイパーセンサーを埋め込むも失敗し、そこから成績も下がり失敗作の烙印を押された事、そんななか千冬姉さん

に出会い指導を受け再び軍のエースになった事を語った「そうだったんですか…」「私はこれからどうすればいいんだろうな…」

「だったらラウラさんはラウラさんとして生きれば良いと思います」
「私として？」

「過去がどうであれ、ラウラさんはラウラさんです。これからは過去じゃなく未来の為に生きるんです」 某ロボットアニメの台詞を少し改造した台詞を言う。「未来の為に…」ありがとう滝沢光牙…
「ついでに1つ聞いていいか？」

「なんですか？」

「何故、お前はあそこまで強いのだ？」

「え！？僕って強いんですか！？うーん…自分が強いなんて思った事ないからな…ただ…」

「ただ？」

「強いかどうかは分かりませんが、僕は守る為に強くなりたいんです」

「守る為に？」

「はい。誰かに守ってもらうんじゃなく、誰かを守れる位に強くなりたいんです。だから僕は貴女も守ります、ラウラさん」

そう言つてラウラさんの頭を優しく撫でる。

「ひゃうっ！？」

可愛い声が漏れる。

「ふふっ。じゃあ僕は行きますね。お大事に」

そう言つて僕は保健室を後にした。

その後、外で待っていたシャルさんと合流し、トーナメントが中止になった事を聞いた。その直後山田先生が走ってきて男子が週2日大浴場が使える事を知らせてくれて早速大浴場に向かった。

そこではやはり原作通りにシャルさんが入ってきた。

く大浴場く

今、僕達はアニメと同じように背中合わせで風呂に入っています。

「あ…あのね光牙、実は言いたい事があるんだ」

「な…なんですか？」

「光牙がボーデヴィツヒさんと話してる時にね、実はデュノア社に電話してお父さんに「もう貴方の言うことには従えません！」って言ったんだ…」

「ええ！？それでどうなったんですか！？」
思わず振り向く僕。

「そしたらね…「そうか、なら好きにしろ」だって」あまりの衝撃に一瞬思考が停止した。つまりシャルさんは自由の身になったのだ。
「ま、マジですか？」

「う、うん」

「それは…良かったですね…」

「うん。でもね、これは光牙のおかげなんだ。光牙が僕の事を心配してくれたおかげで勇気を出して言えたんだ…」

「そ、そんな僕は…」

「ううん。光牙のおかげなんだ。ありがとう…」

そう言ってシャルさんが抱き付いてきた。すると柔らかい感触が走る。

「！？シャルさん胸が！当たってますって！！」

「こっぴうのは嫌？」

「なっ！？…嫌な訳ないじゃないですか…」

「じゃあもう少しこのままにさせて…」

その瞬間、遂に欲望を抑えられなくなり、シャルさんを抱く。そして心で思っていた事を発言する。

「シャルさん…好きです…」

「！…！…僕も光牙の事、好きだよ…」

お互いが同意した後僕達は引き寄せられるように唇を重ねた。

「光牙あ…んっ…んん」

「シャルさん…んちゅ…ううん」

その中、僕の手はシャルさんの胸に引き寄せられ、優しく揉む。

「あっ…ひゃあん…」

シャルさんから可愛い声が漏れる。その後、僕達は部屋に戻り続きをしてその夜は終わりを告げた。

「次の日、1年1組」

「えーっと…今日も転校生を紹介します…と言うか皆さんも知ってるんですけどね…」

山田先生の意味不明な発言に教室がざわめく。

そこへ入って来たのは

「シャルロット・デュノアです。改めてお願いします」

女子の制服を着たシャルさんだった。

「え？デュノア君って女？」

「つまり美少女？」

「って滝沢君！同室だから知らないなんて事は…」

「ちよつと待って！確か昨日って男子が大浴場使ったよね！？」

その瞬間、廊下側の壁を破壊し甲龍を纏った鈴さんが現れた！

「光牙あー！！」

「鈴さん！？これは深い事情が…」

「死ねえええ！！」

そう言つて龍砲を僕に発射した。

「うわあああああ！！？」

この時、さすがに死ぬと思った。だが、龍砲は僕に命中しなかった。

「……え？」

恐る恐る前を見るとそこにはシュバルツエアを纏ったラウラさんがいた。

どうやら龍砲をAICで防いでくれたようだ。

「ラウラさん！ありがとうございます！助かりまし『ガシッ』え？」

ラウラさんは僕を抱き寄せてそのまま僕にキスをした。しかもデ IPPで。

『……………！！』

これには一同、ビックリ仰天。更にラウラさんが口を離し、真っ赤

になったラウラさんが衝撃の言葉を放つ。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ、異論は認めん！」

「ええええええええええええええええええええええええ！？」
「……へ？」

その後、鈴さんとセシリアさんと篤さんに殺されかけたのは言ってもない…

第10話 光牙の力（前書き）

今回は原作のキャラを新たに2人出します。

また今回の第10話から数回はオリジナルストーリーです。

注、ストーリーが急展開なので分かりにくいかもしれませんが。

第10話 光牙の力

シャルさんが正体をばらしたのとラウラさんの核ミサイル並の爆弾発言から数日、あれからシャルさんはラウラさんと一緒の部屋になり、僕はあの広い部屋で一人を毎日満喫しています。「あゝ今日も疲れたなあ……」

ぼやきながら自室の部屋のドアを開ける。そこには……「おかえりなさい」お風呂にする？ご飯にする？それとも私？」

勢いよくドアを閉める。
(きつと疲れてるんだ、僕の部屋に裸エプロンで出迎える人なんていない筈……夢だ、夢に決まっている……!) もう一度開ける。

「おかえりなさい」(以下省略)」
また閉める。

自分の頬をつねるが痛い。また開ける。

「……現実？」

裸エプロンの女の人に訪ねる。

「現実」

そう言つてその人は僕を抱き寄せてそのままベッドにダイブ。

その結果、僕はその女の人に馬乗りになれている。

「えへへゝもう逃げられないよ、滝沢光牙君」

「どうして僕の名前を……? てゆうか貴女は誰ですか!？」「私は2年の更識楯無。この学園の生徒会長よ」

「その生徒会長さんがなんで裸エプロンで僕の部屋にいるんですか!？」

「ふっふっふ……実は生徒会長権限で私、更識楯無を貴方と同室にしたのだー!!」「……はい？」

思考が停止する。生徒会長権限で同室? そんな事に権限使うなよ……

「つまりこれから私と一緒に過ごすからよろしくね」

「……それよりも、どいてくれませんか？」

現在の楯無さんの格好は裸エプロンで僕に馬乗りしている。

「駄目」「即答!？」
「大丈夫大丈夫。中に水着は着てるから」

「そこかよ!？」

「そんなことより…」

楯無さんがエプロンを脱いで水着になると僕に倒れ込んだ。

その瞬間、女の人の香りと柔らかさが僕を包む。

「な!？何してんですか!？」「スキンシップ」

「何処が!？」

僕のツツコミをスルーし、耳元で楯無さんが囁く。

「私を同室にしたのは…貴方に興味があるからなの」「興味ってなんですか!？」優しい息が耳を刺激して頭がくらくらする。

「私は知ってるんだよ、貴方のISや貴方の秘密も」「な!？」

予想外の発言に僕は今までしていた抵抗を停止する。「…何処でそれを…」

「知リたかったら明日の昼休み、生徒会室に来なさい。そこで理由を話すわ。あ、でも生徒会室に来たかったら私の出す条件をクリアしてね」

「…条件？」

嫌な予感がした。

「条件は今夜は私を抱くこと」

「はあ!？」

何言っただこの人は!？

「嫌なら生徒会室には行かせないよ」

「うつ…分かりました…」「素直でよろしい」

結局、その夜は楯無さんを（強制的に）抱いて夜を過ごした。（でも…楯無さん綺麗だったな…）と思ったのは内緒だ。

「次の日、昼休み、生徒会室」

「やあ、待っていたよ光牙君」

生徒会室に入ると2人の人物が目に入り、1人は楯無さんで『ようこそ』と書かれた扇子を持って座っており、もう1人は僕がよく知る人物だった。

「あゝこーくんだゝやっほゝ」

僕のクラスメイトであるのはほんさんこと、布仏本音さんがいた。

「さて、本題に入ろうか」挨拶を済ませると2人は真剣な表情になる。

「まずは私達の事からかな？」

「大丈夫です。お二人については調べましたから。楯無さんは裏工作等を行う暗部に対する暗部『更識家』の当主。そこにのほんさんの布仏家も関係してるっていう事ですよね？」

「おおゝ」

歓喜の声をあげる2人。

「それで楯無さんは僕についてどれくらい知っているんですか？」

「それはね…」

「…って所まで」

「全部じゃないですか！」「あ、バレちゃった？」「はあ…これじゃあ何処までとかじゃないですよ…」「それより光牙君、貴女に頼みがあるんだけど」

「頼みですか？」

「生徒会の仕事を手伝ってくれないかしら？」

「…その見返りは？」

「更識家の恐竜帝国についての情報を貴方に渡すわ」「恐竜帝国！？」

「どうするの？」

僕は考え込む。楯無さんの言うことが本当なら有利になるかもしれないからだ。「分かりました…引き受けましょう」

「OK」契約成立ね」

「成立だゝ」

何処の企業だおのれらは。「そんなことより時間は大丈夫なの？」

携帯電話の時計を見ると次の授業である実習訓練の5分前。しかも千冬姉さんの授業だから遅れたらどうなることやら。

「しまったああああ！」僕は生徒会室を飛び出し、更衣室に向かつてスーツに着替え、グラウンドに猛ダッシュした。

授業には始まる一秒前にどうにか間に合ったがその後の千冬姉さんの授業で終わる頃にはかなり体力を消耗していた。

「では本日はこれまで！解散！！」

「し…死ぬかと思った…」「大丈夫、光牙？」

シャルさんが心配そうな声で話し掛けてきた。

「あ…シャルさん、なんとか生きてます…」

「一体どうしたのだ？いつもの嫁なら私達より早い筈だが？」

今度はラウラさんが聞いてきた。

「色々あったんですよ…」「……？」

首を傾げる2人。だが不意に千冬姉さんの声が響き渡る。

「全員注目！」

そう言うとその場にいた全員が千冬姉さんに注目した。

「よく聞け。今、この学園に不審者が侵入しているらしい」

その言葉で周りがざわつく。

「全員直ちに寮に戻り、自室にて待機を」織斑先生、あれ！」な！

？あれは！？」

振り向くとそこにはいつの間にか全身をマントで隠している何かがあった。

それはゆっくりと近付いてくる。

「その不審者、止まれ！」

千冬姉さんが近接ブレードを構える。

だがそれを無視して不審者は近付いてくる。

「聞こえないのか！止まらなければこちらも容赦しない！！」

そう言う和不審者は止まる。だが次の瞬間、マントから何かが飛び出し着地する。だがそれは人間ではなかった。青い肌、爬虫類のよ

うな黄色い目、発達した舌、爪、牙。それはメカザウルスを操る者達、八虫人類だった。

「ギヤアアアアッ！！」 『きゃああああああ！！』 雄叫びをあげると、周りの女子が悲鳴をあげる。

「な、何だこいつは…人間じゃない…？」

さすがの千冬姉さんも驚愕している。

「ギシャアアアアア！！」

八虫人類は爪を構えて千冬姉さんに襲い掛かる。

右爪を近接ブレードで受け止めるが、左爪が千冬姉さんが避けるよりも早く襲い、左肩を切り裂く。

「ぐうつ！？」

近接ブレードで相手を払うが千冬姉さんの左肩からは血が出ていた。

「織斑先生！大丈夫ですか！？」

「先生に攻撃を決めるなんて…あれはなんですよ！？」「とにかく早く先生を！」 千冬姉さんに篝さんとセシリアさんと鈴さんが駆け寄る。そこへ八虫人類が飛び掛かった。

「篝さん！セシリアさん！鈴さん！」

ISを展開しようとするが間に合わない。

「くっ！仕方ない！」

僕は体に力を込め、この世界に来てからは一度も使っていない力を使った。

「やめろおおおお！！」

「グギヤアッ！？」

その力の1つで音速をも越える速さで接近し、飛び掛かった八虫人類に右ストレートをぶちかますと、相手はそのまま吹っ飛んでいった。

「…あ、あれ？」

「なんともありませんわ？」

「一体何が…」

「大丈夫！？みんな？」

「無事か!？」

シャルロットとラウラの2人がセシリア達に近付く。「デュノアにラウラ…」

「一体何が起こったんですの？」

「光牙がみんなを助けてくれたんだよ」

事情が掴めない3人にシャルロットが説明する。

「そうだったのか…光牙、ありがとう…」

そう言っただけで光牙を見るとその姿に誰もが驚愕する。

何故なら光牙の両腕、両足、体、更に頬から目にかけて緑色の光が機械の回路のように複雑な線となって刻まれていたのだから。

「こ、光牙…その姿は?」「……バレましたか」

だがその時、吹っ飛んでいった相手が起き上がる。

「目標、滝沢光牙を確認。これより排除を開始する!」

そう言っただけで八虫人類が腕を構える。そこには二匹のトカゲの絵が刻まれた茶色の腕輪があった。

「あいつ…まさか!？」

そのまさかだった。腕輪が黒く輝き八虫人類を覆うと次の瞬間、首に二匹のトカゲが付いた武骨な外見で茶色の全身装甲のメカザウルス ドバがいた。

「グワアアッ!」

「メカザウルス!？まさかISにしたのか!？」

その時、後ろからISを展開したセシリアさん、鈴さん、シャルさん、ラウラさんが現れる。

「皆さん!？何をするつもりですか!？」

「そんなの決まってる!!」「あのISを破壊しますわ!!」

「教官を傷付けた罪を教えてやる!!」

「そんな!？危険すぎです!あいつは僕じゃないと!」「なに1人でカッコつけてんのよ!あんなトカゲもどき位私達が片付けてやるわ!!」

そう言っただけで4人はドバに接近していった。

「ダメだ、やめろ!!」
だが僕の声は届かない。

「あんた位あたしだけで十分よ!」

鈴さんが青竜刀を勢いよくドバに降り下ろす。だが、青竜刀はドバの装甲に当たると鈍い音を立てて砕けた。

「う、嘘!？」

ドバは鈴さんを虫でも払うがごとく、首のトカゲの尻尾をムチのように甲龍に叩き付ける。

「きゃああああっ!!」

甲龍はそのまま吹っ飛んでいき、地面に叩き付けられて動かなくなつた。

「そんな!鈴さんが一撃で!？」

「なんと!という性能だ!」

「早く鈴さんを!!」

「光牙!?(光牙さん!?) (嫁か!?)」

いつの間にか、光牙が3人の近くにまで来ていた。

「これで分かつたでしょう!?!あいつは僕が倒します!だから皆さんは離れていて下さい!!」

光牙の口調はいつもの優しい口調ではなく、力強い口調だった。

「分かりましたわ!ここは光牙さんに任せます!」

「絶対に帰って来い!」

「光牙!死なないでね!」そう言つて3人は鈴さんを連れていった。

「チェエンジ!ゲッター1!!」

ガントレットを構え、ゲッター1を展開する。

「モードチェンジ!バトルモード!!お前の罪を教えろ!ゲッターアア!トマホーク!!」

モードを切り換え、トマホークを取り出してドバに突進する。

「でやあああっ!!」

トマホークを降り抜くが、ドバも負けじと格闘とムチで応戦する。

「ムチが厄介だな…ならば！ゲッターブレード！！」

両腕のブレードで首のトカゲの頭を切り裂く。

すると頭を失った本体は首からずり落ちた。

ドバは距離をとって胸の装甲からミサイルを放ってきた。

「トマホークランサー！！」僕は両肩からゲッタートマホークの刃の部分だけを多数投げつける。

それによってミサイルは切り裂かれ爆発。更にトマホークランサーがドバの周りに刺さり、拘束する。

「こいつで止めだ！！」

両腕を前で構え、ゲッターエネルギーを集中させ、エネルギーの塊を作る。するとゲッター1の装甲の所々が緑色に輝きを放ち、エネルギーの塊が巨大化していく。

それが最大になった時、エネルギーの塊をドバに放つ。

「ストナアアア！！サアアアンシャイイイン！！」黄金に輝くゲッターエネルギーの塊を相手に打ち出すゲッター1の中でも最強クラスの技、ストナーサンシャインを放つ。

「グギヤアアアア！！」ゲッターエネルギーの塊を喰らうとドバの装甲が少しずつ破壊されていき、そこから内部のメカも破壊されドバは大爆発を起こし、跡形もなくなっていた。

それを確認すると僕はゲッター1を解除する。

「光牙…」

「千冬姉さん…」

後ろから左肩を押さえた千冬姉さんに声をかけられる。僕はその意味がなんなのか大体分かっていた。

「分かっているな？」

「…はい」

僕はグラウンドから立ち去る。その時、また黒い影が飛び去っていた。

第10話 光牙の力（後書き）

感想等、お待ちしております!!

第11話 光牙の過去（前書き）

小説情報を少し変更しました。ご確認ください。

第11話 光牙の過去

〔放課後、教室〕

「さてと、光牙。お前が知っている事、全て話して貰うぞ」

千冬姉さんが僕に言う。今、放課後の教室にいるのは僕と千冬姉さんの他に、山田先生、篤さん、セシリアさん、鈴さん、シャルさん、ラウラさん。ちなみに千冬姉さんと鈴さんの怪我は治療済みだ。

「お前は一体何者だ？そしてあの青い肌の人間もどきとそいつが使用していたISは一体何だ？」

「…分かりました、全て話しましょう。その事を語るにはまず僕の過去と、僕の世界について話さなければなりません。ですがこの話は他言無用でお願いします」

「分かった。それは承諾する。お前らもそれで良いな？」

『はい！』

千冬姉さんの問いに残り全員が返事を返す。

「まず僕の過去ですが…一言で言いますと、僕はこの世界の人間ではありません。」

……………いつぞや以来の沈黙。

『………は？』

千冬姉さんを含む全員が呆気にとられる。

「どういう事なの？」

「お話しましょう。僕の過去を…」

僕は語り始めた。

「まず僕が生まれる前の話です。放射線の一種、ゲッター線が発見された事が全ての始まりでした。

ゲッター線について研究が進むにつれ、ゲッター線は太古の昔人類を今の状態へ進化させた事、ゲッター線は常に宇宙から降り注いでいる事が判明し、その為ゲッター線は新たなエネルギーとして期待されました。しかし、その時から世界各地に恐竜型の兵器が出現し、

殺戮活動を繰り返していました。その兵器の名はメカザウルス。古代に生きていた恐竜を蘇らせ機械によって強化されたサイボーグです」

「恐竜を生き返らせて改造したですって!？」

「誰がそんな事を!？」

「それは、人であって人でないもの。人類の前に地球上を支配していた進化した爬虫類、八虫人類です」 「八虫人類…?」

「人類よりも遥かに優れた科学を持っていましたが八虫人類にも弱点はありました。それがゲッター線です。八虫人類が栄えていた時に宇宙から突如、ゲッター線が降り注ぎ始め、八虫人類はそれから逃れる為に地中深くに隠れました。その後、人類から地球を取り戻す為にメカザウルスを開発した、という訳です」

「そんな生き物が光牙の世界にはいたのか…」

「メカザウルスは凄まじい性能を発揮し、従来の兵器では太刀打ちできないと考えた政府は八虫人類の弱点とするゲッター線を使用する兵器の開発を世界中に命令し、そこで生まれたのがゲッター線によって稼働しゲッター線を武器にするロボ、「ゲッターロボ」でした。ゲッターロボが出撃すると戦況は一変しました。弱点であるゲッター線を武器にする為、メカザウルスを次々と破壊していき、そして遂に、八虫人類の王たる帝王ゴールの本拠地に世界各地からゲッターロボが集結し、メカザウルスとゴールの本拠地を破壊しました。ここまでの事は僕の世界の歴史として学校で習いました。しかしその生き残りがいて、9年後、ゴールは自身をサイボーグに改造し、新たなメカザウルスを引上げ、再び現れたのが僕が9歳の時。それに対抗するのが廃棄処分される予定だったゲッターロボ。しかし今度は前回のように行かず、たまに現れるメカザウルスを破壊するしか出来ませんでした。そんな中、大事件が起きました」 「大事件?」

「ゲッターロボの初代機、プロトゲッター1、2、3の3機がどっかの傭兵に強奪され、破壊活動を始めたんです」

『ええ！？』

皆さんが驚愕する。

「すぐに次世代型のゲッターロボが鎮圧に行きました。強奪から3日後、2と3は捕獲され、パイロットは逮捕されました。しかし、プロトゲッター1だけは渋々と逃げましたが1週間がたった時、遂に追い詰められました。しかしそこでんでもない事が起こりました。プロトゲッター1が突如、緑色に耀き、辺り構わず破壊活動を始めました。政府はやむ無く強行策に出てその結果、プロトゲッター1は破壊、パイロットは殺害されました。ちなみにそのパイロットを解剖している時に判明した事ですが、そのパイロットのありとあらゆる細胞がゲッター線に侵されていました。と言うより同化していました」「同化って…」

「詳しく調べた結果、人間はゲッター線を浴び続け、やがてそれが一定値を越えるとゲッター線に神経を支配され暴走する『同化』と言う現象が発生する事が判明しました。丁度この時からメカザウルスが何故か出現しなくなり、ゲッター線とゲッターロボについての研究等は一時封印される事になりました」

「ゲッター線はそんな恐ろしい物でもあったのか…」「それから3年、僕が12歳の時に世界を揺るがす事件が発生しました。とある銀行に爆弾を持った3人の強盗が現れ客達を人質に取りました。しかもその爆弾は特殊な物で威力が街を1つ吹っ飛ばす位の物だった為、警察達も迂闊に手出しが出来ませんでした。しかし偶然その場に居合わせた元ゲッターロボのパイロットが隙を突いて爆弾を処理しました。それに気付いた強盗はパイロットに攻撃を加えようとしてましたがそのパイロットは拳銃の弾を音速を越える速さで避け、どこからともなく取り出した斧で拳銃を破壊し、最後に強烈なパンチを強盗達に喰らわせ気絶させました。

強盗は逮捕されましたが、そのパイロットは特務機関で検査を受ける事になりました。その結果、パイロットの遺伝子の一部にとんでもない物が見つかりました」

「とんでもない物？」

「それはゲッター線によって変異した遺伝子、ゲッターマトリクス通称、G遺伝子です」

「G遺伝子？」

「実はゲッター線による同化は通常、つまり宇宙から降り注いでいる分では一生かかっても、同化しない可能性が高いんです。しかしゲッターロボに乗っていると話は別です。ゲッターロボのcockpitには高濃度のゲッター線が常時充満している為、パイロットは高濃度のゲッター線を浴び続ける事になり結果、同化を招くという訳です。しかしG遺伝子を持っていると細胞がゲッター線と同化せず、その人間はゲッター線と融合した新たな人類となります。その名を、ゲッターヒューマン」

「ゲッターヒューマン？」「ゲッターヒューマンはG遺伝子を持つ事で通常の人間を遥かに凌駕する能力を多数持ち、ゲッター線に同化しない為ゲッターロボに乗っても何の問題もありません。しかもゲッター線と融合しているので体が傷付いたりしてもゲッター線によって自己再生する事で通常の人間よりも傷の治りが早い、ゲッター線によってゲッターロボの武器や能力が使える、等の能力があります。更にゲッターロボは大人よりも子供、15から20歳の時が一番ゲッターロボをうまく操縦できる事が判明し、この事から政府はゲッターロボのパイロットを育成する学校を設立し、全ての子供は15歳になった時にG遺伝子が有るか無いかの検査を受け、G遺伝子が発見された場合はその学校へ入学する事になりました」

「じゃあ…お前は…」

「僕も検査を受けました。その結果、G遺伝子有りと診断されました。つまり僕はゲッターヒューマンなんです。まあ、この力で良かった事はあまりありませんでしたけど…」

「どういう事？」

「偏見ですよ。G遺伝子が見つかったからは運動能力が上がったりしました。でもそのせいで周りからは変な目で見られて、いつの間

にか僕は1人になっていましたよ。その為、中学時代は帰宅部でした。まあそれでも中学が終わるまでは地獄でしたけど」

「そんな事があったのか…」

中学の話に反応したのは篤さんだ。

「でもゲッターロボの学校は良かったですよ。何せ全員がゲッターヒューマンでしたからね。皆同じという事で結構楽しかったですよ。ただ、それも長くありませんでしたが…」

「え？なんで？」

「ある日の帰り道に僕は道路に飛び出した子供を庇ってトラックに跳ねられたんです。いくらゲッターヒューマンでも打ち所が悪かったんでしょう、僕はそのまま死にました」

『ええええええええ！？』

「じゃあなんで生きてんの！？」

「まさか幽霊なのですか！？」

「違いますよ…その後、死んだ僕の前に神様が現れたんです」

『神様あ！？』

「その神様が子供を助けたお礼として僕を生き返られてその時に僕は真ゲッターを貰い、この世界に転生した。という訳です」

一応話し終えたが皆さんは黙ったままだった。

「だがそのメカザウルスはどうしてここに居るんだ？」

「神様によると恐竜帝国、つまりメカザウルス達が規則を破ってこの世界を支配する為に転生したらしいです。あと、連中はどうやらISをベースにしてメカザウルスをISにしたようです。それと今日の戦闘ではつきりした事です、連中は僕を狙っています」

「どうして光牙を？」

「多分、僕が真ゲッターを使えるからでしょう。今のところ、メカザウルスの弱点であるゲッター線を使う兵器は僕の真ゲッターだけですからね。それでなんですが…」

「まさかIS学園を辞める気じゃないだろうな？」

千冬姉さんにまるで見抜いていたように指摘された。「！！！！見抜

かれていましたか…」

『ええええ！？』

「どういう事だ光牙！！」

「そうよ！なんでメカザウルスがあんたを狙ってるだけでIS学園を辞めなきゃならないのよ！？」

篤さんと鈴さんに続いて他の3人と山田先生も続く。「だって僕がここにいれば奴等は必然的にここを狙う。つまり僕がここにいと皆さんが危険にさらされるんですよ」

「だったら倒せば良いじゃない！？」

「鈴さん、さつきドバにやらたんじゃなかったんですか？」

「うつ！？それは…」

「それに奴等のメカザウルスは戦闘兵器です。いくらISをベースにしているても、兵器だという事は変わりません。奴等には血も涙もない、目的の為ならどんな手段をも使い、邪魔する者は叩き潰す。そこには絶対防御という保険も何もない。あるのは只の殺し合いです」

その言葉に皆さんは黙る。「それに僕は本当は赤の他人ですからね。だから僕は直ぐにでも学園を去るつもりです」

「そ、そんな…」

僕は非情の言葉を放つ。ゲッターヒューマンに目覚めた時、周りから軽蔑された時の人間不信の気持ちに蘇ってきた。

僕はそのまま教室を後にしようとしたその時―

「待て、光牙」

千冬姉さんに呼び止められた。

「なんですか？悪いですけど僕は学園を出ていきます。ここにいたら皆さんに危険が加わりま」この大馬鹿者！！「え？」

そう言つて千冬姉さんの右ストレートが僕の右頬に炸裂し、僕をふっ飛ばした。「があっ！！」

「光牙！？」

「な…何するんですか！？」腫れた右頬を押さえながら、僕は目の

前に立っている千冬姉さんを睨み付けるが「こっちの台詞だ大馬鹿者！！」

そう言つて千冬姉さんが胸ぐらを掴む。

その目には涙が出ていた。「ち、千冬姉さん…」

「お前は大馬鹿者だ！！お前が学園からいなくなつて危険がなくなれば私達が喜ぶとも思つたか！？」

「そ、それは…」

「お前はやはり変わつていない！昔から他人に迷惑をかけまいと何もかも1人で抱え込もうとする！だがな、それは時として他人の気持ちに裏切る事になるのだぞ！！」

千冬姉さんの言葉が心に突き刺さる。

「でも僕は…」

僕がそう言つと千冬姉さんが僕を抱き締めた。

「むぐつ！？」

『ええ！？』

これには皆さんびっくり仰天。

「大丈夫だ…お前が他人だとしても、お前は私のたった1人の弟だからお前はここにいて良いんだ…」
「千冬姉さん…ありがとう…」

そう言つと千冬姉さんがより強く抱き締めて来た。

それによつてだんだん意識が遠退いていき、それが途切れた時、僕の腕が垂れ下がる。

『織斑先生…（教官…）』『どうした？』

『光牙が（光牙さんが）（嫁が）（滝沢君が）死にかけてます…』

「え？……光牙！？」

その後、僕が目覚めたのは30分後だったという…

第11話 光牙の過去（後書き）

感想等お待ちしております。

第12話 狂い出す齒車

僕が目覚めてから話を再開された。

「それで光牙、お前はここを去る必要はない訳だ」「そうだぞ光牙。いくらお前が他人だとしても、光牙は光牙だ」

「そうですね、光牙さんのような方がいなくなったらこの学園が寂しくなってしまうすわ」

「全く、あんたは昔頃からそんなんだから損すんのよ。もう少し他人を頼りなさい！」

「そうだよ光牙。僕にここにいろって言ったのは光牙だよ？それなのに僕を残して何処に行くつもり？」

「全くだ。もし嫁が出ていこうものなら私が全力で止めてやる！」

「皆さん…」

「美しい友情ですね…」

「お前は1人じゃない。だからその苦しみを1人で背負うな。私達と一緒にいる」

そう言われると涙が出てくる。

「うつ…ありがとうございます…」

「おいおい、泣く奴があるか」

そう言つて千冬姉さんがまた抱き締めて来た。

「千冬姉さん…ごめんなさい…」

「光牙…」

「こ、これは…」

「まさか…」

『ブラコンとシスコン！？』『千冬姉さん…』

「光牙…」

「き、禁断の領域だ…」

禁断の領域に入りそうなのでカットします。

「とりあえずこれで僕の過去については終わりです」「うむ、それは良い。しかしお前のISについてまだ聞きたい事がある。」

「良いでしょう。可能な限りお答えします」

「じゃあ僕から良いかな？」

「どうぞ、シャルさん」「光牙の真ゲッターは分離したり合体したりするけどあれはどうなっているの？」

「あれはですね、実は真ゲッターは少し特殊なんですよ。通常のISは身に纏いますが真ゲッターはなんて言っんですかね…例えるならコクピットに乗った僕の動きとシンクロして真ゲッターも動くという訳で、あれは纏うと言うよりも乗り込んでいる、という表現が正しいのかもしれませんが」

「そうなんだ…」

「次は私だ」

「どうぞ、ラウラさん」「真ゲッターは他に通常のISと違う所があるのか？」「ありますよ。真ゲッターには『ツインモード』と呼ばれる切り換え機能があつて、通常のISと同じ『ISモード』、戦闘用の『バトルモード』の2つのモードがあります。ISモードは皆さんのと変わりませんが、バトルモードは真ゲッターを本来の姿、つまり戦闘兵器に変える訳です」

「戦闘兵器か…そうするとどうなるのだ？」

「まず、シールドバリアーと絶対防御が消えます。次にISモードでは使えない機能のリミッターが解除されて封印されていた機能が解放されます」

「例えばどんな機能があるんだ？」

「例えば、大気中のゲッター線を吸収して武器を強化したり、ゲッター線をゲッターエネルギーに変換してエネルギーを補給したり、装甲が破損したらゲッター線を使って自己修復をする、等があります」

「ISなら反則級の機能だな…」

『確かに…』

僕を含む全員が同意する。「今度は私だ」

「なんですか、箒さん？」「前から気になっていたのだが…光牙の腕の傷はどうしたんだ？」

箒さんが僕の腕を指差す。「ああ、これですか」

僕は右腕の袖をまくり上げる。その瞬間、皆さんの表情が一変した。何故なら僕の腕にはおびただしい程の傷痕があつたからだ。

「こ、これは…」

「凄い傷痕…しかもこんなにたくさん…」

「痛くないのか？」

「まあたまに少しうずく事はありませんけど、殆ど痛みはありません」

「この傷痕はどうした？怪我にしては不自然だぞ」「これは怪我じゃないんです。この傷痕は特訓で付いたんです」

『特訓？』

皆さんの声がハモる。

「なんの特訓だったんだ？」

「実は向こうの世界にいた時に小1の時から父さんから格闘技や剣道なんかを教えられて、その時の特訓で付いた傷痕がこれです。あ、腕だけじゃなくて足や体にもありますよ」

「一体どんな特訓をしたらこんな傷痕が付くんだ…？」

「はつきり言つて、思い出したくありません…」

（よっぽど酷い特訓だったんだな…）

と全員が思っただろう。

「とりあえず真ゲッターもこれくらいですね」

「そうか。今の話を聞いていると真ゲッターはかなり性能が高いようだな」

「まあ、元は戦闘兵器ですから」

「それならリミッターを付けて機能を制限する必要があるな。今のままでは万一の事になりかねん」

「そうですね、じゃありミッターを付ける機能は…」話し合いの結果、次の通りになった。

・バトルモード

（緊急時は良い）

・ストナーサンシャイン

（威力が強すぎる為。だが緊急時は例外）

・ゲッターヒューマンの力（緊急時は良い）

緊急時とはメカザウルス等が襲来して来た時等です。

「なお、メカザウルスが現れた場合は光牙を中心に迎撃を行う。異論はないな？」

『はい！』

この日、僕の心の中に本当の絆が芽生えました。

〈光牙・楯無自室〉

「はあー今日は色々ありすぎて疲れたな…」

「それじゃあお姉さんが癒してあげようか？」

楯無さんが僕のベッドに座りながら言ってきた。

「本当ですか？じゃあお願いします…」

しかし僕はここで安易に承諾した事を後で後悔するのだった…

「OK♪じゃあ遠慮なく…」そう言つと楯無さんが脱ぎ始めた。

「ちよっ！？何やってんですかあああ！？」

「ふっふっふ…光牙君が良いって言つたんだから今日は寝かさないよ…」

そのまま馬乗りになつた楯無さんが迫る。

「あ、あ、ああ…うわあああああーっ！！！！？」 その夜、

僕は楯無さんに弄られ続けました…

〈翌日、1年1組〉

「おはよう、みんな」

「あ、シャルロットにラウラ…」

「どうかした

の？」

「光牙さんを見ませんでしたか？」

「嫁か？いや見ていないぞ。なあシャルロット？」

「うん、来る途中にはいなかったよ」

「おかしいわね…いつもなら私達より早く来てる筈なんだけど…」

その時、後ろからドアが開く音が聞こえ、簾達が振り向くとそこに光牙がいた。だが…

「光牙、やっと来た…か…？」

思わず誰もが言葉を失う。何故なら今の光牙はいつものように明るく、霧困気ではなく、げっそりとしていて目の下にはクマが出来ている状態だったからだ。

「おはようございます…」蚊の泣くような挨拶をした後、おぼつかい足取りで机にたどり着くとそのまま頭を机に伏せる。伏せた時に頭をぶつけた音が響く。

「ど…どうしたの光牙…？」

「あ…あ…」

「大丈夫なのかしらこれ…」

「さあ…？」

その時、山田先生と織斑先生が入って来たので鈴は2組に戻っていた。

「おはようございます。SHRを始めます…？」

「どうした、山田先生？」「あの…光牙が…」

「？滝沢がどうかしたのか？…光牙！？」

織斑先生が異変に気が付き光牙に駆け寄る。

「どうした！？一体何があった！？」

「あ…千冬…姉さん…」

「光牙！一体どうした！？」「た…たて…なし…さんが…」

「たてなし？…2年の更識か、そういえばあいつは光牙と同室だったな…まさか！何かされたのか！？」

そう言つて光牙をぐわんぐわん揺する。

「あ…三途の川が見える…おばあちゃんが呼んでるよ…」

『行くなあああ！川は渡るなああ！！』

「織斑先生！光牙が死んじゃいます！！」

「え？」

千冬が手を放すと、光牙がそのまま倒れ込む。

そして、相川さんが何処からか取り出した木魚を叩き、最後にのほほんさんがトライアングルを鳴らす。その後、1年1組全員が（鈴と先生も含めて）合掌していた。

「お通夜か！！」

篝のツツコミで周りが正気を取り戻す。

その後、光牙は保健室に運ばれ、楯無は千冬に殺されかけたそうなの？？？

「ドバがやられたようだなガリレイ」

「も、申し訳ございません！ゴール様！！」

「まさか真ゲッターがあそこまで強いとはさすがに思いもありませんでしたか……」今、謝っているのは恐竜帝国の科学長官ガリレイ。

その他に部隊長官であるコウモリのような姿をしたバット。

そしてそれを束ねるは恐竜帝国の帝王であり自身をサイボーグに改造したゴールである。

「まあ良い。真ゲッターのデータは回収できたのだからな」

「ゴール様。今の所、我らのメカザウルス相手にまともに戦えるのは真ゲッターのみ。その他のISとやらは有象無象です」

「つまり奴等はガラスで出来た剣と同じ。真ゲッターさえ倒せば世界を手に入れたも同然です」

「だがその真ゲッターに我らのメカザウルスは二度も敗北しているではないか！」

「ご心配は無用です、ゴール様。次の作戦はメカザウルスも使用しますがメインはこれを使います」

そう言つてモニターに映し出されたのは全身が銀色で背中に同じ銀色の翼が生えたISだった。更にガリレイが作戦をゴールに耳打ちする。

「成る程…それは面白いな。ふっふっふ…」

不敵な笑みを浮かべるゴール。モニターには映し出された銀色のI
Sの名称も映し出されていた。

銀の福音

シルバリオ・ゴスペル

第12話 狂い出す歯車（後書き）

次回は番外編の予定です。

番外編第一話 女の戦い？（前書き）

初めて番外編を書きました！どうぞ見て下さい！

キャラ崩壊があるかもしれません。（特に千冬さんが）

番外編第一話 女の戦い？

僕が目覚めると保健室にいた。どうやら登校した直後に倒れて今まで寝ていたらしい。既に授業は終わっていたのでこのまま寮に帰る事にした。

「光牙・楯無自室」

「ただいま帰りました…ってあれ？」

部屋を見渡すが楯無さんの姿が見えない。

「ここにいたのか光牙」 後ろから声がしたので振り向くと千冬姉さんがいた。「千冬姉さん…あの、楯無さんは？」

「更識ならしばらく補習室で生活する事になった。何せ、お前をあの風にしたんだからな、全くだいい気味だ」

そう言つて不敵な笑みを浮かべる千冬姉さん。なんかすごく怖い…
「とりあえずそういう訳だ。しばらくは1人だがその方が良いだろう。じゃあ私は行くからな。何かあったらすぐ私に言えよ」

そう言つて千冬姉さんは立ち去つていった。

「1人か…まあ気楽だし、良いか」

僕はそのまま部屋に戻る。だがその時、この話を聞いていた影が5つあった事を僕は気が付かなかった…

「さーて、どうしようかな…暇だしゲームでもするか」
ゲームを取り出そうとした瞬間、

コンコン

「ん？」

ドアを叩く音がした。

「はい、どなたですか？」 「わ、私だ光牙…」

声の主は箒さんだった。

「あ、箒さんでしたか。入って良いですよ」

そう言々と箒さんが入って来た。

「何か用ですか、箒さん？」

「じ…実は、お前に謝ろうと思って…」

「僕に謝る？何をですか？」

「そ、それは…」

尋ねると箒さんは黙ってしまふ。何か箒さんが謝る事なんてあったかな？

「???」

「謝るといふのは…あの時、お前がセシリアと決闘する事になった日の放課後の事だ…」

「あの日の放課後ですか？確か…箒さんと剣道の特訓をしましたよね？」

→第1話参照

「そ、そうだ…あの時、私はお前の事情も知らずにきつい事を言った。それで今、その事を謝りに来たのだ…」

つまり僕がゲッターヒューマンに目覚め、その力のせいで周りから軽蔑され、少しでもそれから遠ざかる為にあえて部活をやらなかったのを箒さんは勘違いしてしまいその事を謝りに来たのだ。

「別に良いですよ。全然気にしてませんから」

「だ、だが…」

僕がそう言っても箒さんは納得が出来ていないようだ。

「それに僕はむしろ箒さんにお礼が言いたいです」「お礼？私に…？」

「はい。あの時ですよ、僕が過去の事を話した時です。あの時箒さんは僕が赤の他人だと分かってても、箒さんは僕の事を受け入れてくれました。それが凄く嬉しかったです。箒さん、本当にありがとうございます」

「……」（ヤバイ！物凄く可愛い！というかもう我慢できない！！）

篤さんの心情が分かるわけもなく、いきなり篤さんが僕を抱き締めてきた。

「んぐう!？」

（篤さんの胸で息が…息ができない…）

「光牙」

（ヤバイ…このままでは…）

僕の意識が途切れかけたその時！

『ちよつと待ったあ!!』

「え!？」

僕の部屋にセシリアさん、鈴さん、シャルさん、ラウラさんが入り、それに驚いた篤さんが僕から離れる。「はあ…危なかった…」

「光牙!大丈夫?」

シャルさんが僕の容態(?)を確認する為に駆け寄ってきた。

「まあ、なんとか…」

「そつか、よかったあ」 「嫁が無事なら何よりだ」 いつの間にかラウラさんもいた。

「それよりも篤!問題はあんたよ!!」

鈴さんが篤さんをビシッと指差す。あまり人を指差すのは良くないと思いますが…

「そうですね!!光牙さんを争う中で抜け駆けはなしですわ!!」

…え?僕を争う?

「わ、私はそんなつもりはない!私は光牙に謝りに来ただけであつて…」

「じゃあなんで光牙を抱いていたの!!」

シャルさんが篤さんに詰め寄る。

「な!?!お前から見ていたのか!?!」

「証拠映像もあるぞ」

そう言つてラウラさんがビデオカメラを取り出す。

なんでそんなもん持つてるんだ…

「とにかく!どうして光牙さんを抱いていたのですか!?!」

「どうしてなのよ!？」

「どうしてなの!？」

「どうしてなんだ!？」

上から、セシリアさん、鈴さん、シャルさん、ラウラさんの順番で
箒さんに詰め寄る。

しかし、その後ろからゆっくり迫ってきているある人影に僕は気付
いた。

「あああああ…」

僕はとつさに危機的状況を皆さんに知らせる。

「み、皆さん!」

『なんだ!？』

全員の声がハモる。

「う、後ろに…」

『後ろ!？』

皆さんが後ろを振り向いた瞬間、場の空気が凍りついた。

「貴様ら…私の弟の部屋で何をやっている…」

何故ならば、後ろにはどす黒いオーラが見え、とんでもない殺気を
放つ千冬姉さんがいたからだ。

『あ…あ…あ…あああ…』皆さんの顔が恐怖に染まる。BGMは「
ジヨーズ」がぴったりだろつ。

「光牙…すぐ終わるから待っている…」

「…はい」

『光牙!？（光牙さん!？）（嫁!？）』

すいません、皆さん。この状態になった千冬姉さんに従わないのは
自殺行為ですから…

心の中で呟くと皆さんの悲願の声が聞こえる。

「光牙!助けてくれえ!」「まだ死にたくありませんわ!！」

「お願い光牙あ!！」

「僕を見捨てないでえ!！」「嫁え!！行くなああ!！」→上か
ら箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ。

皆さん図星なのかよ…

「やめて下さい、先生…光牙の前で…」

シャルさんが意見するが、「なんだデュノア、お前の光牙に対する気持ちは隠すようないい加減な気持ちなのか？」

「そ…それは…」

あつさり千冬姉さんに切り返された。

「篠ノ之、オルコット、凰、ボーデヴィツヒ。お前らはどうなんだ？」

残りの4人も顔を真つ赤にして黙り込む。

しかしその沈黙を破る者がいた。

「ぼ、僕はいい加減な気持ちじゃないです！！僕は光牙が大好きです！！それに光牙も僕の事を好きだって言ってくれました！！」

シャルさんが顔を真つ赤にして叫んだ。

皆さんは（千冬姉さんも）啞然としている。

「光牙さんがデュノアさんを好きだって言った…？」「本当なのか！？」

シャルさん以外の皆さんが今度は僕に詰め寄る。

「本当です…」

『なあにいいいい！！？』

皆さんが絶叫する。

何故に千冬姉さんまで…

「まさかシャルロットに先を越されるとは…」

「不覚でしたわ…」

「くうく悔しい！！」

「このラウラ・ボーデヴィツヒ、一生の不覚…」

「おのれ、デュノア！よくも光牙を！！」

だから何故千冬姉さんまで…

「ですが！告白とデートの順番は関係ないですわ！！」セシリアさんはまだ諦めていないようだった。

「そうよ！どうせならここは光牙に順番を決めてもらいましょう！

！」

鈴さんの意見に賛成したのか、皆さんが僕に注目する。すいません、かなり怖いです…特に千冬姉さんが。「じゃあ…平等にじゃんけんで良いですか？」

『それでよし！！』

良いのかよ！！

結局決まった順番は

←

1、シャル

2、箒

3、ラウラ

4、鈴

5、セシリア

6、千冬

ちなみにこの順番で毎週土曜日にその人が僕の部屋に泊まるという暗黙のルールがIS学園に生まれた事を僕は後で知った…

番外編第一話 女の戦い？（後書き）

ヒロインとのエピソードはこれから話の合間に番外編として入れていくつもりです。

来週からテストなので次の更新は来週の金曜日以降になります。

番外編第二話 シャルと買い物（前書き）

デート編、第一弾です。

はつきり言って短いです。すみません。

番外編第二話 シャルと買い物

前回暗黙のルールが生まれ、その通りになっている。何故なら今、僕はシャルさんと一緒に寝ているからだ。

暗黙のルールについては番外編第一話を参照

「光牙〜」

シャルさんが甘えた声で猫みたいにすりよってきた。「よしよし」そんなシャルさんの頭を優しく撫でる。

「気持ちいい〜」

…ヤバイ。今のシャルさんがマジで可愛い。

「シャルさん…」

「なに？」

「…キスして良いですか？」

「え…」

尋ねるとシャルさんの頬が赤く染まる。

「…うん、良いよ…」

シャルさんから返事を貰うと、そのままシャルさんを抱き寄せて僕は唇を重ねる。

「ん…光牙…」

「シャルさん…んん…」

キスが終わり、僕は唇を離す。

「ねえ、光牙。明日って暇？」

「明日ですか？特に何もありませんが…」

そう言うときシャルさんの表情が明るくなった。

「じゃあ明日買い物に行かない？買いたい物があるんだけど…」

「僕でよければ良いですよ。丁度欲しい物もありますから。」

「やった〜じゃあ明日の9時半に校門に集合ね！」

「了解です。」

（もしかしてこれはデートなのかな…？）

そんな疑問があつたが、僕達はそのまま眠りについた。

〽翌日、校門〽

「お待たせ」

僕は約束の9時半より少し早く到着し、約束通り9時半にシャルさんが来た。

「待った？」

「ほんの少しですけどね。じゃ、行きましょうか」　そう言って僕はシャルさんの手を握る。するとシャルさんの頬が少し赤く染まつた。

「あ…うん」

その後、モノレールに乗り都市部にある巨大デパートに向かった。

〽20分後〽

デパートに着いた僕達はまずシャルさんの買い物を済ませる事にした。　しかし、シャルさんの買い物とはどうやら臨

海学校で使う水着だったらしく今は女性水着売り場にいる。

「ここって僕が入っていいのかな？」

「ねえ光牙！僕にはどっちが似合うかな？」

そんな僕をよそに、シャルさんは黄色とオレンジの水着を見せた。

「うーん…」

（黄色も良いけど…やっぱりここは…）

「オレンジの方がな？」

「分かった！じゃあ買ってくるから待っててね！」

そう言うときシャルさんはレジに向かった。

精算を済ませたシャルさんが戻ってきた後、僕も水着を買って近くのレストランで昼食を食べる事にした。「光牙、昼からはどうするの？」

シャルさんがスパゲティを食べながら僕に今後の予定を聞いてきた。「実は個人で欲しい物があるのでそれを買うに行こうと思います」

「そうなんだ。じゃあ僕も付き合っね、色々見てまわるのも面白そうだし」

シャルさんは不満1つ漏らさず承諾してくれた。
そんな優しいシャルさんに僕は心の中でお礼を言ったのだった。

〈ゲーム売り場〉

まず最初に来たのはゲーム売り場だ。僕が狙っているゲームはこないだ新発売したかなり人気のあるやつなので、到着すると僕は直ぐ様売り場に突撃した。

目当てのゲームはなんとかギリギリで買う事ができた。

「光牙って…ゲーマーなのかな？」

シャルさんがなんかぼやいているがまだまだ欲しい物があるので次の所に直行した。

〈2時間後〉

「これで充分ですね」

「す、凄い量だね…」

今は買い物一通り終えたので近くのベンチに座って少し休憩中。
ちなみに今日買ったのは次の通りだ。

・ゲームソフト×1

・漫画×4

・DVD×2

・プラモデル×3

その多さにシャルさんは少し引いていた。

「そろそろ帰る？」

「いえ、最後にちょっと行きたい所があるので少しの間、荷物見てくれませんか？」

「うん、良いよ」

「じゃあ行ってきます」 そう言って僕は近くのアクセサリショップに入った。

「あれ？光牙ってアクセサリーなんか付けてるかな？」

（20分後）

「お待たせしました」

「光牙、何買って来たの？」

「これですよ」

僕はシャルさんに荷物の中から1つの小包を渡す。

「これは？」

「開けてみて下さい。」

シャルさんが小包を開ける。中に入っていたのはブレスレットだ。

「僕からのプレゼントですよ」

そう言った途端、シャルさんが顔を赤らめ、何故か涙を流していた。

「光牙…ありがとう…大切にするね！」

そう言うときシャルさんはブレスレットをはめる。

「じゃ、帰りましょうか」「うん」

ご機嫌になったシャルさんと一緒に僕は学園へ戻るのだった。

しかしその翌日、IS学園中に僕とシャルさんが買い物に出掛けた事がなんと新聞部の新聞に載せられていた。どうやらあのデパートに新聞部のメンバーが居たらしく僕達が買い物をしている写真まで載せられていた。そのせいで僕はシャルさん以外の5人から1日中追いかけ回されたまれたのであった…

その夜、残りの皆さんにはあの時アクセサリーショップで買って後で渡すつもりだったプレゼントを渡し、それによって、どうにか機嫌を直してくれたのであった…

第13話 安息と陰謀（前書き）

臨海学校編スタートです。

第13話 安息と陰謀

今日から皆さんが待ちに待った臨海学校が始まった。目的地は海のある所で、近くの大きな旅館に泊まる事になっている。

目的地に着くと、荷物を部屋に置いて早速海に泳ぎに行く事にした。

「これは凄いな…」

水着に着替えた僕の目の前には真っ白い砂浜と綺麗な青い海が一面に広がっていた。

「光牙」

景色に見とれているとシャルさんの声がしたので声がした方を向く。

「あ、シャルさん… ってうわぁ!？」

シャルさんはこないだ買ったオレンジの水着を着ていたのだが、僕が驚いたのはシャルさんの隣にタオルでぐるぐる巻きにした何かが居たからだ。

「なんですかそれは…」

「ほら、光牙に見せてあげれば？」

「み、見せるかどうかは私が決める事だ…」

聞き覚えのある声が耳に響く。

「その声は… ラウラさんですか？」

「折角水着に着替えたのに勿体ないよ、ラウラ」

「ま、待て。私にも心の準備が…」

どうやらラウラさんは水着の自分が恥ずかしくてタオルを巻いているようだ。

「じゃあ僕だけ光牙と遊んじゃうけど、良いのかな？」

ラウラさんをからかうようにシャルさんが言う。

「そ、それは… 良いわけがないっ！」

そう言うのとタオルをほどいてリボンが付いた黒のビキニを着たラウラさんが現れた。

「わ、笑いたければ笑うがいい…」
「別に変な所なんて無いでしょ？」

「はい。ラウラさんによく似合って可愛いですよ」 「な！？嫁！
それは本当か！？」

顔を真っ赤にしたラウラさんが迫る。

「ええ、本当ですよ」

「そ、そうか。可愛いのか…」

ラウラさんは俯いてモジモジしている。

「じゃ、行きましょうか！」

「うん！」

「お、おう…」

僕はシャルさんとラウラさんの手を取り、そのまま海へと向かった。

一方こちらは…

鈴「なんか差を付けられてる…」

セシリア「今は光牙さんに近寄り難いですわ…」

第「光牙…」

3人「「「はあ…」」」

光牙達を見ている3人がため息をつく。

その頃光牙達は…

「それえ！」

「わあっ！やったな！お返しです！」

「ひゃあ！」

シャル達と水浴びをしていた。

「可愛い…私が可愛い…んぶっ！？」

まだ照れているラウラにシャルがかけた水が命中する。

「あ、ラウラ大丈夫…？」 「か、可愛いと言われると…私は…」

「まだ照れてたの…」

「随分楽しそうだな、お前達。」

「……え?」

振り向くと黒いビキニに着替えた千冬が居た。

「ち、千冬姉さん……」 元からスタイルが良いため、千冬に見とれている光牙。更に千冬は挑発的な目線を2人に送る。

「ぐっ……ライバル多いのにまさか織斑先生まで加わるなんて……でも！僕は負けません!!」（それに僕には先に告白しているアドバンテージがある!）」

「例え教官だとしても、私は諦めるはありません!!」「大きく出たな、小娘共……だが私とて、簡単に我が弟をやるつもりは無い!!」（……千冬姉さん達の間には火花が見えたのは気のせいだろうか……?）と思う光牙だった。

その後、ビーチバレーやサーフィンをして光牙達の自由時間は終了したのだった。

自由時間が終了した後、僕達は夕食を食べた。

食べ終わった後に女子の数人が僕の部屋を聞いてきた。しかし、僕の部屋はもしもの為にと千冬姉さんと同じ部屋だった。その事を言ったら何故か皆さんがっかりしていたけどどうしたんだろう?

その後、露天風呂に入り今は部屋でのんびりしている。

「久しぶりですね、千冬姉さんと2人きりになるのは」

「……そうだな」

千冬姉さんは冷蔵庫から取り出したビールを飲んでいる。

「光牙、あれをやってくれないか?最近体が凝っているな」

「ああ、良いですよ」

「じゃ、頼む」

（教員室前）

「あら?皆さん何をしていますの?」

光牙の部屋に行こうと思ったセシリアが光牙の部屋の襖に耳を当て

ている箒、鈴、シャル、ラウラに声を掛ける。

それを鈴がジェスチャーで静かにするようにと伝えたと光牙の部屋を指差す。

セシリアは意味が分からずとりあえず襖に耳を当てると、中の会話が聞こえてきた。

「久しぶりだから緊張してるんですか？」

「そんな訳あるか。やるなら早くしろ」

「了解です。じゃあ行きますね……」

「んっ……そこだ……もつと強く……」

「これくらいですか？」

「ああっ……気持ちいい……」「こっちも結構固くなってますね」

「んんっ！……そこ……ああ……」

箒「こ、これは……もしや……」

セシリア「そのもしやですわ……」

鈴「遂に踏み込んだの……光牙……」

シャル「光牙が……禁断の領域に……」

ラウラ「き、教官と嫁が……せ……」

4人『言うなあ……！』

ラウラ「むぐっ！？」

4人がラウラの口を塞ぐ。その後5人は入るに入れず部屋に戻って行ったが、酷く落胆していたという……

〈教員室〉

「随分楽になった。ありがとう光牙」

「それなら何よりです」　ちなみに光牙がやっていたのは只のマッサージだった。

〈翌日〉

翌日、顔を洗う為に洗面所に向かっていると庭を覗きこんでいる箒

さんが居た。「箒さん」

「あ、光牙か…おはよう」「おはようございます。それより何してるんですか？」

僕が訪ねると箒さんが庭を指差す。そこにはウサミミが生えており、後ろには『引き抜いて下さい』という看板がある異様な光景があった。

「えーっと…これは…」

「私は何も見ていない！」箒さんは現実逃避をして立ち去っていった。

「……どうしょ、これ」「光牙、おはよう」

後ろから声がしたので振り向くとシャルさんとラウラさんが居た。

「どうした嫁？こんな所に突っ立って何をしているのだ？」

「その…なんと言いますか…」

僕はウサミミをつかんで引き抜く。しかしその先には何も無かった。

「あれ？」

その時、空が輝いたのをラウラさんが見逃さなかった。

「っ！上だ！！」

「「え！？」」

見上げると何かが降ってきてそのまま庭に盛大な土煙をあげて突き刺さる。

よく見るとそれは巨大なニンジンだった。

『あはははは、あはははは』

ニンジンから笑い声が聞こえるとそれが真つ二つに割れ、中からワンピースを着用しウサミミを付けた女性が現れる。

「引っ掛かったねーこーくん」

「…お久しぶりです、束さん」

「うんうん、おひさだね」

そう言つと束さんがニンジンから飛び降りる。

「ところで箒ちゃんは何処かな？」

「…あっちに行きました」僕はさっき箒さんが立ち去って行った方

向を指差す。「あつちだね〜ありがとう〜じゃあまた後でね〜」
そう言つて束さんは立ち去つて行つた。

「こ、光牙…今の人は…？」

完全に空気扱いされていたシャルさんが話しかけてきた。

「篠ノ之束さん。箒さんのお姉さんです」

「「ええっ!?!」」

2人が驚愕する。当たり前か。何故ならあの人がISを作つたのだから。

「岩場」

朝食をとつた後、僕と専用機持ち、それに箒さんが人目につかない岩場に集められた。

「よし、専用機持ちは全員そろつたようだな」

ジャージに着替えた千冬姉さんが確認する。

「ちよつと待つて下さい。箒は専用機を持つてないですよね？」

そこへ鈴さんが疑問を投げつける。

「ああ、それは「ち〜ちや〜ん」あの馬鹿…」

千冬姉さんの声が遮られると後ろから岩肌を滑り降り、大ジャンプで千冬姉さんに迫る束さんが居た。

それをアイアンクローで押さえ付ける千冬姉さん。

「久しぶりだねち〜ちゃん!さあ愛を確かめ合おう!ハグハグしよう!」

「うるさい!」

「ぎゃん!?!」

そう言つて肘打ちが頭に炸裂する。あれは出席簿より痛いな…

「うむう〜相変わらず容赦のないアイアンクローと肘打ちだねっ!」

しかし束さんはすぐに立ち直ると、今度は近くの岩に隠れていた箒さんに向かう。

「やつぽ〜久しぶりだね〜箒ちゃん♪」

「ど、どうも…」

篤さんが束さんの事を苦手にしているのは変わらないようだ。

「うんうん、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ？
篤ちゃんも結構成長したみたいだね。特におっぱいが…げふあ!!」
その瞬間、束さんの顔面に篤さんの鉄拳が炸裂する。「殴りますよ！」

「もう殴ってる。ひどいよね。こーくん？」

殴られた所を押さえながら僕に迫る束さん。

「は、はあ…」

この場合、適当な相づちを打つしかなかった。

「ねえ光牙、この人知ってるの？」

疑問に思った鈴さんが僕に聞いてきた。

「この人は篠ノ之束さん。篤さんのお姉さんでISを開発した人です」

「ええ！？この人が!？」

僕の言葉に驚く鈴さん。

「その通りっ！私が天才の束さんだよ。はろ。おしまいっ！」

その自己紹介に呆れている千冬姉さんと篤さん。

「さあ！大空をご覧あれ!!」

そう言う空から銀色で八面体の何かが突き刺さる。すると銀色の部分が量子分解されそこには紅いISが出現した。

「これが！天才の束さんお手製にして世界のどのISよりも高性能の第4世代機！篤ちゃんの専用機『紅椿』だよ!!」

「だ、第4世代機!？」

「各国でやっと第3世代機の試験機が開発されているのに!？」

紅椿が第4世代機だという事にシャルさん達が驚愕する。

「それじゃあ動かしてみよっか。篤ちゃん、お願い。」

「は、はい!」

そう言われ、篤さんが紅椿を纏った。

「じゃあ模擬飛行開始。」そう言う紅椿が飛翔し、これまでのI

Sとは比べ物にもならないスピードで空を飛んでいる。

「すごい……」

「あれが第4世代機の性能……」

これには皆さんも驚きを隠せずにいた。そんな中、飛行を終えた紅椿が着陸する。

「うんうん♪テストはばっちりだね♪」

「これが……私の力か……」

篤さんは紅椿に感動しているようだ。

こうして篤さんにも専用機が与えられた。

くアメリカ、ハワイ沖く

篤に紅椿が与えられた頃、アメリカのハワイ沖ではアメリカとイスラエルの共同開発の第3世代型IS『シルバリオ・ゴスペル』通称、福音のテストが行われていた。

しかし、そこから少し離れた場所に恐竜帝国の部隊長官バットが佇んでいた。

「……行け、メカザウルス　ナブよ……!」

そう言つてバットが右手を開くと小さな銀色の粒が福音に飛んでいく。

その粒とはウイルス型メカザウルス　ナブ。ナブは対象の内部に侵入、そして対象を内部から侵食し対象を我が物とする超小型のメカザウルス。しかも侵食が進むにつれて対象と融合し、最後にはメカザウルスと化してしまうのだ。

放たれたナブは福音の装甲の僅かな隙間から侵入し、内部のプロگرام等を書き換え始め、福音への侵食を開始する。

そしてプログラムが書き換えられると今度は両腕と両足の装甲を突き破り、そこから侵食によって異常に鋭利な爪が生えた手足が出現し、頭部の人間であれば口にあたる部分が割れ、牙が生えた口となった。

「グオオオオオッ!!!!!!」獣のような雄叫びをあげると背中

翼を展開し、搭載されている多数の砲口、『シルバーベル』を辺りに放った。すると周りにいた軍艦や戦闘機は一瞬にして破壊された。「ふふふ…これで良い。行け！メカザウルス　ルシバーよー！！」バットはそう言うのと瞬時に飛び去り、残されたルシバーは音速で何処かに飛び去ったのだった。

く岩場く

紅椿のテストが終わり、各専用機持ちは追加装備の調整に入った時、右腕の真ゲッターが緑色に輝いた。

「え！？まさかメカザウルスが！？」

「どうしたの光牙？」

光に気付いたのか、シャルさん達の視線が僕に向けられる。

「実はメカザウルスが「織斑先生」！！」

僕の声が山田先生に遮られる。山田先生は慌てた様子で手に持っていた携帯を千冬姉さんに差し出す。

その内容を見ると、千冬姉さんの表情が変わる。

「授業は中止だ！これより非常体勢とする！それから専用機持ちは後で私の所に来い！では一時解散！」

千冬姉さんの声が響く。

僕達は旅館に戻ると千冬姉さんの所へ急いだ。

第14話 迫り来る墮天使

「旅館、臨時司令室」

僕達は千冬姉さんに案内され、旅館の一室に大型モニターやコンピユータ等が置かれた部屋にいる。

全員が集まったのを確認すると千冬姉さんが口を開いた。

「先程、アメリカとイスラエルが共同開発した第3世代型IS『シルバリオ・ゴスペル』通称、福音が実験中に暴走し付近のアメリカ軍を攻撃し破壊、その後、実験区域を離脱した。目標は外部からのコントロールを一切受け付けず、その後衛星による追跡の結果、現在はマツハ2で移動しており、60分後にこの海上から3キロ離れた空域を通過すると予想される。そして学園上層部からの命令により本作戦を我々が担当する事になった。教員は訓練機を使い、付近の空域と海域を封鎖する。よって、今回の作戦は専用機持ちに福音を止めてもらう。しかしお前らには拒否権がある為、強制はしない。もし拒否したい場合は速やかに立ち去って構わない」

千冬姉さんがそう言うが誰も出ていかなかった。

「では作戦会議を始める。意見がある者は挙手するように」

「はい」

手をあげたのはセシリアさんだ。

「目標の詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。しかしこれは極秘事項だという事を忘れるなよ。もし漏洩したら裁判にかけられ最低5年は監視の対象になるからな」

「はい！」

返事をするや福音のデータが送られて来た。

「CPUによる無人機で主な武器は翼に付いている36個の砲門『シルバール』による広範囲殲滅型か……」「この機動力の高さも厄介だね……しかも格闘性能は未知数……」

「今回の作戦の要は一撃必殺と高速移動だ。その為、それぞれ

に特化した機体を持つ者が参加してもらおう」「一撃必殺っていったら……」

鈴さんがそう言うのと僕に視線を向けた。それに続くように皆さんの視線も僕に向けられる。

「……え？僕ですか？」

「そうだな。攻撃は滝沢、お前だ。その為、ストナーサンシャインの使用を許可する」

そう言うのと真ゲッターのリミッターが1つ解除された。

「……分かりました。やります！」

「後はどうやって真ゲッターを運ぶかな……」

ラウラさ

んが呟く。攻撃するまでにエネルギーを消費してはストナーサンシャインが使える回数が減ってしまうからだ。

「あの、バトルモードはダメですか？」

僕は千冬姉さんに問いかける。

「……そんな事をすれば、お前は世界中から更に狙われる事になりかねん。バトルモードは許可できん」

その理由には反論出来なかった。ゲッターが兵器だと知られたら、僕やゲッターを世界中が今より激しく狙って来るかもしれないからだ。

「じゃあ……どうするんですか？」

「そうだな……」

皆さんが考え込む中、完全にこの場の空気を読まない者が現れる。

「それならばお任せあれ！！」

そう言うって天井の板を外してそこから束さんが飛び降りた。

「ねえねえ、ちーちゃん！！今私の頭の中で、もっと良い作戦がナウプレーティングだよ……」

「……邪魔するなら出ていけ」

迫る束さんをアイアンクロウで押さえつける千冬姉さん。

「まってよお！ここは断然！！篝ちゃんの紅椿の出番なんだよ……！」

「……何だと？」

その言葉に反応する千冬姉さん。

つまり束さんの作戦はこうだ。

紅椿で僕を高速で運んでもらい、接近したら僕がストナーサンシャインで福音を破壊するという魂胆だ。

「今はこれしかないようだな。束、紅椿の調整は？」

「私にかければ7分あれば余裕だよ！」

「よし。では30分後に作戦を開始する！篠ノ之と滝沢は準備しておけ！！」

「はい！」

返事をする、僕は準備に入った。

30分後、付近の海上へ

紅椿の調整が終わり、準備が整ったので今は付近の海上で待機しており、僕はゲッター1を展開している。『2人とも準備は出来たかな？』

千冬姉さんから通信が入る。

「はい！」

「大丈夫です先生！任せて下さい！」

篤さんが明るく答える。

『滝沢』

「千冬姉さん！？」

『安心しろ、これはプライベートチャンネルだ。篠ノ之には聞こえない』

「あ、はい…」

いつの間にか千冬姉さんはチャンネルを切り替えたようだ。

『実はな…はつきり言って今の篠ノ之は危険だ。自分の力を過信し浮かれている』

千冬姉さんが僕も薄々感じていた事を発言する。

『そこで、もしもの時はお前がフォローしろ。分かったな？』

「はい。あ、それと先生に言わなきゃいけない事があるんですけど」

ど……」

『ん？何だ？』

僕はメカザウルスの件を千冬姉さんに話した。

『……なるほど。確かに偶然にしてはタイミングが良すぎるな』

「あくまで仮定なんですけど、もしかしたら福音が暴走したのはメカザウルスの仕業だと思うんです。だから……」

『分かった。その時はまた指示を出す。今は作戦に集中しろ』

「はい！」

僕は千冬姉さんに返事をする。そんな中、作戦開始時間になった。

僕は篝さんの紅椿につかまる。

「準備は良いか、光牙？」「は、はい！」

「大丈夫だ。お前は私がしっかり運んでやるからな！」

「分かりました！」

「よし、行くぞ！」

そう言つて紅椿が加速し、大空に飛翔していった。

（旅館、臨時司令室）

真ゲッター達が移動を開始してから20分が経った。「山田先生、

滝沢達は？」「現在も飛行中。後10分以内に福音と接触する予定です」

千冬が山田先生に確認をする。他の専用機持ちはモニターに釘付けになっていた。だが、その時だった。

「お、織斑先生！」

突如、山田先生が緊迫した声をあげた。

「どうした！？」

「ふ、福音が進路を変更しました！」

「何だと！？何処に向かっている！？」

そう言われると山田先生がキーボードを叩き、福音の進路を割り出した。

「進路、出ました！」

山田先生がそう言うともニターに福音の進路が表示される。

「こ、これは…」

一同が驚愕する。何故なら福音は真ゲッター達に向かって移動していたのだから。

「直ぐ2人に通信を開け！」

「は、はい！」

「光牙…」

シャルは光牙から貰ったブレスレットを見て、光牙が無事に帰ってくる事を願った。

僕は今、篝さんの紅椿に福音の所まで運ばれている途中だ。計算ではあと少しで福音と接触する事になっている。

そんな中、僕達に通信が入る。

『篠ノ之、滝沢！聞こえるか！？』

千冬姉さんが緊迫した声で問いかけてきた。

「千冬姉さん？どうしたんですか？」

『よく聞け、福音が進路を変更し、今はお前達の方に向かっていない！』

「ええっ！？」

その事に対し、僕達は驚愕の声をあげる。

『どうやら光牙の推測通りのようだな…』

作戦は中止だ、一度態勢を立て直す！2人は直ぐに帰還「先生、もう無理みたいです」…何？』

篝さんが千冬姉さんの言葉を遮る。その理由は僕もすぐに分かった。何故なら既に福音がハイパーセンサーに反応する程、接近していたのだから。

「そんな…もうこんな近くにまで…」

「大丈夫です！このまま先公して叩きます！！」

そう言う篝さんは両手に刀を持ち、福音に突進していった。

「篝さん！？ダメです！」

『篠ノ之！やめろ！！』 しかし箒さんから返事は帰ってこない。

『ちっ、仕方ない…滝沢、真ゲッターのバトルモードを許可する』
『良いんですか？』

『非常事態だ、仕方あるまい。しかし危険な状況になったら速やかに篠ノ之を連れて離脱しろ。場合によっては強行手段でも構わん』
『了解！』

そう言うとき真ゲッターのリミッターがまた1つ解除された。

「モードチェンジ！バトルモード！！」
バトルモードに切り換え、更に蒼月刃を出現させて右手に持ち、僕は箒さんの後を追った。

メカザウルス ルシバーが接近する紅椿に気付き、翼に付いているシルバーベルを放つ。

箒はそれをかわし、背中の一部を切り離すとそれがビットになり、ルシバーに向かっていく。ルシバーはビットをかわすが、その間に接近していた箒の両手に握られている刀を回避する事はできず、両腕をクロスさせて受け止める。

「うおおおお！」

箒はそのまま押し込むが、ルシバーが刀を弾き、距離をとる。

「逃がすか！」

そこへ斬撃による衝撃波をルシバーに放つ。

それをルシバーは先程と同じように腕をクロスさせて防ぐも、箒は攻撃を休める事なく、衝撃波を連続で放つ。

「このまま押し切る！！」

しかしルシバーはガードを解くとナブの侵食によって生まれ、腕に格納されていた剣を展開し、その剣で衝撃波を次々と真つ二つにしていた。

「なに！？」

箒は驚きを隠せなかったが、その間にルシバーが剣を構えて箒に接

近する。 しかしその間に赤いビームが放たれ、ルシバーは接近を中断し、ビームが放たれた方向を確認する。

そこには右手に蒼月刃を持った真ゲッター1がいた。「箒さん！大丈夫ですか！？」

「光牙か！私は大丈夫だ！それより、これであいつを倒せるな！」

「え？あ、はい……」

（やっぱり箒さんは自分の力を過信しているな……）

そんな事を考えているとルシバーが雄叫びをあげながら突っ込んできた。

「ガアアアアアッ！！」

「ゲッタービィイム！」腹部からゲッタービームを放つと、それをかわして敵機は一旦距離をとる。

「よし！一氣に決めるぞ、光牙！」

「は、はい！」

そう言うのと僕はルシバーに向かって機体を飛翔させた。

第15話 過ちと決意

「でやああああっ！」

「はあああああっ！」

僕と箒さんがルシバーに時間差で斬撃を仕掛ける。

しかし、僕の斬撃はかわされ、箒さんのは剣で受け止められる。

「トマホークブーメラン！」

空いている左手でゲッタートマホークをルシバーに投げつけるが敵機は翼からをビームを放ち、それによってトマホークは破壊されてしまった。

更にそのビームが僕に迫る。

「オープンゲット！」

ゲットマシンに分離し、ギリギリのタイミングでビームをかわす。

「チェエンジ！ゲッター2！！」

スピード重視のゲッター2に合体し、ビームを掻い潜りながら接近する。

「ドリルハリケエエン！！」

ドリルアームを高速回転させ、背中のブースターを全開にする。すると青い光がゲッター2を包みこみ、青い流星となったゲッター2がドリルを構え、ルシバーに猛スピードで突進する。ルシバーが少し移動したので致命傷にはならなかったが、それでも右肩の装甲を破壊した。

「グアアアアアアッ！！」すると敵機は怒りのような雄叫びをあげ、シルバーベルを僕に向けて一斉発射した。多数のビームが迫る。「オープンゲット！」

ゲッター2を分離し、ゲットマシンでビームの雨を掻い潜る。

「チェエンジ！ゲッター1！！」

ゲッター1に合体し、蒼月刃を構える。するとルシバーが剣を構え、突っ込んで来た。

「私を忘れてもらっては困る！」

完全に僕に注意が向いていたルシバーに紅椿のビットが襲い掛かり、更に箒さんが刀で追撃を加え、敵機を押さえつけた。

「光牙！今だ！！」

「はい！」

動けないルシバーに向けて僕は突進する。

「うおおおっ！」

しかし、あと少しで蒼月刃の間合いに入るという所でセンサーが海上の何かを捉えた。

「っ！あ

れは！？」

そのまま僕はルシバーの横を通り過ぎ、その何かに接近する。その正体は船だった。

「光牙！？うわっ！？」

光牙に気を取られた箒はルシバーに蹴りを入れられ、その間にルシバーは紅椿から離れてしまった。

「データが無い…密漁船か！？」

僕は発見した船を検索したが該当データは無かった。『光牙！何をしているのだ！？折角のチャンスだったんだぞ！？』

箒さんから批判の通信が入る。

「密漁船が居るんですよ！ここで民間人を巻き込む訳にはいきません！ここは一時撤退して体勢を立て直しましょう！」

『密漁船だと！？そんな奴らに構うな！奴らは犯罪者なんだぞ！』

いつもの箒さんなら絶対に言わない事を今の箒さんは言った。僕はそれに反論する。

「そん

な！？だからって、見殺しなんかには出来ません！！」

『お前は犯罪者を庇うのか！？もういい！あとは私1人でやる！！』

そう僕に言い放つと箒さんはルシバーに向かっていった。

「箒さん、やめろ！！」

しかし通信を切ったのか紅椿はルシバーに攻撃を加えている。

そんな中、ルシバーが紅椿にシルバーベルを放った。箒さんはそれを回避したが流れ弾の幾つかが密漁船に向かっていった。しかし箒さんは完全に無視し、ひたすら攻撃をしている。　「くっ！

チェンジー！ゲッター3！！」　僕はゲッター1から

ゲッター3にチェンジーし、海面に着地する直前にホバー移動に切り換える。

「ミサイルストーム！！」

背部のタンクから大量のバリアミサイルを放ち、流れ弾に命中する直前に起爆させる。するとそこに円型の青いバリアが出現し、流れ弾を全て防いだ。

「よし！オープンゲット！チェンジー！ゲッター1！」ゲットマシンに分離後、ゲッター1に合体し、ルシバーに向けて飛翔した。

その頃、箒はルシバーに攻撃を加え続けていた。

接近して刀で斬り付け、敵機が離れば、衝撃波とビットで追撃し、イグニッションブーストで接近し再び斬り付ける。

しかし、箒は攻撃に夢中になりすぎていたせいでシールドエネルギーを考慮していなかった。そして衝撃波を放った時、遂にシールドエネルギーが尽きた。

「しまった！？シールドエネルギーが！？」

「ガアアアアッ！」

ルシバーが剣を構えて行動不能になった紅椿に迫る。「箒さん！危ない！！」

その時、ルシバーと紅椿の間にゲッター1が割り込み、ルシバーの剣が紅椿の盾になったゲッター1の腹部を貫いた。

「ぐああああああ！！」その瞬間、強烈な痛みが腹部を中心に身体中を駆け巡った。

「こ、光牙！？」

「グオオオオオオ！！」

ルシバーはゲッター1にシルバーベルの砲口を向ける。

「やめろおおおおっ！！」しかし、箒の叫びがルシバーに届く筈もなく、シルバーベルから放たれたビームがゲッター１に突き刺さる。

「うわあああああつ！！」ビームによってゲッター１の所々が破壊されていく。この瞬間、光牙の意識は途絶えた。

「光牙ああああ！」

箒が悲痛な叫びをあげる。ルシバーは攻撃を終えると剣を引き抜き、何処かに飛び去って行った。

剣を引き抜いた瞬間、ボロボロになったゲッター１が海に落下していく。

箒はただその場に立ち尽くし、自分の不甲斐なさを責めていた。

「私のせいだ…私のせいで、光牙が…」

『篠ノ之！どうした！？応答しろ！篠ノ之！！』

千冬から通信が入るも、箒はその時、放心状態になっていた。その後、教員達によって光牙は救出され箒も他の教員に連れられて帰還した。

帰還後、光牙は意識不明の重体の為、直ぐ様治療が行われた。幸い命はとりとめたものの、真ゲッターと光牙、両者とも深刻なダメージを負ってしまった、どちらも自己修復能力で回復してはいるがいつ目覚めるかは分からない状況にあった。

（旅館、教員室）

「光牙…」

箒の先には点滴を繋がれ、酸素マスクを付けて昏睡している光牙が居た。

「…すまない…」

そついい残すと箒は部屋から静かに立ち去って行った。

（砂浜）

箒は光牙の部屋から立ち去った後、近くの砂浜に座り込み、先程の

戦闘の自分を思い出していた。

『そんな奴らに構うな！奴らは犯罪者だぞ！』

『お前は犯罪者を庇うのか！？もういい！あとは私がやる！』

「私は…私は最低だ…」

箒は過去に同じような事を既に経験していた。

その時は憂さ晴らしの為に暴力を振る舞っていた。今回は自分の力を過信し、周りの事など考えず暴力を震い、そのせいで今回は光牙に大怪我を負わせてしまった。今の箒の心は自己嫌悪と、光牙に対する罪悪感でいっぱいだった。

その時、後ろから足音が聞こえ、振り向くと鈴、セシリア、シャルロット、ラウラが立っていた。

「みんな…」

「それ、落ち込んでるってポーズかしら？」

「……」

箒は答えない。

「…はつきり言うけど、光牙が怪我したのはアンタのせいよ」

鈴の一言に立ち上がって拳を握り締める箒。

「…これからどうするの？まさか、これで終わりじゃないでしょうね？」

「…私は、もうISに乗らない…」

その言葉を聞いた途端、鈴が箒の胸ぐらを掴み、ビンタを喰らわせた。箒はそのまま倒れ込む。

「バツカじゃないの！？専用機持ちつてのは責任があんのよ！そんなワガママが許される訳ないでしょ！？それともアンタは、戦うべき時に戦えない臆病者なわけ！？」

鈴の言葉が箒に響く。

「どうしろと言っんだ…敵の居場所も分からないんだぞ！？私だっ

て…私だつて戦いたいには決まっているだろう！」

箒は心の底で思っていた事をぶちまけた。

「やつと本音が出たわね」「え？」

「みんな気持ちちは1つだつて事だよ」

「負けたまま終わつて良い筈ないでしょう？」

「このまま終つては、嫁に顔向け出来んからな」

「み…みんな…」

「結局、どうすんのよ？」鈴が箒に尋ねた。

「私は…私は戦う。このまま終つて良い筈がない！」箒はいつもよりも増して、真剣な表情で言い放った。「OK。これで大丈夫ね。じゃ作戦会議に入るわよ」鈴がそう言うのと全員の表情が引き締まる。

「ラウラ、福音は？」

「ここから25キロ放れた沖合上空に滞空している。衛星による目視で発見した」ラウラはシュバルツェアを右腕だけ部分展開し、データを表示している。

「さっすがドイツ軍ね。皆、準備は良いかしら？」

鈴が尋ねると、残り4人が頷く。

「じゃあ、リベンジに行くわよ！」

鈴がそう言うのと5人はそれぞれの愛機を展開し、進路をルシバーに向けた。

（沖合）

沖合にはラウラのデータ通りにルシバーが体を丸めて滞空していた。そこへ弾丸が撃ち込まれ、ルシバーに命中する。

その弾丸とはラウラのIS、シュバルツェア・レーゲンに砲戦パツケージ『パンツァー・カノニア』を装着し、それにより2門に増設されたレールカノンから放たれた弾丸だった。

それにより、ルシバーが戦闘体勢に入る。

「来るぞ！」

ラウラがそう言うのと他の4人も構える。

「旅館、臨時司令室」 一方、箒達が無断で出撃し戦闘を開始した事はリーダーによって判明し、すぐに千冬達に知れた。

「お、織斑先生！これは…」

「あいつら…」

「命令違反です！呼び戻しましょう！！」

「まあ、こうなるとは思ってはいたがな…」

千冬は薄々こうなるだろうと察していたようだ。

「沖合」

「今度は…負けない！」

箒は刀を握り締める。

戦闘体勢に移行したルシバーが攻撃体勢に入る。

専用機チームはそれぞれの機体を散開させ、ルシバーとの戦闘を開始し始めた。

第16話 誓い（前書き）

今回から新たな描写を取り入れます。詳しくは僕のマイページの活動報告「お知らせ」をご覧ください。

第16話 誓い

「ナレーションSIDE」 専用機チームはルシバーに対抗する為、第以外の4人は強化装備を装着していた。

セシリアはブルーティアーズ6基をブースターとして使用する強襲用高機動パッケージ、『ストライク・ガンナー』。

鈴は機動力を犠牲に龍砲を新たに2つ装備した、機能増幅パッケージ、『崩山』。

シャルロットは実体シールドとエネルギーシールドを2つずつ装備した、防御パッケージ、『ガーデン・カーテン』。

ラウラはレールカノンをもつ追加し、新たにシールドを装備した、砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装着しており、第の紅椿は第4世代機の為、追加装備は無い。

そんな専用機チームにルシバーがシルバールベルを放つ。第達はそれを回避、又は防御してダメージを抑え、専用機チームが反撃に出る。まずセシリアがブースターの為、ビットとしての機能を封印したブルーティアーズの代わりに装備した大型ライフルでルシバーを狙い撃つ。

ルシバーはそれを意図も簡単にかわすが、鈴が4つに増設された龍砲で逃げ道を塞ぐ。

そこへシャルロットが銃器、ラウラがレールカノンを叩き込む。

その攻撃をガードした為、ルシバーの動きが止まる。「第！今よ！」

鈴が第に指示を出す。

「はあああああっ！」

紅椿がイグニッションブーストで一気に接近する。

そしてすれ違い様に刀を降り下ろし、ルシバーの翼を切り落とした。翼を失ったルシバーは切断された翼と共に、海に落下していく。

落下した衝撃で水柱が立った。

「やったの？」

鈴が呟く。しかしその瞬間、ルシバーが落下した海面が光輝き、そこから光の玉に包まれたルシバーが浮上し空中に舞い上がる。

「まさか…セカンドシフトか!？」

その通りだった。ルシバーの全身から水色の翼が生え、それを広げる。

「グオオオオオオツ!!」咆哮をあげるルシバー。

そこに鈴とセシリアが攻撃を加える。

しかし、ルシバーはセカンドシフトによって跳ね上がった機動力で回避し、翼を広げると先程とは比べ物にならない程のビームを全方位に放った。

その瞬間、全機が攻撃を一時中断し、回避、又は防御行動に入る。しかし威力も数も倍加したビームの前に無傷で済む筈が無かった。

『うわああああああああああ!!』

それぞれの機体に水色の槍が突き刺さり、全員の叫びがこだまする。シールドエネルギーが削られ、武装が破壊され、装甲に弾痕が刻まれる。

そして搭乗者にも、絶対防御を貫通して激しい痛みが襲い掛かる。

それに追い討ちを掛けるが如く、ルシバーが翼を広げ、ダメージを負った専用機チームに向かって行った。

く???く

「…うつ…ここは…?」

光牙は目を覚ますと、辺りを見渡す。

辺りの光景は黒だった。

左右も、上下も、辺り一面が黒一色で、まるで闇の中に放り込まれたようだ、と光牙は思った。

「一体ここは…?確か僕は箒さんの盾になって…」

その時、光牙の頭に箒達の叫びが響く。

『うわああああああああああ!!』

「っ!?!この声は…皆さん!?!」

その瞬間、光牙の目の前が真っ白になり、思わず目を閉じる光牙。

光牙が目を開けると、視界に飛び込んできたのは水色の翼を広げた銀色の敵機と激戦を繰り広げている箒達の姿だった。

「な！？何で皆さんがあいつと戦ってるんだ！？」

光牙

は箒達が無断で出撃し、戦闘を行っている事を今知った。戦況を見ていると、数では箒達が上回ってはいるが、強大な力を持つ敵機の前に苦戦を強いられている事が分かった。更に箒達の機体をよく見ると敵機の攻撃を喰らったのか、装甲や武装が破壊されていたり、装甲の所々に弾痕やヒビが刻まれていた。

それでも箒達は敵機との戦闘を続けている。

セシリアはライフルを破壊されたのでストライク・ガンナーを収納、右手には近接ブレードを持ち、敵機に向けてブルーティーズ4基によるオールレンジ射撃と両腰からのミサイル攻撃を行っているが、残りのエネルギーは後僅かだった。「ここまで来て、諦める訳にはいきませんわ！！」

「セシリアさん……」

鈴はビームによって破壊され、残り2つになった龍砲を敵機に放ちながら僅かな隙を見つけてはヒビが入った青竜刀で斬り掛かつてはいるが、有効なダメージを与えられずにいた。

「今やられたら、光牙に合わせる顔が無いのよ！！」

「鈴さん……」

シャルロットは残弾が少ないアサルトライフルとショットガンによる銃撃を敵機に浴びせてはいるが、敵機から放たれるビームの群れを防ぐ為に使用していたエネルギーシールドと実体シールドの内、実体シールドが先程の攻撃で破壊され、シールドエネルギーの残量が200を切っていた。

「僕は絶対諦めない！」「シャルさん……」

ラウラは損傷が少なかったが、それでもレールカノンの1つと追加装備のシールドが破壊されてしまい、残り1つになったレールカノンで遠距離から狙撃を行っているが、ビームが左腕の装甲を破壊し、

シールドエネルギーが半分を切った。「くっ！！命令違反までしたのだ！このまま引き下がる訳にはいかない！！」

「ラウラさん…」

箒は先程の攻撃で紅椿のビツトと刀一本を破壊されてしまい、残り一本の刀を両手で握り、敵機のビームを掻い潜りながら敵機に斬撃を仕掛けていた。

「私は戦う！自分の力に溺れる事無く、この紅椿で戦い抜く！私を守ってくれた光牙の為に！！」

「箒さん…」

箒も、セシリアも、鈴も、シャルロットも、ラウラも、誰1人諦める事無く戦っている。

だが光牙は、それを見ているだけだった。

仲間が必死に戦っているのに光牙はそれをただ見ているだけ。なにも出来ないでいる。

光牙は先程からまるで見えない壁の向こうから箒達を見ているような感覚を感じていた。

「僕は…なにも出来ないのか…」

光牙は拳をぎゅっと握り締めた。

その時、人の気配を感じた光牙が振り向くとそこには神様が佇んでいた。いつの間にか戦闘の風景は消え、元の黒一色の空間に戻っていた。

「神様…」

「光牙、まだ彼女達は諦めていない。君はどうするんだ？」

「僕は…」

神様の問い掛けに思わず言葉が詰まる光牙だった。

「ナレーションSIDE OUT」

「光牙SIDE」

神様

にどうするかと聞かれ、思わず言葉が詰まってしまった。

皆さんは諦めずに今も必死に戦っている。

そんな皆さんを見ていたら皆さんとの様々な出来事が心に次々と浮かび、目からは自然と涙が流れ落ちる。

僕の

世界ではあまり良い思い出は無かったからだ。 中学3年の時、

僕にG遺伝子が見つかり、ゲッターヒューマンだという事が判明した。その後、勉強や運動等の能力が格段に上がっていった。

しかしその時から僕の周りにいた人間が1人、また1人と減っていき、いつしか僕は1人になっていた。

それから友達だった人間やクラスメイト等周りの人間に僕に対する態度が一変した。 話し掛

けても無視されたり、いきなり殴られたり、机に悪口が書かれていたり、学校に来るなとまで言われた。とことん軽蔑され、拳げ句の果てには家族にまで化け物扱いされた。

そして人間が嫌いになり、遂にキレた僕はゲッターヒューマンの力を解法し、今まで僕を軽蔑した奴らをボコボコにした。

その中には女子もいたが関係無かった。僕は男女問わず全員を病院送りにした。その為、僕は警察からは厳重注意を受け、その中学からは無期停学処分を言い渡された。そしてそれは、卒業式の日になっても解かれる事は無かったので僕は卒業式には出ていない。 ゲッターロボの学校に入学してからは皆がゲッターヒューマンだった為、そのような事は無かったが、入学してから1ヶ月

も経たない内に事故にあった為、よく考えたら僕には本当の友達はいなかった。 正直、この世界でもまた軽蔑され

ると思っていた。でも篤さん達は違った。僕がゲッターヒューマンだと言うことを知っても僕を受け入れてくれた。

そして何より、千冬姉さんは本来は赤の他人の僕を、家族として暖かく迎え入れてくれた。

それが凄く嬉しかった。

この世界で初めて出来た、本当の友達、本当の家族、そして本当に好きな人も出来た。

しかし今、その人達が危機に瀕しているのを僕は只見ているだけだ。「嫌だ…僕は皆さんを…本当の仲間を失いたくない…これから皆さんと笑ったり、泣いたり、一緒に戦ったり、ケンカしたりするか

もしれない。…でも僕は…それでも僕は皆さんを守りたい！僕の力で！この真ゲッターで！！」

その瞬間、真ゲッターが眩い輝きを放つ。

「こ、これは！？」

「君の覚悟、聞かせて貰ったよ。君になら託しても良いようだ。真ゲッターの真の力を」

そう言うと、神様が持っていた杖から緑色の光が放たれ、真ゲッターに宿る。

「神様：ありがとうございます！！」

僕がお礼を言うと神様は笑顔で頷いた。

「行きなさい、滝沢光牙。仲間と共に、ゲッターと共に、未来を勝ち取るのです！！」

がそう言うとき白い光が僕を包んで、視界が真っ白になった。

神様

（教員室）

「う…うん…」

僕が目を開けると少し見慣れた天井が目に入る。

体を起こすと自分が今まで布団に寝ていた事が分かった。

体に痛みは無く、点滴と酸素マスクを外し、置き手紙を残す。そのまま女子達に気付かれないように部屋から出ると静かに中庭に向かった。

（中庭）

中庭に着いた僕は待機状態の真ゲッターを見る。

先程から鈍い緑色の光を放っていた。

「さあ行こう、真ゲッター！」

そう言つてガントレットを構える。

「チエエエンジン！！ゲッター１！！」

叫んだ瞬間、緑色の光が僕を包み、0.5秒という短時間で真ゲッターが展開した。

「バトルウィング！！」

背中の黒い翼を展開し、大空に飛翔する。

「皆さん、待ってて下さい！今助けに行きます！！」

そう言っ僕は更に加速し、皆さんの元へ急いだのだった。

第17話 真なる者の真の力

（ナレーションSIDE）

ルシバーと専用機チームの戦闘は尚も継続していた。圧倒的な性能を持つ敵機の前に、専用機チームは勇敢に立ち向かっていた。しかし、それも限界に近づいていた。

既に第達の愛機は満身創痍とも言える状態だった。

ブルーティアーズはビットを全て破壊され、右肩と左足の装甲が半壊。近接ブレードは既に折れていた。

甲龍は右腕の装甲と青竜刀を失い、龍砲も残り1つになっていた。ラファール・リヴァイヴ・カスタム2はアサルトライフルと右足を破壊されており、手元に残っているのは弾が三発残っているショットガンだけだった。

シュバルツエア・レーゲンはワイヤーブレードと残っていた右腕のプラズマ手刀が破壊され、残りの武器はボロボロのレールカノンが1つだけだった。

紅椿は装甲のあちこちにヒビが刻まれ、最後の武器である刀にもヒビが入っていた。

更に、全員のシールドエネルギーが100を切っており、搭乗者の心身もボロボロだった。

「だあああつ！」

そんな状況にも関わらず、第がルシバーに突進する。放たれたビームの間を縫って接近し、敵機に刀を降り下ろす。

しかし、その斬撃は剣によって防がれ、その衝撃で刀が折れてしまった。

「何！？」

それが一瞬第の動きを鈍らせ、それを逃さんとはかりにルシバーが第の首を掴んだ。

「があつ！？」

その手に掛ける力を強めていくルシバー。

その力が強くなるにつれて次第に箒の意識が遠退いていく。

「箒!」「今助けますわ!」

それを見ていたセシリア、鈴、シャルロットが箒を救出すべく接近する。

だが、敵機が放ったビームによって行く手を遮られ、接近できない。
「ラウラ!」

シャルロットが後衛の仲間の名を叫ぶ。

「ダメだ!今撃つては箒に当たってしまう!」

ラウラはレールカノンで敵機を狙撃しようとしたが、敵機の傍に箒が居るため、中断せざるを得なかった。そんな中、ルシバーの翼が紅椿を包んでいく。

視界がぼやけていく中、箒の脳裏にある人物の顔が浮かぶ。

それは、力を過信した自分を庇い、傷付いた人。

(本来は違うが)過去に自分を守ってくれた人。

それから密かに想いを寄せている大切な人。

箒の目から涙がこぼれる。無意識にその人物の名を口にし、謝罪した。

「……光牙……すまない……」敵機の翼が紅椿を包む。

そこから放たれる攻撃によって、箒は海に落下していく。

――箒であった。

「ゲツタアアア!ビィィイムツ!」

突如放たれた赤い閃光がルシバーに迫る。

ルシバーは攻撃を中断、箒を掴んでいた手を放し、回避行動に入った。

敵機の締め上げから解放され、落下していく箒を鈴とシャルロットが受け止める。

「箒!大丈夫!?!」

「しっかりして!」

「う…大丈夫だ!」

鈴とシャルロットの声で失いかけていた意識を取り戻す箒。

ゆっくりと目を開き、ぼやけていた視界がはつきりしてくる。

視界の先に佇む2つの機体。一方は水色の翼を広げている銀色の敵機。

もう一方は赤と白の全身装甲でボディの所々に緑色のガラスのような物がはめこまれ、背中からは黒い翼を広げ、両腕には鋭い刃が生えていた。

頭には両横から斜め上に伸びている角のような物があり、全体的な姿は、何処か人間らしい印象だった。

箒はそれを知っていた。

無論、残りの4人もだ。

名を真ゲッターロボ。

その第1形態、真ゲッター1。

彼女達はそれを操る者も知っていた。

それは、彼女達にとって大切な人。

箒にとっては密かに想いを寄せてた人物。

その人物の名を箒は叫んだ。

「光牙！」

此方に気付いたのか、真ゲッターが近付いてきた。

「皆さん！大丈夫ですか！？」

やはりその声は光牙だった。

いつの間にか周りには全員が集まっていた。

「…光牙？本当に光牙なの？」

シャルロットが恐る恐る聞いた。

「本当に僕ですよ。皆さんには心配かけましたね。すみませんでした」

光牙が箒達に謝罪し、箒達を見渡した。

箒達は嬉しさのあまり、涙目になっており、特にシャルロットとラウラは多量の涙を流していた。

再会は後です」

「とりあえず、感動の

そう言つてルシバーを見る光牙。

「あいつを倒すんだな？」涙を拭つて箒は光牙に尋ねた。

「はい。でも皆さんには悪いですが、後は僕がやります」

その言葉を聞いた途端、箒達の表情が一変した。

「はぁ！？あんた何言つてんのよ！」

鈴がそれに反論する。

「そうだよ！いくら光牙でもまだ病み上がりなんだから危ないよ！」

「いくら嫁の頼みでもそれは聞けない！」

シャルロットとラウラが続ぎ、箒とセシリアも反論した。

「皆さんの気持ちはよく分かります。でも皆さんはボロボロになるまで僕の為に戦ってくれました。今度は僕が皆さんの為に戦う番なんです。だから後は僕に任せて下さい。お願いします！」

そう言つて頭を下げる光牙。箒達はしばらく考え込み、結論を出した。

「分かった…光牙の言うとおりにする。だが約束してくれ！必ず帰つてこい！」「必ず、戻つてきて下さいね！」

「戻つて来なかつたら承知しないんだからね！」

「僕は光牙の事を信じてるからね！だから、必ず帰つてきてね…」

「私から言えるのはこれだけだ。絶対に勝つてこい！異論は認めん！」

「皆さん…分かりました！勝利と共に、必ず帰つて来ます！」

そう言つて敵機に向かっていく光牙を箒達は送り出した。

箒達から激励の言葉を貰い、ルシバーと対峙する光牙。

「僕はお前を倒す…箒さん達と一緒に帰る為に…！箒さん達を守る為に…！」

「グアアアアアアア！」光牙が言い終わると、敵機が剣を構えて真ゲッターに突撃する。

「見せてやる！真ゲッターの真の力を…！」

ワンオフアビリティー発動！ゲッターアア！バアアスト！！」

その瞬間、真ゲッターに貯蔵されていたゲッターエネルギーが衝撃波のように広がり、突進して来た敵機を吹き飛ばす。

その中心には全身が緑色に輝き、背中からはバトルウィングよりも巨大な翼、放出されたゲッターエネルギーによって構成された翼が生えている真ゲッターが居た。

体勢を立て直した敵機が緑色に輝く真ゲッターの姿を見て、僅かだがたじろいだ。

「さあ！行くぜ！」

そう言った瞬間、真ゲッターが姿が消えた。

「ガアッ！？」

ルシバーが辺りを見渡すが真ゲッターは居ない。

その時、ルシバーの左側を風のようなものが吹き抜け、次の瞬間、ルシバーの左腕が吹き飛んだ。

「ガアアアアアッ！！」悲鳴に似た咆哮をあげるルシバーの切り口からは紫色の血がドクドクと流れ出ていた。

そしていつの間にか、ルシバーの後ろに真ゲッターが佇んでいた。

ルシバーの左腕が吹き飛んだのは急激に跳ね上がった機動力で敵機の傍を駆け抜けた真ゲッターが、すれ違い様にゲッターブレードで左腕を斬り飛ばしたからだ。ルシバーが後ろに佇む敵機に翼から高密度のビームを放つ。

「何度も喰らうか！」

水色のビームの雨を真ゲッターは残像が見える程の機動力でかわしていく。

「遅いぜ！」

あっという間にビームを掻い潜り、敵機の腹に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「オープンゲット！チェンジ！ゲッター2！！」

ゲットマシンに分離し、ゲッター2にチェンジした光牙はブースターを全開にし、驚異的な機動力で敵機に接近する。

そのままの勢いを殺さずに敵機にドリルアームを突き立てる。

「喰らえ、真マツハスペシャル!!」

すれ違い様に敵機の装甲の一部を削り、そこから方向転換してまたドリルアームを突き立てる。

繰り返していく内に真ゲッター2が敵機の周りを駆け巡り、連続攻撃を加えていく。

「目だ!耳だ!鼻だつ!!」原作、『ゲッターロボ』でゲッター2のパイロットをしている神隼人の台詞を言いながらルシバーの所々を削っていく光牙。

真マツハスペシャルが終わってゲッター2が距離をとった時にはルシバーの所々から紫色の血が垂れており、装甲も殆ど破壊されていた。

「ガ!ガアアアア!」まだ諦めていないのか、敵機は翼からビームの雨を放つ。

「だったらビームにはビームだ!Wゲッターアア!ブラスター!!」真ゲッターは腹部と頭部の両方から同時にゲッタービームを放ち、そのビームが交わって赤と緑の螺旋を描く極太のビーム、「Wゲッターブラスター」が真ゲッターに向かう水色のビームを消し去り、ルシバーに向かっていく。

ルシバーはギリギリで回避したが、その間に真ゲッターは敵機の懷に飛び込んでいた。

「おらあああつ!!」

敵機の胸部に強烈な右ストレートを叩き込む。

「ゴアツ…」

敵機が口から吐血し、後ろに大きく後退する。

今の一撃が効いたのか、右ストレートが炸裂した所からスパークが散っている。「一気に決めるぜ!ゲッターアア!シャイイイイン!」

これを好機と見た光牙は、今まで使わなかった真ゲッター最強の攻撃の準備に入る。ゲッターエネルギーがフルチャージされ、機体が

私はまだ心のどこかで光牙を過小評価していたようだ。私達は光牙の元へ急いだ。

「やったな！光牙！」

途中で光牙に通信を繋げた。しかし返事は帰ってこない。

視界の先で佇んでいる光牙を見ると、次の瞬間、真ゲッターが解除され、生身になった光牙が落下していく。

「こ、光牙！」

セシリア達も異変に気付いたようだ。

私はイグニツションブーストで一気に加速し、光牙に向かう。

間一髪の所で光牙を受け止め、安否を確認する。

「光牙、光牙！しっかりしろ！」

体を少し揺する。目を閉じているが息はしていたので気を失っただけのようだ。「篤さん！光牙は！？」

セシリア達が聞いてくる。「大丈夫だ！気を失っているだけのようだ！」

その言葉にセシリア達も安心したようだ。

「光牙…ありがとう…」

私はそっと光牙に礼を言い、仲間と共に帰路についたのだった。

第18話 消滅！真ゲッターロボ！！（前書き）

遅くなつてすいません。

第18話、どうぞ。

第18話 消滅！真ゲッターロボ！！

「千冬SIDE 旅館、教員室」私の目の先には光牙がいる。私のたった1人の家族であり、かけがえのない弟が目を閉じて横たわっていた。

あの時、光牙が密かに抜け出して篠ノ之達の所に向かったのは布仏達が無知にさせてくれた。

私が部屋に戻ると布団は既にもぬけの殻で、布団には置き手紙が残っていた。

千冬姉さんへ

篤さん達を助けに行ってください。

心配しないで下さい。

光牙

何が「心配しないで下さいだ」！

篤達には黙っていたが、お前が墜ちた時不安で仕方がなかったんぞ！全く…

そんな事を考えながら光牙を見る。

今だ光牙が起きる気配は無い。

その後、福音が破壊されたのをリーダーが感知してから約2時間後、篠ノ之達が帰還した。言いたい事は山程あったが、光牙が意識を失っていたので、とりあえず光牙は布団に寝かせ、篠ノ之達に説教を飛ばした。それが終わったので、今は光牙の傍にいる。

篠ノ之達が帰還してからまるで死んだように眠り続けている弟。私の心の中には光牙がこのまま目覚めないのではないか、という不安が渦巻いていた。

「う…」

その時、光牙から僅かに声がもれた。

「光牙！」

「…違う…」

「え？」

「…違う…僕は化け物なんかじゃない…」

私はこの言葉を聞いてハッとした。

光牙は過去にゲッターヒューマンだということ友達はおるか、親にまで化け物扱いされたと言っていた。恐らく光牙には、その時の事で魔されているのだろう。

「…1人にしないで…誰か…助けて…」

光牙から涙がこぼれ落ち、呼吸が荒くなる。

流石に危険だと思った私は、思わず光牙を抱き寄せた。

「大丈夫だ、お前は1人じゃない。私が傍にいる」「ほん…とう…に？」

光牙の背中を撫でる。

「本当だ。お前は私の家族だ。だから安心しろ」

「あり…がとう…」

呼吸が安定した光牙の頭を撫でる。

私は誓う。どんな事があっても光牙は、私の家族は守って見せると。そう心の中で私は固く誓った。

〈千冬SIDE OUT〉

〈光牙SIDE、？？？〉

ここは何処だ？

何も無い。

辺り一面が黒いもやのような物が覆っている。

そこには僕が1人居るだけ。

「何なんだ…ここは…？」その時、僕の周りに見慣れた人物が現れた。

僕の世界で小学校からの友達だった政義君と宏明君、それにクラスメイトや先生がいた。

「皆さん…どうしてここに…？」

皆さんに近付いた瞬間、政義君達が塵気楼のように消えた。

「え！？」

政義君館が消えた瞬間、声が響く。

あの悪夢の声が。

『話し掛けるな！』

「っ！？これは…」

『近付くんじゃねえ！』

『お願いだから話し掛けないでくれる？』

「う…うわああああ！止める！」

僕は絶叫しながら声から逃れる為に走り出した。

しかし声は絶えず頭に響いてくる。

『お前はもう帰れ！』

「止める…」

『お前が教室に居るだけで気分が悪くなるんだよ！』『止める…！』

『触らないでよ！この化け物！』

「止めるおおおおお！！」

立ち止まり最早、狂気と化していた叫びをあげる。しかし声は止まない。『化け物はとつとと死ね！』

「…違う…僕は化け物なんかじゃない…」

僕は叫ぶ気力すら尽き、項垂れる。その時、目の前に一組の男女が目に入った。僕の父さんと母さんだ。

「父さん！母さん！助けて…！」

必死に2人に手を伸ばす。しかし父さんと母さんは僕の手を払いのけた。

「皆から軽蔑されるのは仕方ないだろ、お前自身が原因なんだから」

「あんたみたいな化け物は家の子じゃないわ！」

化け物ならどつかの山奥でも暮らしてれば良いのよ！」

あまりにも残酷な言葉を言い放ち、2人が消える。

「父さん！母さん！待って！1人にしないで…！」

そう言うが2人は帰って来ない。

僕の間からはまるで滝のように涙が流れていた。

「…嫌だ… 1人にしないで…誰か…助けて…」

悲しみに溢れた声で助けを求めた。

その時だった。

突如、目の前が白く光り、その中から白い鎧のような物を纏い、右手には刀のような物が握った人間が現れた。

頭に装着しているパーツの後ろから長い髪が確認出来たので恐らく女性だろう。その女性が僕に近付き、右手に持っていた刀を放すと両手を広げ、僕を抱き締めた。

『大丈夫だ、お前は1人じゃない。私が傍にいる』 その女性が言う。

今まで僕の周りに居た人間からはまるで僕を敵視しているような感じしかなかった。

でもこの女性は違う。

何故だろう？暖かくて、優しくて、とても安心できる感じがする。

「ほん…とうに…？」

僕は恐る恐る女性に尋ねると女性は優しい声で言った。

『本当だ。お前は私の家族だ。だから安心しろ』 その言葉を聞き、僕はこの女性はいつらとは違い、本当の優しさがあると確信し、僕は身を委ねた。

女性は手放した刀を持ち、それを構え、刀を降り下ろした。

その瞬間、黒いもやが切り裂かれ、そこから白い光が溢れた。

視界が真っ白になっていき、僕の意識が途切れた。

「う…」

意識が戻った僕は違和感を感じた。

何かに覆われているような感触。

頭を少し動かすと、柔らかな感触がした。

「気が付いたか？」

聞き慣れた声がした。

顔を上げると、目に飛び込んで来たのは千冬姉さんだった。

「千冬姉さん…？」

そこで僕は千冬姉さんに抱き締められて

いる事が分かった。

その体勢からして、先程から感じている感触は千冬姉さんの胸だという事も分かった。

咄嗟に離れようとしたが、千冬姉さんが僕を強く抱き締めた。

「んぐう！？」

「光牙…無事で良かった…」

顔面に千冬姉さんの巨乳が押し当てられ、息が出来ないが、ふかふかの柔らかさが顔面を包み、とても気持ち良い。

このままでも良いかな、と思ったが、息が出来ないので段々苦しくなってきた。「千冬姉さん…息が…」

千冬姉さんの背中を叩く。「はっ！す、すまん…」

そう言っていると千冬姉さんが離れた。

「ぶはあっ！はあ…はあ…」

「光牙…大丈夫か？」

息を整えていると千冬姉さんが優しく背中を撫でてくれた。

「あ…はい。もう大丈夫です」

「そ、そうか」

「あ、そうだ。千冬姉さんに言う事が有ります…」

そう言って僕は千冬姉さんと向き合う。

「えっと…無断で出撃して無茶したりして、ごめんなさい！」

千冬姉さんに土下座する。しばらく沈黙が流れた。「…顔を上げ

る、光牙」言われた通りに顔を上げると、千冬姉さんの視線がい

つもの睨み付けるような視線になっていた。

「分かっているようだ。お前がやった事は裁判にかけられてもお

かしくない位の行動だ」

「……………」

何も言い返せなかった。

「というわけで、違反をした罰を与える。滝沢、目をつぶって歯をくいしばれ」そう言って拳を構える千冬姉さん。

このパターンは殴られるオチだな…

言われた通り目をつぶり、齒をくいしばった。

「行くぞ」

「っ！」

そう言うのと千冬姉さんの右ストレートが頬に炸裂する。

ペチンッ

「え？」

前言撤回。炸裂しなかった。おでこに僅かな痛みを感じ、思わず目を開けた。

「あの…今のは…」

「今のが罰だ」

「千冬姉さん…」

内心、右ストレートよりデコピンで済んで良かったと思っていたのは内緒だ。

「それより、随分お前はあいつらに好かれているようだな」

「はい？あいつら？」

そう言うのと千冬姉さんは部屋の襖を開ける。

すると何故か、箒さん達5人がドミノ倒しのように雪崩れ込んで来た。

「貴様ら、盗み聞きとは悪趣味だな…」

「いえ！これはその…」

「私達は決して盗み聞き等という野蛮な事をしていた訳では…」

「ただ光牙が心配で見に来ただけで…」

「でもお二人の会話を聞いていたら入るに入れなくて…」

「そのまま教官と嫁の会話を盗聴していた訳です」　ラウラさん、それ言ったら見も蓋もないです。

「全く…まあ良い。丁度私の話は終わった所だ。私は仕事に戻らせてもらう」　そう言って千冬姉さんは部屋から出ていった。

残されたのは僕と箒さん達の6人。

しかし、僕も健全な15歳。同年代の女子と居るとドキドキしてし

まう。

変な沈黙が流れるが、箒さんがそれを引き裂いた。

「こ、光牙！具合はどうだ？」

「え？ああ、別に大丈夫ですよ」

「そ、そうか…」

「ところで、福音と戦ってる途中で真ゲッターが緑色になって翼が生えたけど、あれは何なの？」

シャルさんが疑問を投げ付ける。

「あれですか。あれはですね…」

僕はゲッターバーストについて皆さんに説明した。

「内部のエネルギーを解放し、機体性能を上げる機能…しかし使用後は戦闘能力が皆無になり嫁にも負担がかかる。しかも5分前後で解除されてしまう不安定なシステムか…まさに諸刃の剣だな」

ラウラさんが説明した事をまとめて呟いた。

「でもそれってあなたに負担がかかるんでしょう？大丈夫なワケ？」

「まあゲッターヒューマンの能力で普通の人よりは体力の回復が早いですからあまり心配はいりませんよ」鈴さんの問いかけに答える。

「でも負担はかかるんでしょう？」

それに横槍を入れるようにシャルさんが聞いてきた。「それは…そうですね…」

「そんなの駄目だよ！いくら回復するからってそんなの使い続けたら体が壊れちゃうよ！」

シャルさんが珍しく声を張り上げながら言う。

「シャルロットの言う通りだぞ、光牙！」

「そうですね！光牙さんが体を壊したら元も子もないのですのよ！」それに箒さん、セシリアさんと続き、鈴さんとラウラさんも「うんうん」と頷いている。

「皆さん…」

皆さんの眼差しは真剣なものだった。この時、僕は皆さんが僕の事をどれだけ思っているか何となく分かった。

思っているからこそ、こんなに真剣になっているんだな…と僕は思った。

「…分かりました。これからはちゃんと自分の事も考えます」

「本当に？」

「男に二言はありません」きつぱりと言うと皆さんが笑顔になった。やっぱり皆さん可愛いなあ…

そんな事を考えていると、待機状態の真ゲッターが輝いた。

「え！？」

「こ、これは！？」

「まさかメカザウルス！？」箒さん達がメカザウルスが現れたと思っ
っているが、僕にはそれが違う、という確信があった。

輝き方が鈍い。メカザウルスが現れたならもっと眩い筈だ。

その時、真ゲッターが光に包まれる。

そして光に包まれた真ゲッターが拡散した。

極小の光の粒のようになり、それも拡散して消えた。「……………え？」
僕の思考が停止した。

一言で言えば、真ゲッターが消えた。

消えたのだ。光になって。「真ゲッター…？嘘だろ…」
しかし現実だった。

「こ、光牙…」

シャルさん達も啞然としている。

「あ…真ゲッターが…あ…あつ…」

そこで僕の意識は無くなった。真ゲッターが消えた。僕の目の前か
ら。

僕の相棒が、メカザウルスに対する力が、僕の力が。その日、消え
た。

余談だが、真ゲッターが消えた時、蒼月刃も光になって消えたらし
い。

第19話 願いと予兆

〈楯無SIDE〉

「さて、久しぶりに光牙君の所でも行こうかな」

この間、1年生は臨海学校が終わって帰ってきた。

それから2週間が経って今は夏休み。

一昨日の終業式の時にやっと織斑先生から解放されたの私は光牙君の部屋に向かった。

〈光牙、自室前〉

「おや？あれは…」

光牙君の部屋の前に妹の簪以外の1年生の専用機持ち5人が光牙君の部屋を覗いていた。

私はそつと近付き、後ろから声をかけた。

「何してるのかな？」

『うわあああああつ！？』5人が絶叫する。…流石にその反応は傷付くんですけど…

「あ、ビックリした…」

「そんなに驚かなくても…ところでどうして光牙君の部屋を覗いていたの？」

「え！？なんで光牙の部屋がここだって分かったのよ！？」

「だって私、生徒会長だし」

『生徒会長！？』

声がハモった。なんだかんだでこの5人って息合ってるわね。

「そう。私がこのIS学園の生徒会長、更識楯無。一時期は光牙君と同室だったわ」

「同室って…まさか前に嫁に手を出した女か！」

第12話参照

「あら、バレちゃった？」私が応えようと5人はISを部分展開して

「訳？どんな？」

「あれは昨日の事でした…」

そう言っているとシャルロットちゃんが語り出した。

〈楯無SIDEOUT〉

〈シャルロットSIDE〉

きっかけは昨日の夕方だった。殆ど放心状態の光牙をどうにかする為に僕達が光牙の部屋に居た時だった。「真ゲッターが…真ゲッターが…」

光牙は俯いてそればかり呟いている。

（どうすんのよ！？、この間から光牙が変になっちゃったわよ！）
鈴が小声で僕に話し掛ける。

（原因はやはり…真ゲッターだろうな）

（無理もない。今まで戦って来た相棒のような物を失ったんだ）

（だからって、このままほっとけ無いよ！）

（あんな光牙さんを見ているなんて…耐えられませんか…）

（それに、もしメカザウルスが現れでもしたら…）

（真ゲッターが無い今、ISだけでメカザウルスを倒せる保証は無い…）

（それに光牙はあんなだし…）

（（（（…どうしよう？））））「ほ…箒さん…」

その時、光牙から箒に話し掛けた。

「！どうした光牙！？」

「お願いがあります…」

「なんだ！言ってみろ！」「箒さんの…刀を貸して下さい…」

「わ、私の刀だと？」

小声↓「この際なんだから貸してあげなさいよ！」

刀を貸すのを少し躊躇った箒に鈴が耳打ちする。

「う…分かった！直ぐに持ってくるからな！」

そう言っていると箒は部屋から出ていき、数分後、刀を持った箒が駆け込

んできた。

「光牙、持ってきたぞ！」 箒が刀を差し出す。

「どうも……」

光牙は刀を受け取ると、いきなり制服を脱ぎ出した。「わあああ！
？」
「こ、この馬鹿！ あたしたちの前で何やってんのよ！」

僕はとつさに目を塞いだ。箒達も真っ赤になりながら光牙を止めようとするが、上半身が裸になった所で脱ぐのを止めた。

すると光牙は箒の刀を抜き、銀色に光る刀身を自分に向けて構えた。
『……え？』

「我が人生に……悔いなし……」

『止めるおおおおお！！』 光牙が刀を突き刺そうとしたので僕達は咄嗟に光牙に飛び掛かった。

「離して下さい！ 僕には……僕にはもう……」

「箒！ 早く刀を……！」

シタバタ暴れる光牙を僕達が押さえ付けながら鈴が箒に言った。

「応！」

箒が光牙の右手にある刀を奪った。

「は、離せえええ！！」 まだ抵抗を続ける光牙。 「光牙さん！ 自殺なんて止めて下さいまし！」

「もう、あんたって奴は！ いいから大人しくしなさい！」

「光牙！ お願いだから止めて！」

「嫁！ 大人しくしろ！」

必死に説得したが、光牙は抵抗を止めない。

「ええい！ 騒がしいぞ！」 その時、一連の騒音が響いたのか、織斑先生がドアを開けた。

「全く、一体何をやってい……る……？」

この光景を見た織斑先生が固まった。

ちなみに今の状況は

・僕達4人は光牙を押さえ付けている。

・光牙は上半身裸。

・箒は刀を持っている。

つまり、織斑先生から見ると僕達が光牙を襲っているようにしか見えない。

あ、織斑先生からオーラが見えた。

「貴様ら……」

「お、織斑先生！違うんです、これには深い事情が……」

「言い残す事はあるか？」僕達に殺意の目線を向けて指をポキポキ鳴らしている。

僕達は恐怖で動く事すら出来なかった。ラウラなんか特に。

「地獄におちろおおおおおおおおお……！！！」『ひぎゃああああああああああああああ……！！』この時の事は思い出したくありません……

思い出しただけで寒気が走ります。

その後、事情を知った織斑先生が僕達に光牙を見張るように言ったという所まで、僕達は楯無さんに説明した。

「ふむふむ。それで光牙君を見張ってたって訳ね」「ああ、しか

も目を離すとすぐ何かしようとするんだ」

「さっきなんか首吊りしようとしてたし」

「……うんうん……」

「く、首吊りつて……確かに危ないわね。じゃあ私も見張りをして良いかしら？」『駄目……！！』

僕達は全員で拒否した。

「また前のように光牙を襲うつもりだろ！貴女は……」「もうそんな事しないわよ」

「信用出来る訳ありません！」

「えー？じゃあ箒ちゃん達は生徒会長である私がやらないって言うのに、それでもやるような人間に見える？」

『見える……！！』

再び僕達は即答する。

「ひ、酷い……」

泣き崩れるこの人はほつといて、見張りを続行する。「どうだ、お前達？」

そこへ織斑先生がやって来た。

「あ、織斑先生……」

「光牙はどうだ？」

織斑先生がそう言うのと、簀が首を横に降った。

「そうか……このまま光牙が自分で立ち直るのを待っていようと思っ
たが、仕方がない。お前達、強行策に出るぞ」

『はい！』

僕達は織斑先生に返事を返した。

「シャルロットSIDE OUT」

「ナレーションSIDE」

簀達、5人が光牙の部屋に入っていった。

相変わらず光

牙は俯いてぶつぶつ呟いている。

「……光牙」

「……」

光牙は答えない。

「いつまでそうしているつもりよ？」

「……」

やはり答えない。

「ああもう！いい加減にしなさいよ！あんだねえ、真ゲッターが消
えた位でいつまでもウジウジしてんじゃ無いわよ！！」

鈴が光牙に叱りつける口調で言った。

「……真ゲッターが無い今、僕は……もう戦えません……鈴さん達に僕の
気持ちなんか分かりませんよ……」
光牙の発言に遂に鈴がキレ
た。

「バツカじゃないの！？私達はあるたじゃないのよ！あんだの気持
ちなんか分からないわよ！！」

「だったらもう……ほつといて下さい。」

「……！！……ほつとける訳無いでしょ……！！」

鈴は光牙の胸ぐらを掴んで引き寄せた。

鈴の目からは大粒の涙がこぼれ落ちている。

光牙はそれを見て、少し驚いた。

「り…鈴さん…」

「ほつとける訳無いじゃない…あんたの事が…好きなんだから…」

鈴はそう言うのと泣き崩れた。この時光牙はやつと気付いた。何故箒達があればどこまで自分の為に必死になっていたか。

箒が、セシリアが、鈴が、シャルロットが、ラウラが、自分の事を想っていてくれたからだ。

それを自分は冷たくあしらってしまった。

光牙の心が、罪悪感でいっぱいになる。

「ぼ、僕は…」

「光牙、真ゲッターが消えたのはきつと何か訳がある筈だよ」

「私達も真ゲッターが消えた理由を探す。だからもう落ち込まないでくれ」

シャルと箒がそう言うのと涙を拭った鈴とセシリア、ラウラが頷く。

「…すいませんでした。皆さんにあんな態度をとってしまった…」

光牙が真剣な表情になり、箒達に謝罪する。

「もう落ち込んだりしないね？」

「はい！」

シャルの問い掛けに光牙は元気に答えた。

「…だかどうやって真ゲッターが消えた理由を探すんだ？」

『あ』

ラウラの発言で一気に光牙達は現実に戻された。 「…どうしましよう？」

実際、真ゲッターは消滅している。

光牙は真ゲッ

ターを出した神様なら何か分かるかもしれないと思ったが、神様にコンタクトを取る方法を知らなかった。

全員が考え込んでいると、僕の携帯電話の着信音が鳴った。

確認すると新着メールが一件届いていた。

「知らないアドレスだ…誰だろう？」

光牙はメールの内容を確認する。

今日の夜8時に第3アリーナにて来てくれ。

「なにこれ？」

「今日の8時にアリーナに来てって、あんた何かやったの？」

「何もしてませんよ。ん？待てよ、もしかしたら…」 「何か心当たりがあるのか？」

箒が光牙に問い掛ける。

「一応はですけどね。もしそうなら真ゲッターの手掛かりを手に入る事が出来るかもしれません」

「それは本当なのか？」

「多分ですけど…とにかく僕は8時にアリーナに行きます」

「なら私も行かせてもらおう！光牙だけでは心配だ！」 箒が意見を主張する。

セシリア達も同様の意見を述べ、結果的に光牙、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラに加え部屋の外で話を聞いていた千冬と楯無を含めた8人で行く事になった。

く????

「ゴール様、報告があります。真ゲッターがルシバーとの戦闘後、消滅しました」

バットの報告にゴールが不適な笑みを浮かべる。

「よし…邪魔者は消えた。ガリレイよ、新たなメカザウルスはどうなっている？」

「はっ、現在最終段階に入っております。あともう少しかと」

「そうか。真ゲッター無き今、ついに我らが地球を征服する時が来たのだ！バット！」

「はっ！」

「メカザウルスが完成しだい、作戦を開始する！」

「御意！」

バットが答えた後、その空間にはしばらくゴールの笑い声が響いていた。

第20話 新たなる力！ネオゲッターロボG！！ 前編（前書き）

遂に新たなゲッターが登場です。

第20話 新たなる力！ネオゲッターロボG！！ 前編

「光牙SIDE、第3アリーナ」

夜、僕達はあのメル通りに第3アリーナに向かった。

現在時間は7時59分20秒。あと少しで8時だ。

「光牙。本当に誰か来るのか？」

篤さんが僕に尋ねる。確かにアリーナには僕達以外の人の気配を感じない。

「…感じなくて当然かもしれません」

「…？どういう事だ？」

「もし、僕の推測通りならここに来る人は…」
言いかけた時、8時になった。

すると突然、僕の目の前の空間が光輝き、そこから僕の推測通り“

あの人”が現れた。

「気付いてい

「やはり貴方でしたか、神様」
たのかい？」「薄々ですけどね」

「こ、光牙！こいつは何者だ！？」

後を向くと篤さん達がパニックになっていた。

「皆さんは初めてでしたね。この人が僕に真ゲッターをくれた神様です」

「その通り。私は世界を統べる神だ」

僕が神様を紹介すると神様も簡単に挨拶をした。

「こ、この人が…」

「神様だなんて…」

「信じられないわ…」

「夢…じゃないよね…ラウラ、ちょっと引っ張ってみて」

「あ、ああ…」

シャルさんがそう言うとならウラさんが思いつきり頬を引っ張った。
「痛たたたた！やっぱり夢じゃない！」

「信じれんな…こんな非科学的な事が…」

流石に千冬姉さんを驚愕していた。

しかし、何故か楯無さんはあまり驚いていなかった。「久しぶりだね、楯無君」神様が親しげに楯無さんに話し掛けた。

「そうね神様」

それに答える楯無さん。

「楯無さんは神様を知ってるんですか？」

「うん。だって神様から光牙君の事を教えて貰ったからね」

「あ…それであの時あんなに詳しくったのか…」

第10話参照

確かにそれなら納得が行く。

「って納得してる場合じゃない！神様、そろそろ本題に入りましょう！」

話が脇道にそれたので話を戻す。

「そうだったね。私が現れたのは、真ゲッターについてだ」

大方予想通りの事を神様が言う。

「一体、どうして真ゲッターが消えたんですか？」

「それはだね、真ゲッターが休眠に入ったからなんだ」

『休眠？』

その場にいた全員の声がハモった。

「そうだ。臨海学校の時戦ったメカザウルスとの戦いで使用した真ゲッターのワンオフアビリティ『ゲッターバースト』。あの機能は真ゲッター自身にもかなりの負担が掛かる上、かなりゲッターエネルギーを消費する。

更に真シャインスパークを使用した事により、自身のゲッターエネルギーを全部使ってしまったんだ。

自身に深いダメージを負い、更にゲッターエネルギーを使い切った真ゲッターはやむを得ず休眠に入り、消えた。という訳だ」

「そうだったのか…でも真ゲッターはこれからどうなるんですか？」

「大丈夫だ。あくまで休眠に入ったのはダメージを癒すのとゲッタ

「エネルギーを回復する為だ。しかもそれをセカンドシフトと平行し行っているようだから、時間は掛かるけど、休眠が終われば真ゲッターは必ず戻って来る筈だ」

「成る程…でもその間はとうするんですか？」

僕は神様に尋ねた。休眠が終わるまでは真ゲッターは使えないのは変わらないからだ。

「そう言うと思って、君にこれを届けに来たんだ」 神様がそう言い、杖を振ると右腕に白色のガントレットが装着された。

「これは…まさか新しいゲッターなのか…？」

「それは確かにゲッターだ。だがそれにはまだ“意志”が入っていない」

「意志？」

「そのゲッターはいわば空っぽの状態なんだ。そのガントレットに君の意志を込めるんだ。そうするとその意志がゲッター線によって構築され、新たなゲッターとなる。さあ、やってみてくれ」

僕は言われた通り、ガントレットに意識を集中する。頭の中である2体のゲッターが浮かび上がり、その瞬間、ガントレットが輝いた。

光が晴れるとガントレットに赤、青、黄のラインが刻まれていた。

「どうやら成功したようだね」

「はい」

「では私はこれで失礼するからね。頑張れよ」

そう言うとき神様が光に包まれ、次の瞬間にはいなくなり、その場には僕達が残されていた。

「光牙、もしかしてそれが…」

シャルさんがガントレットを指差しながら聞いてきた。

「はい。これが僕の新たなゲッターロボ…名付けて、『ネオゲッターロボG』です！」

「ネオゲッターロボ…G…」

「話に割り込

んですまんが、とりあえず滝沢は真ゲッターに代わるゲッターを手

に入れた訳だな。だが今日はもう遅い。お前達は速やかに寮に戻れ。分かったな？」

『はい！』

千冬姉さんに返事をして、僕達は各自の部屋に戻っていった。

（光牙、自室）

部屋に戻り、シャワーを浴びると、僕はネオゲッターG（ネオゲッターロボGの事）の調整を始めた。

「凄いな…ゲッターロボGのゲッター炉心にネオゲッターロボのプラズマエネルギーシステムを組み込んだ新型炉心で稼働しているのか。しかもどの形態も真ゲッター以上の武器や性能だな…」

ネオゲッターGのスペックデータを見た僕は驚いた。あの時、ゲッターロボGとネオゲッターロボを思い浮かべたのだが、まさかここまでの高性能機になるとは思わなかった。

その後は、スペックデータの確認とエネルギーの調整等をして、僕はベッドに入り眠りについた。

（翌日）

翌朝、起きて皆さんと朝食を食べている時だった。

「光牙、今日はどうするの？」

シャルさんが僕に話し掛けてきた。

「そうですね…今日はネオゲッターGに慣れる為に、アリーナで練習したいと思います」

「じゃあ僕も一緒に練習して良いかな？」

「良いですよ」

そう言った時だった。

「なら私も特訓に付き合ってやる！」

「それなら私も参加させて貰いますわ！」

「だったら私もよ！」

「私も嫁の特訓に行かせて貰う！」

篤さん達が急に立ち上がり、宣言（？）した。

なぜあんなにムキになる必要があるんだろう？

とりあえず、皆さんも一緒に特訓する事になり、その後は千冬姉さんにアリーナの使用許可を貰いに行った。

それから許可を貰い、僕はアリーナに向かった。

〈第4アリーナ〉

僕がアリーナに到着すると既に箒さん達が待っていた。

「皆さん集まったようですね。ところでこの人数でどうやって特訓しましょうか？」

「そんなの決まっているだろう！」

僕が尋ねると、箒さんが自信満々に答えた。

「私達と模擬戦だ」

「成る程。箒さん達と模擬戦ですか…え？」

今“達”って言った？

皆さんは既にISを展開し、空中に舞い上がった。

「まさか皆さんを同時に相手をしると…？」

「そうだ！」

「これも光牙さんの為ですわ！」

「あたし達全員を倒せればメカザウルスなんて敵じゃないわよ！」

「それに少しでも早く新しいゲッターに慣れる必要があるしね」

「話し合った結果、私達と嫁が模擬戦をするという事になった！」

話し合ったって…僕の意見は？

その間に皆さんは武器を構えていた。

「どうやら、やるしかないようだな…」

僕は右腕のガントレットを構える。

「行くぜ、ネオゲッターロボG！チェンジ！ネオドラゴン！！」

叫ぶと緑色の光が僕を包み、次の瞬間、全身が赤をメインカラーにしたボディが展開した。

それは、初代ゲッターロボの後継機、ゲッターロボGがベースになったボディだったが、頭部は少し違った。口の部分のパーツの両横

からは、斜め上に伸び、途中で少し角度が変わっている突起状のパーツが伸びていて、後頭部にあたる部分からは角のような物が生えていた。

3本の角が印象的な頭部。赤を基調としたボディ。

これが僕の新たなゲッター、ネオゲッターロボGの空中戦形態、『ネオゲッタードラゴン』だ。

「マツハウイング！」

ネオドラゴンの展開が完了した僕は、背中からマツハウイング2を展開し、空中に飛び上がる。

「それが新しいゲッターか……」

「そうです」

「だが手加減はしないで、光牙！」

「望む所です！」

僕も身構えた。

それから僅かな沈黙が流れる。

「……参る！」

先に仕掛けてきたのは篤さんだ。

接近し、両手の刀を僕に振り下ろす。

それをかわすと、ビームや弾丸の大群が僕に向かって来た。

無論、ビームとはブルー・ティアーズのライフルとビットから、弾丸はラファール・リヴァイヴ・カスタム2のアサルトライフルとシユバルツエア・レーゲンのレールカノンから放たれた物である。

その大群をなんとかかわすが、後ろから鈴さんの青竜刀が迫って来た。

それを両腕をクロスして受け止める。

「ちいっ！まだまだあ！」僕は両腕に付いているスピнкаッター2を回転させ、青竜刀を弾く。

そのままカッターで甲龍を斬りつけようとしたが、離脱されてしまった。

そこへ先程と同じようにビームと弾丸の雨が降り注ぐ。

「くそっ！これじゃ武器を展開出来ない！！」

大きく移動して銃撃の雨をかわすが、そこへ鈴さんと箒さんの斬撃が叩き込まれる。咄嗟に防御に入ったが、2つの斬撃の威力を殺しきれず吹き飛ばされた。

「うわああああっ！！」

そのまま地面に叩き付けられる。

「くっ…」

起き上がると、僕の周りを箒さん達が囲んでいた。

「どうした光牙！お前の力はその程度か！？」

箒さんが刀を僕に向けながら言った。

確かに今の僕はゲッターの力を生かし切れていない。それで良いのか？

良い訳が無い。

僕は皆さんを守る。

その為に僕は強くなると決めた。

こんな所で立ち止まる訳に行かない。

僕はぎゅっと拳を握り締め、構える。

「行くよ、ネオゲッターロボG…」

そこへ銃撃の雨が撃ち込まれる。

「…オープンゲット！」

僕はネオゲッターGを分離し、銃撃の雨をかわす。

赤色のネオドラゴン号、青色のネオライガー号、黄色のネオポセイドン号の3機のゲットマシンが空高く飛翔して行く。

「さあ、反撃と行こうぜ！相棒！！」

僕は新たな愛機にそう言った。

第21話 新たなる力！ネオゲッターロボG！！ 後編（前書き）

今回の話は読むときに新ゲッターロボのOPをBGMにすると、迫力（？）が増すと思います。
それではどうぞ！

第21話 新たなる力！ネオゲッターロボG！！ 後編

〔簪SIDE、観客席〕

「お姉ちゃん、一体何なの？私『打鉄式式』の最終調整をしなきゃいけないんだけど？」

私は更識簪。1年4組の専用機持ちです。私は今、姉である更識楯無に無理矢理アリーナに連れて来られている。お姉ちゃんに不満を言うが、お姉ちゃんは全く聞かず、手を掴んだまま歩いている。

まだ私の専用機、『打鉄式式』の最終調整が終わっていない為、私はここに来るのを拒んだ。

しかし、お姉ちゃんに手を掴まれ、無理矢理連れてこられた。

「まあまあ、そう不機嫌にならないで。とりあえずあれを見てみよう」

「…何なの？……え？」

お姉ちゃんが指差した方向を見ると、そこには私の見たことの無い赤い全身装甲のISが居た。更にそれを取り囲むように1年の専用機5機が佇み、赤いISに武器を構えている。

「あの赤いISに乗っているのが、噂の滝沢光牙君だよ」

「滝沢…光牙…」

私もその名前は聞いた事があった。

あの織斑先生の弟で、謎のISを操る1年1組のクラス代表。

私は赤いISを見る。これまでのISとは全く異なる形で頭から生えている3つの角が印象的だった。

一言で言えば、ロボットアニメに出てくるような形。「カッコいい…」

私はいつの間にか赤いISに見とれていた。

その時、周りの専用機が武器を発砲した。赤いISに弾丸とビームが迫る。

「危ない！」

私は思わず声を出した。

だがその時、信じられない事が起こった。

突如、赤いISが3つの戦闘機に分離し、弾丸とビームをかわした。

「え！？」

赤、青、黄の戦闘機が飛翔していく。

私は先程までの事を忘れ、その模擬戦に夢中になっていた。

〔簪SIDE OUT〕

〔ナレーションSIDE〕

「オープンゲット！」

ネオゲッターGが3機のネオゲットマシンに分離し、銃撃の雨をかわすとネオゲットマシンは空に昇るように飛翔していく。

「さあ、反撃と行こうぜ！相棒！！」

光牙がそう言うのとネオゲットマシンが合体フォーメーションに入る。

「チエエンジ！ネオドラゴン！！」

光牙が叫ぶとネオドラゴン、ネオライガー、ネオポセイドンの順に合体し、第1形態、ネオゲッタードラゴンが降臨した。

合体が完了すると、両肩に格納されているダブルトマホーク2を取り出し、それをロングモードにして連結する。

「ダブルトマホーク！ブーメラント！！」

ツイン形態になったダブルトマホーク2を光牙は思い切り投げた。

ダブルトマホークは高速回転しながら箒達に襲い掛かる。

「何！？」

箒達は迫り来るダブルトマホーク2に一瞬たじろいだだが、直ぐ様回避行動に入った。しかし、ダブルトマホーク2はネオドラゴンに戻る時にブルー・ティアーズのビットを1つ切り裂いた。

「うおおおお！！」

戻って来たダブルトマホーク2を手に、ネオドラゴンが突撃する。

そこヘシャル達が放った銃撃が撃ち込まれる。

しかし、ネオドラゴンはダブルトマホーク2を回転させ、それによ

つて銃撃を防いだ。

そのまま紅椿に斬り掛かる。

「くっ！てやあっ！」

箒は刀でダブルトマホーク2を防ぎ、もう一本の刀で反撃する。

「オーブンゲット！」

だがその斬撃は当たる直前に、ネオドラゴンが分離したので、空振りに終わった。

シャル達がネオゲットマシンに銃撃を放つが、的が小さく、素早い為、一発も当たらない。

「チェンジ！ネオライガー！！」

そう言うと、ネオライガー、ネオポセイドン、ネオドラゴンの順に合体し、青がメインカラーで細身のボディのネオライガーに合体した。

「喰らえ！」

そこへ甲龍の衝撃砲が放たれる。

が、ネオライガーは持ち前のスピードで攻撃範囲から素早く離脱した。

「ドリルストオオム！！」回避後、ネオライガーの右腕のネオドリルアームが高速回転し、それによって発生した竜巻が甲龍を襲う。

「な、何よこれえええ！？」竜巻によって甲龍は身動きが出来ない。

「はああああっ！！」

そこへネオドリルアームを高速回転させた、背中のロケットブースターを全開にしたネオライガーが動けない甲龍に突撃し、ネオドリルアームを突き立てる。

それによって甲龍が爆発を起こす頃には、既にネオライガーは別の目標に向かっていた。

「プラズマアンカー！」

光牙は次の目標、ラファール・リヴァイヴ・カスタム2に左腕のアンカーを射出した。プラズマを纏った鋭利なアンカーがラファールに迫る。

「っ！！」

シャルはショットガンを放ち、プラズマアンカーの軌道を変えた。そのまま、ライフルを放ちながらネオライガーに迫るシャル。

「ドリルミサイル！」

そう言いつと、ネオライガーの右腕のドリルがラファールに向かって発射された。「ええっ！？」

ドリルミサイルに驚くシャル。だがライフルを連射し、ドリルミサイルを破壊する。

「貰ったよ！」

ドリルが無くなったネオライガーにシャルはラファールの右手に近接ブレードを持たせ、ネオライガーに斬り掛かった。

「甘い！オープンゲット！」

だがしかし、ネオライガーが分離した為、その斬撃は先程の筈同様、空振りに終わった。

「チェンジ！ネオポセイドン！！」

今度はネオポセイドン、ネオドラゴン、ネオライガーの順で合体し、巨人のような外見のネオゲッターポセイドンがシャルのラファール目掛け、突撃する。

「えええええ！？」

ネオゲッターポセイドンとラファールが激突し、そのまま地上に落下した。

落下の衝撃で盛大な土煙が発生する。

その土煙の中から突如、竜巻が巻き起こった。

「超！大雪山おろしいいいい！！」

「うわあああああつ！？」超・大雪山おろしによって、投げ飛ばされたラファールが回転しながら飛んでいった。

「間髪入れずに行きますよ！ゲッタアア！サイクロン！！」

ネオポセイドンの首の周りのカバーが開き、そこから出現したファアンから強力な竜巻が巻き起こった。

ゲッターサイクロンは筈とセシリアに命中し、シールドエネルギー

が減少する。更にサイクロンによって紅椿とブルー・ティアーズのビットが破壊される。

「もう一丁！ストロングミサイル！！」

そう言うとき光牙はネオポセイドンの背中に搭載されている2つの巨大ミサイル、ストロングミサイル改の1つを切り離し、肩に抱える。

「おりゃああああっ！！」

そのままストロングミサイル改を箒達に向かって投げた。

途中でブースターが点火し、ストロングミサイル改が箒とセシリアに向かって行く。

「な！？あれミサイルだったのか！？」

「あんなの喰らったらひとまりもありませんわ！！」ストロングミサイル改に危険を感じた2人はセシリアはレーザーライフルからビームを、箒は刀の1本からレーザーをストロングミサイル改に放った。

それによって、ストロングミサイル改が爆発する。

だがストロングミサイル改の威力は尋常では無い。威力に比例して爆風も強大になる。

爆発したストロングミサイル改の爆風が2人を襲った。

「きゃああああっ！！」爆風に煽られ、2人は吹き飛ばされた。残り……」

光牙が辺りを見渡す。

その時、ネオポセイドンに弾丸が放たれた。

それを足からブースターを噴射し、上空に退避してかわす。

「ラウラさんか！」光牙の言う通り、弾丸を放ったのは、シ

ュバルツェア・レーゲンを纏ったラウラだ。

「私が最後だ！何処からでもかかって来い！！」

「なら……行かせて貰います！」

光牙はネオポセイドンをシュバルツェアに向け、ブースターを噴射した。

「はあっ！」

シュバルツェアから6つのワイヤーブレードがネオポセイドンに放たれた。

「オープンゲット！」

ワイヤーブレードが絡み付く前にネオポセイドンが分離する。

「チェンジ！ネオドラゴン！！」

ネオドラゴンにチェンジし、突進を継続する。

「来い！ドラゴンソード！」

そう言うと、ネオドラゴンの両手に龍を模した剣が出現した。

「ゲッタアア！ビィイム！！」

ネオドラゴンの額から、桜色のビームがシュバルツェアに放たれる。それを回避し、レールカンを発射するラウラ。

だが、その弾丸はドラゴンソードによって両断され、爆散した。

「チエストオオオ！！」

ドラゴンソードを振り下ろす光牙。

それをラウラはプラズマ手刀でガードする。

「ふっ！はっ！てやあああ！！」

そこからドラゴンソードによる連続攻撃がシュバルツェアに炸裂する。

「くっ！せいやああ！！」

ラウラはプラズマ手刀を振り下ろすが、光牙はバックステップでかわす。

そこへゲッタービームを直接当てるのではなく、ラウラの足下に発射した。

ラウラの足下が爆発し、土煙があがる。

その土煙がラウラの視界を塞ぎ、その隙にネオドラゴンが分離した。

「チェンジ！ネオポセイドン！！」

ネオポセイドンに再合体し、シュバルツェアからある程度距離をとった位置に着地する。

「フィンガーネット！！」

右手の指先が変形し、そこから強靱なネットが放たれ、土煙を突き

破ってシュバルツェアに襲い掛かった。「な、何!？」

フィンガーネット改がシュバルツェアに絡み付く。

「ゲッターエレキ!」

そう言うのと右手に青白い電撃が発生し、それがフィンガーネット改をつたい、シュバルツェアに向かって行く。

次の瞬間、ゲッターエレキがシュバルツェアを貫く。「ぐわあああ
ああっ!」ラウラは全身の皮膚がはぜるような痛撃を受けた。

電撃がおさまると、シュバルツェアの所々から、黒い煙があがった。

「はあ…はあ…くっ…」

ラウラはネオポセイドンを見る。ラウラから見れば、光牙のネオゲッターGは殆どダメージを受けていないように見えた。

それに対し、ラウラのシュバルツェアはほぼ満身創痍だった。しかも、フィンガーネット改が絡み付き、武装が先程のゲッターエレキで使い物にならなくなっていた。

「ラウラさん、まだやりますか?」

突如、光牙から通信が入った。

ラウラは少し考え込み、結論を出した。

「ふっ…流石は嫁だな」そう言うのと、ラウラはシュバルツェアを解除した。

ラウラは降参したのだ。

それを確認すると光牙もネオゲッターGを解除し、ラウラに駆け寄った。

「ラウラさん、大丈夫ですか?」

「何とかな…だが、さっきの電撃は効いたぞ…」

「一応威力は抑えたんですけど…ごめんなさい」

ラウラに謝る光牙。その時、後ろから足音が聞こえ、振り向くと篁達が生きていた。

「ちよつと光牙、心配してくれるのはラウラだけなの?」

「僕、投げ飛ばされて身体中が痛いんだけど…」

「私だって、お前の竜巻と爆風を喰らったんだからな!」

「私も少しお肌が焼け焦げてしまいましたわ」

箒達がそれぞれ不満そうな声をあげる。

「す、すいません…」

「でも新しいゲッターを使いこなせるようになったな、光牙」

「あ、ありがとうございます」

「でも！ゲッターを使いこなせるようになった事と、私達に怪我させたのは別よ！！」

「…え？」

（嫌な予感が…）

その予感は的中した。

「光牙には罰として、私達の怪我の手当てと、1週間私達の言う事を聞く事！良いわね！？」

鈴が光牙に言い放つ。

「…マジですか？」

光牙が聞くと、5人は同時に頷いた。

「僕…勝ったんだけどな…」

落胆する光牙。

ちなみに箒達の怪我はというと

←

・鈴 切り傷

・シャル 全身打撲

・箒 火傷

・セシリア 火傷

・ラウラ 火傷

光牙「そんなに酷い怪我かな…？」

それから光牙は1週間、箒達にこれでもかと言つ位こき使われたのだった。

第21話 新たなる力！ネオゲッターロボG！！ 後編（後書き）

簪を初登場させて見ました。

今更ですが、戦闘シーンの描写が難しいです…

とりあえず、感想等お待ちしています。

オリジナルゲッターについて（ネタバレあり）

機体名

ネオゲッターロボG

世代 無し

シールドエネルギー

1500

待機状態 赤、青、黄のラインが刻まれたガントレット

休眠に入った真ゲッターに代わり、神様が光牙に授け、光牙の思いが具現化した新たなゲッター。

機体のベースになっているのは『真（チェンジー！）ゲッターロボ 世界最後の日』のゲッターロボGと『真ゲッターロボ対ネオゲッターロボ』のネオゲッターロボ。

見た目はゲッターロボGだが、若干形状が異なっている。

ゲッター炉心にプラズマエネルギーシステムを組み込んだ新型炉心で稼働しており、性能は真ゲッターを遥かに上回る。

それぞれの形態にドラゴン、ライガー、ポセイドンにちなんだ武装がある。

メカザウルス デスとの戦闘の時、炉心をデスに叩き付け、自爆した。しかし、自爆の直前にネオドラゴンだけは分離した。

特殊能力

・ゲッターヒーリング2

ゲッターヒーリングの強化版。吸収したゲッター線を『ゲッターダイナモ』と呼ばれる装置に溜め込み、ゲッターダイナモによって増幅されたエネルギーで、再生、補給、更にエネルギー攻撃の強化を

行う。

だが、再生出来るのは装甲程度で、ゲッターダイナモや炉心は再生出来ない。また、ゲッターダイナモはゲッターエネルギーの予備貯蔵タンクとする事も出来る。

普段は真ゲッター同様、リミッターが掛けられ、使用不可能。

・ツインモード

真ゲッター同様、ISとしての『ISモード』、兵器としての『バトルモード』の2つがあり、バトルモードにはリミッターが掛けられている。

・サーチマーキング

探知機能の改良型。

緑色に発光して、メカザウルスの出現を知らせるだけでなく、場所も表示されるようになった。

形態について

赤色のネオドラゴン号、青色のネオライガー号、黄色のネオポセイドン号によって変形合体が可能。

また、ゲットマシンの武器はミサイルとゲッターレーザー。

ゲットマシンの時はネオドラゴン号と融合している。

・ネオゲッタードラゴン

ネオドラゴン、ネオライガー、ネオポセイダンの順で合体し、空中戦を得意とする形態。

メインカラーは赤。蒼月刃に代わる剣、ドラゴンソードが装備されている。

（ドラゴンソードは龍を模した剣。二刀流であり、生身でも使える。

）
また、ゲッターマシンガンが腕に格納されている。

ネオゲッター1のプラズマサnderの強化版が使用可能。

武装

スピнкаッター2

ゲッターマシンガン2

ダブルトマホーク2

ゲッタービーム

（頭部、桜色）

胸部ゲッタービーム

（緑色）

ドラゴンソード

ゲッターブレイザー

ネオゲッターチェンジアタックD

ネオプラズマサンダー ドラゴンノヴァ

シャイニングソード

・ネオゲッターライガー

ネオライガー、ネオポセイドン、ネオドラゴンの順で合体し、高速戦、地上戦、地中戦を得意とする形態。メインカラーは青。

ドリルは右腕にあり、細長くなっている。

左腕は原作のライガーのアンカーになっている。

アンカーやドリルにプラズマを纏わせる事が出来る。

武装

ビームガン

ドリルミサイル

プラズマドリルハリケーンネオドリルアーム

プラズマアンカー

ドリルストーム

ネオゲッタービジョン

グレートマッハスペシャルネオゲッターチェンジアタックR

ライガーファンク

ミラージュランサー

・ネオゲッターポセイドンネオポセイドン、ネオドラゴン、ネオライガーの順で合体し、水中戦と地上戦を得意とする形態。
両腕に小型のファンが搭載され、竜巻を起こす事が出来る。拳にブラズマを纏ったり、フィンガーネットに電流を流す事も可能。
足の部分をキャタピラーに変形させる事が可能。

武装

エレキナックル

フィンガーネット改

アームサイクロン

ゲッターエレキ

ゲッターサイクロン改

ストロングミサイル改

ネオゲッターチェンジアタックP

ゲッタートリプルサイクロン

・単一仕様能力

『ネオゲッターバースト』真ゲッターのゲッターバーストがより強力になった機能。機体にかかる負担が軽くなり、発動中は真ゲッター同様に機体性能が底上げされ機体が緑色に輝き、ネオゲッタードラゴンの時のみ、背中のマッハウイング2からゲッターエネルギーの翼が形成される。発動終了後は終了から10分間、性能が半分にダウンする。

通常空間での限界使用時間は8分。

宇宙空間なら地上よりゲッター線の濃度が高い為、15分になる。

番外編第三話 まさかの3人デート

「光牙SIDE」

暑い。とにかく暑い。

皮膚から汗が吹き出し、だらだらと流れている。

「大丈夫か、光牙？」

「まあなんとか…」

隣に居た篤さんが僕を心配して尋ねてきた。

「光牙さん、もう少しですわよ」

「あと少しなんだから頑張ってよね？」

「はい…」

セシリアさんと鈴さんも僕の事を心配してくれたのか、声を掛けてくれた。

それに僕は答える。

今僕達は、夏休みを利用して僕、篤さん、セシリアさん、鈴さんの4人で遊園地に来ている。

そして今は大人気のジェットコースター、『グリーンストーム』の列に先程から並んでおり、やっと僕達の順番が近付いてきた所だ。並び始めてから、ここまで来るのに約30分掛かった。ちなみにシヤルさんは夏休み前に既にデートをしたからという理由で却下、ラウラさんはドイツに一時帰っているので、2人についてはきていない。そんな事を考えている内に僕達の番が回ってきた。

僕は先に席に座るが、何故か篤さん達はじゃんけんをしている。

その結果は…

「やりい」

「負けた…」

鈴さんが勝った。すると鈴さんは僕の隣の席に、篤さんとセシリアさんはその直ぐ後ろの席に座った。

（ああ、成る程。誰が隣に座るかでじゃんけんしてたのか…。）

納得した僕をよそに、安全バーが下ろされ、グリーンストームが動き出した。

ゆっくりとコースターが上がっていき、上りきった時、猛スピードで下り始めた。

箒、セシリア、鈴「……ひゃあああああああつ！」「……」

光牙「いやっほおおおおお！！」

5分後

「あゝ、面白かった」

「め……目が回る……」

「体がふらふらしますわ……」

「い、意外と楽しかったわね……」

ジェットコースターが終わると、僕以外はふらふらになっていた。

「大丈夫ですか？なんなら休憩にしますか？」

「……！」「……」

その瞬間、皆さんの目が光ったような気がした。

「ま、まだ大丈夫に決まっているだろう！」

「その通りですわ！」

「こんな事で休む程、ヤワじゃないわよ！」

いきなり箒さん達が復活した。何故なんだ？

「とはいえ、連続で絶叫マシンに乗っていたら体がもたんからな」

「だから次はあれにするわよ！」

ビシッ！と鈴さんが指差したのは閉鎖された病院を再現したお化け屋敷だった。

たしか、あまりの怖さに最後まで辿り着けない人が続出する程怖いやつだ。

当然、僕に拒否権がある筈も無く、それに入る事になった。

内部

「あ……」

「うわあああつ!？」 「待つて…」

「ひいつ!？」

「返せ…」

「あああつ!？」

霊になった病人が次々と至る所から出てくる。しかし、このメイクの人凄いな。

そっくり過ぎて滅茶苦茶怖い。

「しかし、ここは長いな…」

「「「確かに…」」」

箒さんの意見に僕とセシリアさんと鈴さんは同意する。

このお化け屋敷に入って、既に20分近く経っている。しかし、まだ出口は見えない。

とりあえず進んで行くと、『あと50メートルで出口』という看板があった。

「もうすぐ出口みたいです…ね…?」

「?どうした光牙?」

「いや、これって…」

僕が指差す先は、病院の廊下のようになっていて、当然のように両横に病室があり、それが50メートル位続いていた。

「ま、まさか…これを行けと?」

「ぜつつつたい出るわよ…これ」

「光牙さん…どうしますか?」

「…折角ここまで来たんです。最後まで行きませんか?」

僕が尋ねると皆さんは少し躊躇ったが、承諾の返事してくれた。

「じゃあ…僕が合図をしたら一気に行きますよ?」

『分かった(分かりましたわ)(良いわよ)』

そう言っ僕達は走る体勢に入る。

そして、数十秒後。

「GO!」

僕はそう言っ走り出す。皆さんも合図を聞き、走り出した。

「**がああああ！**」

「いくなああああ！」

「おおおお！」

「ひいーっ!？」

「惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散……」

「うわあああ!？」

病室から飛び出す霊はとりあえず無視して走る。

「光牙！光牙！後ろ！！」

その時、鈴さんが声をあげ、振り向くとそこには――

「待てええええええ!!」
ぎゃあああああああああ

!!!

ナタを持った病人の霊が猛スピードで追い掛けて来た。

「は、走れええええええええ！」

「惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散惡靈退散……！」

「ひぎゃああああ！」

§

セシリアさんはなんかバイ叫びをあげていたけど、とにかく走った。

そして廊下を走り抜けると、出口が見え、僕達はそこへ猛ダッシュした。

「はあ……はあ……何とか終わりましたね……」

「寿命が3年は縮んだ……」

「もうお化け屋敷はこりこりですわ……」

「全く…酷い目にあつたわ…」

今、僕達は近くのベンチに座って休憩している。

「でも、たまには良いじゃないですか？」

「え？」

「だってこの間まで恐竜帝国や学校で大変だったじゃないですか。だがらたまにはこういう時があっても良いと思うんです」

そう言つと皆さんは顔を見合わせる。

「あれ…僕変な事を言いましたか？」

「いや、確かにその通りだ」

「たまには息抜きも必要ですからね」

「光牙も良い事言つじやない」

「ど、どうも…」

「とにかく、今はここを満喫しましょ！」

「はい！」

その後もフリーフォールやバイキング等の絶叫マシンなんかに乗ったりして凄く楽しかった。

なんだかんだであつという間に時間は過ぎ、最後にシャルさん達にお土産を買つて僕達は帰路に付いた。

＼ＩＳ学園、光牙自室＼

学園に着く頃にはすっかり暗くなっていた。

僕は自分の部屋に戻ると、何故か楯無さんとシャルさんが居た。

「お帰り、光牙」

シャルさんはまだ着いていけなかった事を気にしているのか、少し機嫌が悪いようだった。

「まあまあ、シャルさん。お土産買ってきましたから」

僕はシャルさんに紙袋の１つを渡した。

「え、僕に？」

「はい。ラウラさんの分もその中に入ってます」

「光牙…ありがとう！」

シャルさんは機嫌が直つたようだ。

「光牙君、私には無いの？」

「楯無さんにもありますよ」

楯無さんには少し大きめの紙袋を渡した。

「やったあ！ありがとう、光牙君」

「む…僕より大きい…」

「あ、それ生徒会の皆さんにですから」

「え！？」

「よし！」

何故かシャルさんが小さくガッツポーズをしていた。ちなみにこの後、千冬姉さん達にも渡しに行ったら千冬姉さんに泣かれる程喜ばれた。

何故なんだろう？

…謎だ。

番外編第三話 まさかの3人デート（後書き）

感想や要望等、お待ちしております

第22話 自分は自分で良い

〔光牙SIDE〕

夏休みのある日、朝食を食べた僕が部屋に戻っている時だった。
「ん？」

僕の部屋の前に水色の髪の子が立っている。

「誰だろう？」

僕はその女子に近寄り、声を掛けた。

「あの、僕の部屋に何か？」

「ひゃあっ！？」

声を掛けると、余程びっくりしたのか、その女子は声をあげた。

「あ、あの大丈夫ですか？」

尋ねると、女子は頷く。その女子の顔を見た時、1人の女子が頭に浮かんだ。「……楯無さん？」

「…え？お姉ちゃんの事を知ってるの…？」

「お姉ちゃん…？あの、貴女は？」

「…私は更識簪。更識楯無は…私の姉です…」 「そうだったんですか…」 因みに僕は向こうの世界ではあまりISの原作は知らない。

「ところで、どうして僕の部屋の前に居たんですか？」

「そ、それは…」

簪は少し黙り込むか、直ぐに口を開いた。

「この間の…貴方の模擬戦を見せて貰って…私は専用機持ちだけど、専用機が完成してなくて…貴方のISは特殊だって聞いたから…それで…」

「僕のISを参考に出来るかもしれないから、という訳ですね？」

そう言くと簪は静かに頷く。

僕は少し考え、結論を出した。

「良いですよ」

「え!？」

「僕のISで良ければ、喜んで」

「あ…ありがとうございます…じゃあ着いてきて…」

「分かりました。えーと…簪さんで良いですか？」

「…うん…私も…滝沢君って…呼ぶから…」

そう言う簪さんは何故か顔を赤くしていた。

〈第二整備室〉

ISスーツに着替えてから、簪さんに連れられ、やって来たのはISの整備等をする文字通り整備室。

そこには、夏休みにも関わらず、ISを整備している生徒が複数居た。

「あ! 滝沢君だ!」

「え!?! マジで!?!」

「うわあ! 本物だ!」

僕に気付いた途端、上級生と思われる生徒が声を掛けてきた。

「な、なんなんですか…?」

「…男で、しかも謎のISが使える滝沢君は…上級生の間でも話題になってる…」 「まだ続いていたんですか…」

ガクツと頂垂れる僕。

「…それより、早く始めないと…」

「あ、そうですね」

僕が答えるのを確認して、簪さんは右手を軽く突き出す。

中指にはクリスタルの指輪がはめられ、それが輝きを放つ。

その輝きが晴れると、簪さんの体は装甲を纏っており同時に浮遊していた。

「…これが、私の専用機…『打鉄式式』…」

打鉄の発展型と聞いていたが、打鉄と比べると、全体的にスマートになっていたのが印象的だった。

「これが…って、殆ど出来てんじゃないんですか?」 「うん…八割

位は…でも最終調整がなかなか上手くいかなくて……」

「例えば？」

「…スラスターや武装のミサイルに装甲にシールドエネルギー…それに実戦データも取らなきゃいけない……」

「成る程……スラスターはライガーのブースターが使えるかもしれないな。ミサイルはポセイドンかな？装甲は……」

「それなら大丈夫だよ」「え？」

後ろを振り向くと、のほほんさんが居た。

「装甲に関しては私がやるからね」こーくんはかんちゃんについてあげて」

「はあ…（かんちゃん？）」と言う訳で、装甲はのほほんさんに任せ、僕達は武装やスラスター、シールドエネルギーに着手する事になった。

「じゃあ、まずはライガーだな。」

僕はネオライガーのデータを表示する。

そのデータを簪さんに見せる。

「……………」

「使えそうですか？」

「…うん。このブースターのデータは…役に立ちそう……」

「そうですか。なら次は……」

ネオライガーのデータからネオポセイドンのデータに切り替える。

「……………」

「どうですか？」

「このミサイル…威力が高すぎる…しかもサイズが大きすぎ……」

どうやらストロングミサイル改のデータはあまり役に立たないようだ。

「…第一、どうやって打鉄式から発射するの…？」「あ…そうか」確かにそうだ。流石に毎回担いでぶん投げる訳にもいかない。

「…じゃあ装甲は本音に任せて、武装とシールドエネルギーは私がやるから…滝沢君はブースターをお願い……」

「了解です」

とりあえず僕はブースターを担当する事になり、作業に入った。時々、簪さんからアドバイス等を貰いつつ、調整をした。

それから僕は整備室に入り浸りになった。

調整をしてはアリーナでデータを取り、そのデータを元に調整し直す。

その繰り返し。

それを繰り返していく内に少しずつではあるが、打鉄式式の最終調整も少しずつ進んでいった。

そんなある日の事だった。いつも通り、調整を終えた僕が着替え終わり、更衣室から出た時だった。

「…簪さん？」

更衣室の入口のすぐそばに簪さんが居た。

「どうしたんですか？」

「……そ、それは……」

「??？」

「…滝沢君のIS…なんて名前なの……？」

「名前ですか？こいつの名前は『ネオゲッターロボG』。僕の相棒です」

僕は右腕の待機状態のネオゲッターGを見せながら言う。

「ネオゲッターロボG……カッコいい……」

そう言ってネオゲッターGをまじまじと見つめる簪さん。

「あの、他に要件は……？」「あ……えっと……もし滝沢君が良ければ……一緒にご飯食べようかなと……」

何故か簪さんが赤くなっている。どうしたんだろう？「ご飯ですか？良いですよ。」

「……ありがとう……」

そう言って僕達は食堂に向かう。

向かう途中で、僕は簪さんに僕の事やゲッターについて話した。当然、簪さんはビックリしていたけど話した事を信じてくれた。

その後、簪さんも自分の事を話してくれた。

なんでも出来る楯無さんと比べられた事や、楯無さんが独力で専用機を作り上げた事、それによって、自分も出来ると思い打鉄式を1人で組み立て始めた事等を話してくれた。

「お姉ちゃんみたいになろうとしてたくさん努力はした…でも、お姉ちゃんは常にその遥か先に居た…やっぱり私は無能なのかな…」
悲しそうに語る簪さん。

「あの…こんな言い方は変ですけど…簪さんは楯無さんにはなれないと思いますよ。簪さんは楯無さんじゃないんですから」

「え？」

「楯無さんは楯無さんで、簪さんは簪さんで良いじゃないですか。無理に真似をしなくても、簪さんは自分なりに頑張れば良いと思いますよ」

「私なりに…頑張る…」

「……すみません、偉そうな事言って」

「…ううん、むしろ嬉しい…」

「え？」

簪さんを見ると少し頬を赤らめていた。

「今まで…そんな事言ってくれる人なんか居なかったから…凄く嬉しい……ありがとう、滝沢君」

すっかりした口調で簪さんは僕をすっかり見ながらお礼を言う。

「いや…それほどでもありませんよ…」

僕は照れ隠しに少し顔を背ける。

改めて思うが、簪さんは可愛い。

「あの、滝沢君…？」

「え！？な、なんですか？」簪さんの言葉に我に帰る僕。

「これからも…滝沢君の事、頼って良い…？」

そう言って、真剣な表情で僕の返事を待つ簪さん。

「勿論ですよ」

そう言うと、簪さんの表情が明るくなり、僕の手をとる。

「ありがとう！」

そう言って満面の笑みを浮かべた簪さんはとてつもなく可愛いかった。

「あ、あの簪さん、そろそろ行きませんか？」

「そうだね、じゃあ行こう！」

僕達は手を握ったまま、食堂へ向かった。

だけど、この会話を聞いていた人が居たことに、僕は気が付かなかった。

〈光牙SIDE OUT〉

〈楯無SIDE、廊下〉

私は光牙君と、簪ちゃんのやり取りを見ていた。

「いずれ簪ちゃんの事を頼もうと思ったけど、どうやら無駄みたいね」

まさか彼処まで簪ちゃんを惹き付けるとは…流石に思わなかったけど…

「ふふっ、ありがとう、光牙君」

私はそう言くと、2人が向かった食堂に向かった。

第22話 自分は自分で良い（後書き）

後2～3回で夏休み編は終了の予定です。

番外編第四話 繰り返される悲劇（前書き）

千冬がキャラ崩壊しました。

番外編第四話 繰り返される悲劇

〈ナレーションSIDE〉

とある朝、箒は朝稽古の為、胴着に着替えて竹刀を持ち、光牙の部屋に向かっていた。

「全く…光牙ときたら、最近見ないと思ったら楯無さんの妹の専用機を完成させる為に整備を手伝っていたのなら言ってくれば良いものを…だが！今日という今日は稽古に付き合って貰うからな！」

そう言っ、箒は光牙の部屋に向かった。

〈光牙自室前〉

光牙の部屋の前に着いた箒がドアノブに手を掛けようとした時だった。

「え？」

「……………」

同時に手を掛けようとした手がもう5つ。

それは、セシリア、鈴、シャルロット、楯無、簪だった。

「何故皆がここにいる？」

「私は光牙さんを朝食に誘いに来たのですわ」

「あたしは光牙と模擬戦しようと思ったからよ」

「僕も光牙と模擬戦しようと思ったんだけど…」

「私は光牙君に生徒会の仕事を手伝って貰おうと思って」

「…滝沢君と打鉄式式の整備の事を話し合おうと思ったから」

「それは奇遇だな。私も光牙を朝稽古に誘おうと思っていた所だ」

そう言つて箒達が睨み合う。

「よし！ここは光牙に決めて貰おう！」

箒がそう言つと同時に光牙の部屋のドアを開ける。

「おい光牙！朝だぞ！起きろ！」

中に入り光牙に大声を投げ掛ける箒。そんな彼女に続くように5人も入る。

だが、光牙は寢息を立てすやすやと眠っている。

「夏休みだからといって、ぐうたらはいかんぞ！起きろ！！」

そう言つて布団を剥ぎ取る箒。

その瞬間、その場に居た全員が凍り付き、箒は持っていた竹刀を落とした。

何故なら、光牙のすぐ横で全裸のラウラが寝ていたからだ。

「な…な…」

衝撃の光景に思わずたじろぐ箒達。

そんな中で箒が落とした竹刀を拾い上げ、思い切り振りかぶる。

「こ、光牙の、ばかああー！ーッ！ー！！！」

箒の絶叫と共に、思い切り振り下ろされた竹刀は綺麗な弧を描き、
寝ている光牙の左頬に炸裂した。

「ひでぶうつつ！？」

某格闘漫画の雑魚キャラのような声を上げ、光牙はベッドから転げ
落ちる。

「うおおおっ！いったあ！？いった！！！」

頬を押さえながらゴロゴロとのたうち回る光牙に、残る5人から制
裁が下される。

「光牙さん！不潔ですわ！！！」

「はうつ！？」

セシリアからは竹刀が炸裂し、真っ赤に腫れた頬に平手打ちを喰ら
い、

「このバカ光牙！！！」

「ふあ！？」

鈴からは股間に蹴りを喰らい、

「光牙の変態！チカン！鬼畜！！！」

「光牙君…見損なつたわ…」

「最低…」

シャルロットからは悪口を言われ、楯無と簪からは白い目を向けられる光牙だった。

「じゃあシメと行くか」

『そうですわね（そうね）（そうだね）（そうね）（そうね…）』

箒が言うに残る5人が答え、箒は刀を、セシリアは大型ライフルを、鈴は青竜刀を、シャルロットはアサルトライフルを、楯無は『ミステリアス・レイディ』のランスを、簪は薙刀を展開した。

「光牙、安らかに眠れ…」

「せめて苦しめないように一撃で逝かせてあげますわ」

「よし、殺そう！」

「光牙の事は忘れないからね」

「生徒会長権限でお墓を作ってあげるわ」

「…さよなら………」

全員が言い終わると、光牙に武装を構える。

「あ、教官、おはようございます」

その時、いつの間にか起きていたラウラが口にした言葉を聞いた箒達
達が固まる。恐る恐る後ろを向くとそこにはどす黒いオーラを出し、
絶対零度の目付きをした千冬が居た。

「ほう…私の光牙を痛め付けた挙げ句、武器を向けるとはいい度胸
をしているな……………」

この後、光牙の部屋がまたもや阿鼻叫喚になったのは言うまでもな
い。

（一時間後）

千冬の地獄が終わり、ボロボロになった箒達6人は、光牙に謝った
後、千冬と左頬に湿布を貼った光牙の前に正座で座らされている。

「…という訳で、私が起床していたら、何故か嫁が箒達にリンチを
受けており、そこに教官が来たという訳です」

「報告ご苦労、ラウラ」

「恐縮です、教官」

そう言って敬礼をするラウラ。

「って！元と言えば、あんたが原因作っただんでしょうが！！」

「ふむ、確かにそうだな」

鈴がそう言つと、千冬は少し考え込む。

それから約30秒後、結論を出した。

「ボーデヴィツヒ、お前も原因を作ったのだから罰を与える。無論、篠ノ之達もだ」

その言葉に6人が『ええっ!?!』と声をあげる。

「そして、その罰は……………光牙に決めて貰おう」

「え? 僕ですか?」

「当たり前だ。たまにはお前自身が一度ガツンとやってやれ。安心しろ、私が許可する」

『ひ、酷い…』

ガクツ、と項垂れる7人。

「うーん……………そうだ!」

光牙の頭の中でピコツ、と豆電球が灯った。
その時、思わずたじろぐ7人。

「箒さん達には……………」

そこからたっぷり間を貯めて、光牙は口を開いた。

「今日1日、僕が用意した服で居て貰います!」

『……………は?』

呆氣にとられる7人。

光牙はクローゼットを開けると、奥から7つの紙袋を箒達に1つずつ渡した。

「じゃあ、僕は外に居ますから、着替え終わったら言って下さいね」
そう言っつて光牙は部屋から出ていった。

（10分後）

箒達から着替え終わったとの声がし、光牙が入ると、そこにはくの一の箒、白いナース服のセシリア、チャイナドレスの鈴、婦警のシヤルロット、ゴスロリのラウラ、セーラー服の楯無、メイド服の簪が居た。

「おお！皆さん似合っつてますね！こんな事もあるつかとこっそり用意しておいて良かった！」

「こ、光牙…これはスースーして落ち着かないんだが…」

「でも、これはこれで良いかもしれませんわ…」

「まあ、光牙にしては良い線行つてるとは思っつけど…」

「ねえ光牙、これ似合っつかな？」

「ほう、これがクラリツサの言っつていた“ゴスロリ”というもののか。案外良いものだな」

「セーラー服かぁ！なんか新鮮で良いわね！」

「…恥ずかしい…」

「あ、服はそのままプレゼントしますね。それじゃあ今日1日はそれで過ごして下さいよ」

そう言うと箒達は渋々承諾し、部屋から出ていった。

「光牙。私には無いのか？」

「千冬姉さんですか？あるにはありますけど…」

千冬に8つ目の紙袋を渡す光牙。

「こ、これは…！……ふふふ、良い事を思い付いたぞ…」

「…渡さなきゃ良かったかな？」

それから箒達7人は、光牙に貰った服で1日を過ごしたのだが、その夜、ISを使用した罰として、千冬の特別訓練を受ける事になり、アリーナに呼び出された。

「…遅いな、織斑先生」

「本当ですわね」

「もしかして忘れてんじゃない？」

「いや、教官に限ってそんな事は無い」

「待たせたな、お前達」

その時、千冬の声が聞こえ、箒達は声がした方を向く。だが、その姿は黒いバニーガールのような格好に何故か右手にムチを持っていた。

千冬の性格上、そんな格好をするのは異様とも思えた為に、箒達はドン引きしていた。

「ふっふっふ……さて、教育してやるか……」

ムチをしならせ、不適な笑みを浮かべながら7人に迫る千冬。

7人は既に、蛇に睨まれた蛙も同然だった。

そしてその夜、アリーナから箒達7人の叫び声が聞こえたとか。

余談だが、箒達の格好が新聞部によって極秘に撮影され、学校中の新聞に掲載されるのはまだ少し先である。

番外編第四話 繰り返される悲劇（後書き）

今回で、夏休み編は終了です。
次回から本編に戻ります。

第23話 疾走の戦い！駆け抜ける、ネオライガー！（前書き）

皆様のおかげでアクセスが10万を越えました！
本当にありがとうございます！

第23話 疾走の戦い！駆け抜ける、ネオライガー！

〔光牙SIDE〕

楽しかった夏休みも終わり、新学期に入った。

今日の実習は今月末に行われるISのレース大会、『キャノンボー
ル・ファスト』に向けて、高速機動の授業となった。

本来なら2年生から参加するのが普通らしいが、今年は1年生に専
用機持ちが多い為、1年生も参加する事になったらしい。

そう言う訳で、皆さんは機体の調整をしている。

それは専用機持ちの皆さんも同じだった。

セシリアさんは高速機動戦の強化パッケージの調整、シャルさんと
ラウラさんはブースターの増設、箒さんと僕はシールドエネルギー
の調整といった具合だ。

「光牙、紅椿のエネルギー分配を見てくれないか？」

「良いですよ」

隣で紅椿の調整をしている箒さんが横に並んでディスプレイを見せ
てくる。

「やっぱ紅椿って凄いですね。展開装甲を展開するだけで高速機動
仕様になるんですから」

「だがエネルギーが足りなければ意味が無いだろう」

確かにディスプレイには展開装甲を展開した時に、エネルギーが足
りない事を表示していた。

「だったら、けん……おおう、危ない危ない……」

「ん？剣がどうかしたのか？」

「いえいえ！なんでもありませんよ！」

（よく考えたらまだ絢爛舞踏が発動してなかったな…）

紅椿の展開装甲には多目的動力が使用されていて、それを攻撃、防御、機動にも転用出来る。しかしそれは単一仕様能力である『絢爛舞踏』によつて、エネルギー供給をしなければすぐにエネルギー切れを起こしてしまう。

つまり、紅椿は単一仕様能力を発動出来なければ、真価を発揮出来ないのだ。

「そう言えば光牙はどんな風にしたんだ？」

「僕は基本的にはライガーで行きます。場合によっては、ドラゴンも使いますけどね」

「ライガーは分かるとして、ドラゴンの時はどうするつもりだ？」

「機動性にエネルギーを回してトマホークとドラゴンソードを封印します。仕掛けるときは、スピンカッターとゲッタービームと、後は格闘ですね」

「そうか、私はもう少し考えてみるとしよう。お互い頑張ろうな」

「勿論ですよ」

そう言つて、篝さんと別れ、ネオゲットマシンを展開する。

「いくらライガーがスピードタイプでも何かあった方が良いでしょう……うーん……」

腕を組んで考える僕。

ふと横を見ると、シャルさんとラウラさんがアリーナのコースを駆け、学園のモニュメントである中央タワーの外周へと上昇していた。

その上昇して行く時、2人の機体がイグニッション・ブーストで加速していた。その瞬間、僕の頭の豆電球がピコツ、と灯った。

そして直ぐ様、ライガーのデータを表示する。

「こりゃいけるな……」

とある事を閃いた僕だったが、この後の実習はひたすらシールドエネルギーを行ったのだった。

それからキャノンボール・ファストまで、放課後は高速機動に馴れる為に皆さんと特訓し、空いている時間にはレースに向けての秘策の準備をした。

そんなこんなで日にちはどんどん進み、今日はレース前日となった。

「よし、これで完成つと！」

自室でパソコンに向かっていて僕が画面の『開始』のアイコンをクリックする。すると、作成したプログラムが接続したネオゲッターGへのインストールを開始した。

「なんとか間に合ったな。さてと、明日に向けて寝るか」

そう言って僕はベッドに入り眠りに付いた。

次の日、ついにキャノンボール・ファストの当日となった。

既にレースが始まっており、現在は二年生のレースが行われている。レースは終盤に入っており、次は僕達一年生の専用機持ちの出番の為、僕はライガーを展開し、他の参加者の篤さん、セシリアさん、鈴さん、シャルさん、ラウラさん、それにどうにか調整が間に合った簪さんもISを展開していた。

「皆さん、準備は良いですか？スタートポイントまで移動しますよー」

そこへ、山田先生の声が響く。

どうやら二年生のレースが終わり、出番が来たようだ。各々がそれに頷き、マーカの誘導に従ってスタート地点に移動する。

『それでは皆さん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します』

アナウンスが響き、篤さん達がスラストを点火する。

僕もライガーのロケットブースターを点火した。

そして、前方のシグナルランプが点灯する。

その約三秒後、点灯していたランプが『GO』に変わり、レースの火蓋が切って落とされた。

「くっ……！」

スタートの急激な加速で一瞬景色が吹き飛ぶ。

特訓の時も同じだったが、これはいつやっても慣れない。

そんな事を考えている内に、第1コーナーを過ぎ、セシリアさんを先頭にして列が出来ていた。
ちなみに僕は最初から数えて4番目。

「光牙、お先に！」

「先に行くね、滝沢君」

その間にシャルさんと簪さんが僕を追い抜き、上位に迫って行く。
僕も続こうとしたが、目の前を通り過ぎた赤いレーザーがそれを阻む。

「くっ、簪さんか！」

「悪いが先に行かせて貰う！」

紅椿の刀から、赤いレーザーの群れが放たれ、僕に迫る。

「そう簡単にはいきませんよ！」

左腕のアンカーが4つに割れ、ビームガンの砲口が現れる。

展開したビームガンから放ったビームで、僕はレーザーを相殺する。

そこへ簪さんが刀で斬り掛かって来た。

それを高速回転するドリルアームで迎え撃つ。

刀と回転するドリルがぶつかり、火花が散る。

そこへ上位のセシリアさんと鈴さんの攻撃が放たれた。

「っ！」

すると、簪さんは僕を蹴り飛ばし、その場から離れる。

そして、蹴り飛ばされた僕のライガーに本来なら外れる筈だった2人の攻撃が命中した。

「うわあああつ!!」

吹っ飛ばされる僕はロケットブースターを噴かして、なんとか持ち直し、レースに復帰する。

「完全に出遅れたな…でも！僕だって負けたくない!!」

ブースターを最大出力にし、コーナーを巧みに曲がりながら少しずつ距離を詰めていく。

そして、直線コースに入った時、僕は勝負に出た。

「行くぜ、ライガー!!」

そう言っ、僕は昨日インストールした新しいシステムを起動させた。

「名付けて！『マツハ・イグニッション』!!」

その声と共に、イグニッション・ブーストとネオゲッタービジョンが同時に発動する。

その2つが合わさった爆発的な加速によって、ライガーの速度が一気に音速に達し、直線コースを流星の如く駆け抜けた。

「うおおおおおっ!!!!」

リードしていた皆さんを一瞬で抜き去り、僕はトップに躍り出た。

「なっ!?!」

「こ、光牙さん!？」

「バカな!？」

僕が追い抜いた事に驚愕する皆さん。

だが僕はスピードを緩める事なく、トップを疾走する。

しかしそんな僕の目の前に、突如として緑色のデータが表示された。それは、メカザウルスが出現した時、その居場所を表示する『サーチマーキング』のデータ。

そのデータには、メカザウルスの居場所が表示されており、しかもその場所はこの会場の上空だった。

「な!?!まさか!?!」

上空を見上げる僕。

上空にはデータ通り、メカザウルスが佇んでおり、しかもメカザウルスの両肩に付いている竜の首から放たれた熱線が僕に向かっていった。

「くっ!」

そして、熱線が着弾し、辺りを黒煙が覆った。

「光牙SIDE OUT」

「ナレーションSIDE」

「こ、光牙!」

シャルが前方の光景を見て、声をあげる。

だが、前方の黒煙の中から赤、青、黄の戦闘機、ネオゲットマシンが飛び出した。

「チエエンジツ！ネオドラゴン！」

その声が響き、ゲットマシンが赤いボディのゲッター、ネオドラゴンに合体した。

「光牙、大丈夫！？」

直ぐ様シャルはネオドラゴンに駆け寄り、光牙に声を掛けた。

「大丈夫ですよ。被弾する直前にオープンゲットでかわしましたからね。それよりも今は……」

光牙の先には熱線を発射したメカザウルスが佇んでいる。

「貴様が滝沢光牙だな！」

「恐竜帝国か！」

「その通り！私はニオン、貴様の命、貰い受けるぞ！」

そう言くと、辺りに特殊な光学迷彩で姿を消していた飛行型メカザウルスが多数出現した。

「光学迷彩！？それでサーチマーキングに引っ掛からなかったのか！」

「やれ、メカザウルスどもよ！」

ニオンと名乗ったメカザウルスが合図を出すと、メカザウルスが会

場に向かっていった。

「まずい！彼処にはまだ人が！」

『滝沢君！』

「山田先生！メカザウルスが！」

『分かっています！織斑先生からバトルモードの許可が下りたのでリミッターを解除します！』

山田先生がそう言うと、ネオゲッターGのリミッターが解除される。

「よし！モードチェンジ！バトルモード！！」

ネオゲッターGのモードが戦闘兵器としてのバトルモードに変わり、ネオドラゴンとは会場のメカザウルス達に向かっていった。

第24話 卑劣なる恐竜帝国の罠！

（ナレーションSIDE）

メカザウルスが現れた事により、会場は大混乱となった。

そんな中、箒、セシリア、鈴、ラウラ、簪は向かって来る飛行型メカザウルスと戦闘を繰り広げていた。

箒と鈴がメカザウルスを両断し、セシリア、ラウラ、簪が向かってくるメカザウルスを迎撃する。

そこへ光牙とシャルが駆け付けた。

シャルはアサルトライフルを展開し、メカザウルスに向かって乱射する。

光牙はそれに続くように、ネオドラゴンの両腕に格納されている銃器、『ゲッターマシンガン2』を展開した。

「うおおおっ！」

引き金を絞ると、マシンガンから多数の弾丸が放たれ、メカザウルスが撃ち抜かれていく。

「ゲッタアアア！ビィィムッ！！」

更に、マシンガンを格納したネオドラゴンの額から放たれた桜色のビームが、多数のメカザウルスを爆散させる。しかし、敵は尚も数に任せ、進行してくる。

「ならば一気に決める！」

マッハウイング2を展開し、上空に舞い上がる光牙。

「ゲッタアアア！チャアアジッ！」

そう言うと、ネオドラゴンの全身が赤く光り輝き、その光がネオドラゴンを包んで巨大な龍となった。

「ドラゴオオオン！ノヴァアアア！！」

真つ赤な龍となったネオドラゴンが飛翔していき、メカザウルスを蹴散らしていった。

「はああああっ！」

ドラゴンノヴァが終了したネオドラゴンに、突進して来たニオンのメカザウルスの鋭利な爪が襲い掛かる。

「ダブルトマホーク！」

それをダブルトマホークで受ける光牙。
しかし、ダブルトマホークは爪によって、真つ二つにされてしまった。

「何！？」

「でりゃああああっ！！」

から空きになった懷に爪が迫る。

「ゲッタービィイム！」

それを迎え撃つように、胸部から緑色のゲッタービームが放たれた。ネオドラゴンに向かって突進していたニオンにゲッタービームが直撃する。しかし、ゲッタービームはメカザウルスの装甲に届く直前に展開した緑色の膜のような物によって阻まれ、拡散した。

「効かぬわぁ！」

そのままニオンは突進を続行し、その爪をネオドラゴンに振り下ろした。光牙は腕をクロスして防御するが、余りのパワーに弾き飛ばされてしまった。

「このまま止めを「させない！」なにい!？」

止めを刺そうとしたニオンに、アサルトライフルを乱射するシャルが迫る。

「ちいつ！よくも邪魔を！ならば貴様から血祭りにあげてくれる！」

そう言つて、ニオンがラファールに突撃する。

アサルトライフルで迎え撃つシャルだが、ライフルの弾丸がニオンのメカザウルスに着弾しても、ダメージを与えられた様子は無かった。

「ライフルが効かない!？」

「遅い!!！」

突撃の勢いを利用し、ショルダータックルをラファールにぶちかますニオン。

「まだ終わらぬ！」

吹っ飛ばしたラファールに両肩の龍の首から熱線が放たれ、ラファールのブースターと、物理シールドを撃ち抜く。

「うわあああああつ!!!!！」

それによって、シャルは墜落し、ISが解除され、気を失ってしまった。

倒れているシャルを見下ろしながら、ニオンは残ったメカザウルスの内、とある4機に指示を出した。

一方、弾き飛ばされた光牙はなんとか体勢を立て直していた。

「くっ……」

立ち上がるネオドラゴン。しかし、そのボディには裂傷やヒビが刻まれ、両腕のスピнкаッターが砕けていた。

「どういう事だ……？メカザウルスにゲッタービームを無力化するような機能は無い筈……」

「教えてやろうか？」

「っ！」

光牙が声がした方を向くと、先程光牙を弾き飛ばした張本人、ニオンが居た。

「私のメカザウルス デスには周囲のゲッター線を吸収し、それを原料としたゲッター線に対するバリアを展開出来るが装備されているのだ！」

「そんな!？」

「だがゲッター線を吸収する為に通常の八虫人類では1分と耐えられん。

しかし!我ら地竜一族にはゲッター線に対する抵抗力がある!それによつて私はデスを手に入れた!」

「そんな!？だからって元が八虫人類ならいくら抵抗力があつたつて命を削るようなものだぞ!自分の命が惜しくないのか!？」

「知つたことか!我らはこの抵抗力ゆえ、恐れられ幽閉されてきた!我が一族の解放の為なら、私の命の一つや二つ惜しくはないわ!」

「なんて奴だ!自分の命を犠牲にしてまで」

「箒さん!？皆さんも!」

いつの間にか、ネオドラゴンの周囲に箒達5人が居た。

「すまぬ!敵の数が多く、已む無く撤退して来たのだ!……」

申し訳なさそうに謝る箒達。上空には多数のメカザウルスが飛行している。

「箒さん達が無事で何よりですよ。それより!……」

「聞いたわ。あの二オンって奴にはゲッター線が効かないんでしょ?」

「はい……」

「だったら、私達の力を合わせれば良いだけだ。光牙1人で無理でも、私達ならなんとかなる！そうだろう？」

「……はい！」

そう言っただけで光牙はドラゴンソードを展開し、箒達も武器を構えて二オンに視線を向ける。

「仲間と力を合わせる、か……だがこの後もそんな事を言ってもらえるかな？」

「どういう意味だ！」

「それは………こういう事だ……！」

二オンが横に移動する。

するとそこには、四肢をメカザウルスの触手によって拘束され、気を失っているシャルロットの姿があった。

「し、シャルさん！？」

「貴様！シャルロットを放せ……！」

「ククク………滝沢光牙！この女を返して欲しければ、貴様の仲間と闘ってもらおうか！」

「なんだと……？」

「もし従わぬのなら、この女の命は無い！さあ、どうする！」

そう言つて、脅すようにデスの爪をシャルロットの首に当てる二オン。

「……分かつた。言う通りにする」

『光牙！？（光牙さん！？）（光牙！？）（嫁！？）（滝沢君！？）』

「あんな奴の言つ事に従うのか！？」

「シャルさんの命には変えられません」

反論する筈を光牙は正論で返答する。

「でも…秘策はあります」

『え！？』

光牙の“秘策”という言葉に反応する筈達。

「それは……………という事です」

「少し荒っぽいが、それしか無いな」

「良いわ、やってやろうじゃない！」

「私もだ！シャルロットを救う為だからな」

「私もやる！」

「セシリアさん、この秘策の鍵はセシリアさんにあります。頼みましたよ」

「任せて下さい！」

「じゃあ…行きます！」

そう言つて、光牙はドラゴンソードを構え、箒に斬り掛かった。

「はあっ！」

刀で受け止め、斬り返す箒。

それをかわし、距離を取った光牙に、衝撃砲、弾丸、荷電粒子砲が迫る。

「ゲッターブレイザー！」

額と胸部から同時に放たれたビームが交わり、螺旋を描きながら、弾丸を撃ち落とし、荷電粒子砲を相殺する。

衝撃砲は回避し、ドラゴンソードを構えた光牙は、再び箒達に向かつていく。

「すみません、皆さん！」

イグニッション・ブーストで加速した光牙がすれ違い様に、ドラゴンソードで鈴とラウラの装甲を切り裂く。更に、額から放たれたゲッタービームが紅椿の左肩の一部を、打鉄式式のウイングスラストーの一部を溶解させる。

「後はお願ひします！」

「光牙…すまない！」

そう言つて箒が刀でネオドラゴンを斬り付ける。

「くっ！？」

「我慢してよ、光牙！」

次に鈴が青竜刀を振り下ろす。

「ぐっ！？」

「シャルロットの為だ…すまん！」

ラウラがレールガンを発射し、光牙に炸裂する。

「があっ！」

「滝沢君…ごめん！」

打鉄式式のミサイルがネオドラゴンに襲い掛かる。

「ぐああああっ！」

ミサイルが着弾し、装甲に弾痕が刻まれ、ダメージが光牙にシンク口する。

ミサイルの爆煙の中からボロボロのネオドラゴンが落下する。

「さあ…！約束通り皆さんと闘ったぞ！シャルさんを放せ…！」

ボロボロになった体を起こしながら、光牙はニオンに怒鳴り付ける

ように叫ぶ。

「断る」

「なにい!？」

だがそれを、ニオンは一言で斬り返す。

「この時を待っていた!お前らが互いを傷付けあったこの時をな!」

そう言つてニオンは熱線を発射する。

熱線が光牙を襲い、光牙は倒れ込む。

「光牙!」

「ぐ…セシリアさん!今だ!」

『承りましたわ!』

プライベート・チャネルを通じて、セシリアの声が響く。

そのセシリアは、光牙達から少し離れた位置に佇んでいた。

ストライク・ガンナーを収納し、4機のビットを展開し、ライフルを構えている。

5つの砲口が狙う先には、ニオンの姿があつた。

「喰らいなさい!ブルー・ティアーズ・フルバースト!」

5つの砲口が同時に火を噴き、ビームがニオンに迫る。

「何だと!？」

しかし、ニオンが咄嗟に取った回避行動により、寸前の所でかわされてしまった。

「どうやら今の切り札のようだな！これでお前らにはもう手立てはあるまい！私が終わりにしてくれる！」

その言葉に、微笑みを浮かべるセシリア。

「終わりにするのは……あなた方でしてよ！！」

ビシッ！とニオンを人差し指で指差す。

「何？」

その直後、ニオンの背後をビームが貫いた。

「ぐあああつ！？なんだと！？」

更に、4つのビームがシャルロットを拘束している触手を焼き切る。拘束から解放されたシャルロットを付近に移動していた筈が抱え込む。

先程のビームは、BTエネルギー高稼働率時にのみ使える、偏向射撃。

簡単に言えば、ビームを曲げる事だ。

それにより、5つのビームを曲げ、1つのビームをニオンに、4つのビームを触手に向け、曲げたのだ。

「光牙さん！今ですわ！」

「おっしやあ！ゲッタアア！ヒーリングッ！！」

ネオドラゴンが立ち上がり機能の名を叫ぶ。

すると、ボディが緑色に輝き、装甲の裂傷とヒビが塞がっていく。光牙は周囲のゲッター線を吸収し、装甲の再生やエネルギーの補給を行う、『ゲッターヒーリング2』を発動させたのだ。

そして、ゲッターヒーリングが終了した時、装甲の傷は全て塞がり、エネルギーが満タンに補給されていた。

「おのれ、ゲッター！どうやら私を本気で怒らせたようだな…」

拳を握り締め、ネオドラゴンを睨み付けるニオン。

その目には、殺意がこもっていた。

第25話 決着の光、それは命の輝き（前書き）

今回は衝撃の内容です。

第25話 決着の光、それは命の輝き

「ナレーションSIDE」

「チェエンジ！ネオポセイドン！」

掛け声と共に、ネオドラゴンが分離しネオポセイドンにチェンジする。

両腕をメカザウルスに向け、首の周りのカバーが開く。

「ゲッタアアア！トリプルサイクロン！！」

両腕のと首の周りのファンから発生した計3つの竜巻が合わさり、巨大化した竜巻がメカザウルスを飲み込む。

「ガアアアアア！！」

その竜巻によってメカザウルスは雑巾絞りのようにねじ曲がり、爆散していく。

「光牙！シャルロットを先生に引き渡して来たぞ！」

「ありがとうございます、篤さん！」

「残りのメカザウルスも片付けるぞ！」

「はい！」

大な威力にネオポセイドンが大きく後退する。

「くっ！なんて力だ！」

ネオポセイドンが後退した事に驚愕する光牙。
そこへ再度、メカザウルスが突進する。

「オープンゲット！」

ネオポセイドンがネオゲットマシンに分離し、突進をかわす。

「チェレンジ！ネオドラゴン！」

ネオドラゴンに合体する光牙。

だが、そこへロケットの先に巨大な槍を付けたようなメカザウルスが突進してきた。

光牙は回避するが、ロケット型メカザウルスはUターンして、再び迫る。

「なに！？」

咄嗟に回避行動を取るが、後ろからの突進に反応が少し遅れ、右脇腹を挟られる。

「ぐっ！しまった、ゲッターダイナモが！」

今の一撃で、ゲッターダイナモが破壊されてしまい、更に別のメカザウルスが体当たりを背後から喰らわせ、ネオドラゴンを叩き落とした。

「光牙！」

「今行きますわ！」

光牙を助けに行こうとした箒達だが、別のメカザウルス達がそれを阻む。

「邪魔よ、どきなさい！」

鈴が龍砲を発射するが、メカザウルスはそれを回避し、一気に接近して鈴を殴り飛ばした。

「きゃあああああつ！！！」

「鈴！」

更に、箒達にもメカザウルスが襲い掛かった。

『きゃあああああああつ！！！』

箒は刀を噛み砕かれて、メカザウルスの爪で斬り付けられ、セシリアはビットを奪われて滅多打ちにされ、ラウラは触手に捕まり、地面に何度も叩き付けられ、簪はメカザウルスが放ったニードルがブースターを貫き、投下された爆雷を浴びた。

それにより、4つのISがボロボロになって墜落する。

「うおおおお！」

叩き付けられたネオドラゴンが瓦礫の中から立ち上がる。
だがそこへ、メカザウルスの群れが飛び掛かるように襲って来た。
ネオドラゴンはその群れに飲み込まれる。
メカザウルス達は徹底的にネオドラゴンに攻撃を加える。

「ゲッタービーム！」

その時、桜色のビームが放たれネオドラゴンに群がっていたメカザウルスが爆発する。

その爆煙の中から現れたのは余りにも無惨な姿になったネオドラゴンだった。

ヒビや裂傷が全身に刻まれ、頭部の三本の角の内、右の角が折れ、残り二本にもヒビが入っている。

だが、そんな状態のネオドラゴンにメカザウルスは容赦なく襲い掛かる。

4機のメカザウルスがネオドラゴンに接近し、亀のような2機が触手を絡ませ、左足と頭の角に噛みつく。首長竜のようなメカザウルスが腰に巻き付き、ワニのようなメカザウルスが右足に噛みついた。

「ぐあああああああつ！」

全身に走る痛み、光牙は痛恨の叫びをあげる。

オープンゲットも、全身に絡み付いているメカザウルスのせいで出来ない。

「無様だな、ゲッターロボ！止めは私が刺してくれる！」

ニオンが龍の首をネオドラゴンに向ける。

「死ねええええ！」

だが、熱線を発射しようとした直前、異変が起きた。

「ガアアアアアア！」

突如、ネオドラゴンに絡み付いていたメカザウルスが叫びをあげ、

“溶け始めた”。

「バカな！マグマの熱にも耐えるメカザウルスが溶けると！？まさか！ゲッター線を放出しているのか！？」

ニオンの言う通りだった。ネオドラゴンがゲッターエネルギーを解放したのだ。その証拠に、メカザウルスは機械の部分だけ残し、溶けていた。

そしてそれは、箒達と戦闘を行っていたメカザウルスにも及んでいた。

「な、何が起こったんだ！？」

突然メカザウルスが溶け始めた事に驚愕する5人。

『…皆さん、聞こえますか？』

そこへ、光牙から通信が入る。

「光牙！これはお前がやったのか？」

箒が尋ねると、モニター越しに光牙が頷く。

『それよりも、早くここから離れて下さい』

「どうしてだ？」

『いいから早くして下さい！』

「っ！わ、分かった…」

光牙の怒鳴るような声に、箒達は何も言えなかった。応えた箒達が会場から離れていった。

「…これで良い。ニオン！後はお前だけだ！」

向き直り、ニオンと対峙する光牙。

「お前は許さない…！例え神が許してもな…！」

ドラゴンソードを両手に展開し、光牙はニオンに突撃した。

「うおおおおっ！」

「おのれえええ！」

ニオンは両肩から放たれる熱線で迎え撃つ。

その熱線を巧みにかわしながら、デス目掛けてネオドラゴンは突き進んでいく。

「はあああああっ！」

ニオンは右手を突きだし、爪を突き立てようとする。が、左手のドラゴンソードがそれを受け止め、右手のドラゴンソードがデスの左腕を肩の付け根から切断した。

「き、きさまああああ!!」

激昂したニオンが残った右肩の龍の首から熱線を放つ。

光牙は剣を交差して受けたが、一振りは熱線に耐えきれず破壊され、もう一振りは衝撃で吹き飛ばされ、クルクルと回転しながら宙を舞い、地面に突き刺さった。

「でやああああっ!!」

武器を失った光牙だが、ニオンにがっかりと組み付く。

「貴様、何をする!放せ!」

右手の爪でネオドラゴンを攻撃するニオン。

「放すもんかあ!!」

だが光牙は一步も退かず、組み付く。

「ごめんな、ネオゲッターG…こんな僕にだが、最後まで付き合ってくれ!」

そう言つて光牙は、ネオドラゴンの腹部のハッチを開き、手を突っ込む。

そして腹部から何本もケーブルが付いた緑色に光るキューブのようなもの、ゲッターの心臓部、“ゲッター炉心”を取り出した。

「いくら対ゲッター線のバリアでも、これは防げまい!」

「お前!まさか死ぬつもりか!?!」

「お互い様だろ？」

「や、止める！止めるお！！」

炉心を握る腕を破壊しようと、龍の首を向けるニオンだが、その首を光牙は握り締め、引きちぎった。

「止めてくれ！私はまだ……！！」

「往生際が悪いじゃねえか……」

「ひいつ！？」

光牙は笑いながら言う。

「一緒に……地獄へ逝こうや！！」

そう言って光牙は、炉心をデスの頭に思いきりぶつけ、更に押し込む。

その衝撃で炉心は潰れ、一瞬炉心が輝く。

そして次の瞬間、

凄まじい大爆発が起こった。

（ISS学園、医務室）

「…う」

シャルロットは気が付き、辺りを見渡す。

「あれ…？ここは学園？確か僕はメカザウルスにやられて…」

シャルロットは思い出そうとするが、それ以上は思い出せなかった。

「皆…大丈夫かな…」

そう言つて、右腕の光牙からプレゼントされた銀色のブレスレットを見る。

だがその時、ブレスレットが真つ二つに割れた。

「えっ！？」

突然の事態に思わず慌てるシャルロット。

「光牙…」

割れたブレスレットを握るシャルロットの心はとてつもない不安でいっぱいだった。

「大丈夫だよね…」

しかし、その不安はこの後現実となる事をシャルロットはまだ知らなかった。

く???く

恐竜帝国のアジト(?)ではネオゲッターGとデスが戦闘を繰り広げている様子をモニターでゴール達が見ている。

そのモニターに、ネオゲッターGが自爆した様子が映し出された。それを見て、バットとガリレイが喚起の声をあげ、ゴールはニヤリと笑みを浮かべる。

「…これで邪魔者は消えた…ガリレイ！」

「ははっ！」

「次なる量産型メカザウルスの調整、及び“あれ”の用意に掛かれ！」

「御意！」

「バット！」

「はっ！」

「量産型の準備が整い次第、進軍を開始する！指揮官は任せたぞ！」

「御意！」

「いよいよ時が来た！人間という害虫から地上を取り戻す時が！」

グツと拳を握り締め、高々と声をあげるゴールだった。

第26話 背負いし者達

〈ナレーションSIDE、IS学園〉

学園は静まり返っていた。先日の事件のせいで、休校となっているからだ。

にも関わらず、1年1組の教室には、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、楯無が居た。

7人とも、真ん中の一番前の席を茫然と見つめている。

「…信じられないよね」

静寂を破るように、シャルロットが声をあげる。

「光牙が…死んだなんて」

「っ！」

その言葉に反応したラウラがシャルロットの胸ぐらを掴む。

「シャルロット！貴様は本当に嫁が死んだと思っているのか！」

「でも皆見たんでしょ？光牙が自爆したところを」

「そ…それは…」

どもるラウラ。

シャルロットの言う通り、箒達は離脱した時に遠目ではあるが、ネオゲッターGが自爆した瞬間を目撃していた。

「もう光牙はいない…メカザウルスと一緒に死んじゃったんだよ」

「それはまだ…「もういい!!」シャルロット…」

「もういいの！現場からはネオゲッターGの破片も見つかってるんだよ！？だから光牙はもういないの!!」

涙を流しながら叫ぶシャルロット。しかし、その叫びを否定する者が居た。

「それはちよつと違うんじゃないかな？」

楯無の発した言葉に全員が彼女の方を見る。

「どういう事ですか、楯無さん？」

「確かにシャルロットちゃんの言う通り、現場にはネオゲッターGの破片があつたわ」

「だったら…」

「でもね。見つかった破片は全てライガー号とポセイドン号のものだったの。ドラゴン号の破片と光牙君の遺体は無い。そしてネオゲッターGが分離している時、光牙君はドラゴン号と融合している。これがどういう事が分かるかしら？」

「そうか！自爆の直前にドラゴン号だけが分離して光牙が生きている、という事ですネ!？」

「あくまで可能性だけだね」

「だがそれが一番しつくり来るな」

「でも可能性ですよ？そудたという証拠は無いんじゃないんですか？」

シャルロットが皮肉そうに言う。

「……シャルロットちゃん、光牙君の事は好き？」

「え？」

「好きなの？嫌いななの？」

「そんなの…好きに…決まってるじゃないですか…」

「好きならその好きな相手を信じないでどうするの？」

「……………」

「確かに証拠は無いわ。でも光牙君の事が好きなら彼の事を信じなきゃ。それは人を好きになるという事の責任なのよ」

「責任…」

「楯無さんの言う通りだぞ、シャルロット」

「光牙さんがあれしきの事で死ぬ筈がありませんわ」

「それ位今までのあいつを見てれば分かるでしょ？」

「なんたつてあいつは私の嫁だからな」

「皆…」

「だから光牙君の事を信じてみようよ。ね？」

「はい…！」

涙を拭い笑顔でシャルロットは応えた。

「ところで簪は何処に居るんだ？」

「そついえば姿が見えませんかね」

「ああ、簪ちゃんなら…」

〈ナレーションSIDE OUT〉

〈簪SIDE〉

私は整備室の前で立ち尽くしている。

「滝沢君…」

彼の名を呟きながら、待機状態の打鉄式式を見る。

もし滝沢君が居なかったら打鉄式式は完成していないと思う。

その他にも、私の愛機を完成させるのを手伝ってくれた。

私に優しい言葉を掛けてくれた。

そんな彼の事を思い出す度に、胸が締め付けられる。

「…っ！」

私は居るわけが無いとも思いながらも、滝沢君と一緒に整備をした整備室に入った。

「…え？」

だけどそこには想像もしなかった人が居た。

「…織斑先生？」

「ん？ああ、更識か」

間違いなく織斑先生だった。

先生が整備室で作業をしている。

「何やってるんですか？」

「いやなに、こいつを修理しているんだよ」

先生が修理しているという物を覗き込むと、私は驚きを隠せなかった。

「こ、これは…ドラゴンソード？」

何故なら、修理していたものが滝沢君が使っていたドラゴンソードの一振りだったから。

「そうだ。篠ノ之が回収して来たのがこれだ。こいつを直して光牙に渡そうと思っている」

「先生…」

「お前は光牙が戻って来ないとも思っているのか？」

「……いいえ、戻って来ると信じています…だって私は滝沢君の事が好きですから！」

「…そうか、ならその想いを大切にしてくれ」

「はい」

私は返答し、先生の作業を手伝った。

〔簪SIDE OUT〕

〔ナレーションSIDE、1ヶ月後、???〕

光牙が自爆してから1ヶ月がたった時、恐竜帝国ではというと…

「我らが宿敵、ゲッターロボを自らの命と引き換えに討ち果たした戦士、ニオンに黙祷を捧げる！一同、黙祷！」

ニオンの葬式をやっていた。

恐竜帝国の兵士、トカゲ兵と、バット、ガリレイ、ゴールは目を瞑って巨大なニオンの遺影に黙祷を捧げる。

「黙祷終了！」

ゴールの一言で、全員が目を開く。

「これより、進軍を開始する！目標はゲッターロボ無きIS学園！徹底的に潰せ！！我らが恐竜帝国の為に……！」

『我らが恐竜帝国の為に!!』

ゴールの宣言にトカゲ兵達が応え、その場の空気がビリビリと震えた。

応えるトカゲ兵達には全て、腕輪や首輪といったアクセサリーのよ
うなものを付けていた。

↓4時間後、IS学園↓

「全員揃ったようだな」

学園の第1グラウンドには、全学年の専用機持ちと、学園の全教師
陣が集結していた。

「揃って貰ったのは他でも無い。先程、ドイツ軍の衛生が遂に我が
学園に迫るメカザウルスの大軍を捉えたからだ」

千冬の言葉に、全員が顔を引き締める。

「現在各国の軍は発進準備をしているが、正直間に合うかどうか分
からん。その為、我々が先陣を切ってメカザウルスを叩く」

『……………』

「これは諸君らの命を掛けてもらう大変危険な戦いだ。参加したく
ない者は今すぐ立ち去って貰って構わない」

だが、福音の時と同様、誰も立ち去らなかった。

「よし、メカザウルスが学園に到着する予定時刻は今から2時間後。それまでに各員は機体を万全の状態にしておけ！」

『はい！』

そう言う千冬はその場から去り、教師陣と専用機は準備に入った。
(一般の生徒は学園から避難している)

く千冬自室く

立ち去った千冬は、自室のクローゼットの奥から鍵穴が付いた小型のケースのようなものを取り出していた。

その鍵穴に千冬は懐から取り出した鍵を刺し、回し込む。
ロックが解除され、開いたケースの中身は桜色の腕輪だった。

「まさか、再びお前を使う時が来ようとはな……」

それは他でも無い。

かつて、千冬が世界の頂点に立った時の愛機、『暮桜』だった。

く2時間、学園付近の海上く

学園付近の海上には千冬の暮桜を先頭とし、専用機持ちと教師陣に

よる編隊が滞空していた。

この決戦を予想したのか、学園側も出来る限りの処置をISに施していた。

全ての打鉄とラファールのシールドエネルギーを増加させていた事だ。

それは専用機持ちも同じだった。

セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは福音の時に装備していたパッケージを装備していた。

だが、楯無と簪と箒の3人はパッケージや装備を追加していなかった。

先頭の千冬も、装備等はないが、一点、変わっている所があった。右手に持っている刀は暮桜唯一の武装、『雪片』。ここは変わらない。

だが、変わっているのは左手に持っている龍を模した剣、ドラゴンソードを持っている事だ。

「光牙…私に力を貸してくれ…」

剣の持ち主であり、弟である者の名を言う千冬。

「織斑先生！来ました！」

教師の1人の言葉に顔をあげた千冬が見たもの、それは夥しい数のメカザウルスだった。

「目標を確認した！これより戦闘に入る！各員、攻撃開始！！」

千冬言葉を機に、編隊の半分が突撃し、残る半分が銃器を発射する。

それが、IS学園と恐竜帝国の闘いの始まりだった。

く???く

「遂に始まったか……」

とある崖の上にいるロープを纏った者が呟く。

「行こうぜ、相棒。皆の元へ」

右腕の三色のラインが刻まれたガントレットが光り輝き、次の瞬間、赤い翼を広げたものが飛び去っていった。

第27話 降臨！聖なるゲッターロボ！

「ナレーションSIDE、学園付近の海上」

海上では、メカザウルスと学園のISによる闘いが継続している。

千冬、箒、楯無、打鉄の部隊が接近戦を仕掛け、セシリア、鈴、シヤルロット、ラウラ、簪、ラファールの部隊が銃器を乱射する。

メカザウルスを次々と破壊していくが、敵の数が減っているとは思えなかった。それほど迄に、敵が多すぎるのだ。

そんな中、教師の1人がメカザウルスの攻撃を喰らい、撃破された。それが、2機、3機と続いていく。

「いかん！このままでは…」

危機を感じた千冬が指示を出そうとしたが、襲い掛かって来たメカザウルスによりその考えを中断される。その隣では、箒がメカザウルスの大群を相手にしていた。

「はああああっ！」

前方の1機を斬り付け、左右から迫る2機に刀を横にして薙ぎ払い、遠距離から攻撃する敵機に刀から放ったレーザーと衝撃波で撃墜する。

「くっ！キリがない！」

刀を振りつつ、毒づく箒。敵のメカザウルスは学園側の何倍もある。対して、箒達は数も相手より少ない上、エネルギーにも限りがある。箒の紅椿も、対処しきれない敵の攻撃によって傷付いており、エネルギーも後僅か。

更に第自身にも疲労が蓄積し、動きが最初と比べて、少しずつ鈍っている。

目眩のような感覚を振り払い斬撃を放つが、その一撃はかわされ、逆に反撃を喰らう。

そこへ、周りの敵機からの集中砲火が紅椿に突き刺さる。

「ぐああああ！」

そこへ更に迫るメカザウルス。

「私は……私はまだ……倒れるわけにはいかない！」

ブースターを噴かし、箒は体勢を立て直す。

「頼む、紅椿！私に応えてくれ！」

その瞬間、金色の光が紅椿から溢れた。

それと同時に、シールドエネルギーが回復し、肩の展開装甲がクロスポウのように変形する。

「い、これは…」

突然の変化に戸惑う筈の目の前に、2つのウィンドウが現れる。

「『絢爛舞踏』と『穿千』……紅椿の単一仕様能力と新しい武装か！」

箒はその2つを確認し、穿千をメカザウルスに向ける。

「いけええええ！」

砲口から太いレーザーが発射され、多数のメカザウルスを飲み込み、爆散させていった。

「これはらば！」

そう言つて筈は刀と穿千でメカザウルスを爆煙に変えていった。

「む？これは……」

闘いを見ていたバットが首を傾げる。

先程まで、崩れかかっていた敵が急に持ち直したからだ。不振に思つたバットは戦闘を凝視する。

すると、紅い機体が他の機体に近付くと、金色に光つたのが見えた。

「あれはエネルギーを補給しているのか？なかなか面白い機体もあったものだが、我らの為に潰させて貰う！出でよ、メカザウルスボア！！」

右手の腕輪が輝き、次の瞬間バットは全身が黒いボディに口の部分から触手が生えたメカザウルス　ボアと化していた。ボアは紅い機体、紅椿に向け突進していった。

「喰らえ！ボアウィップ！！」

ボアの口の触手が紅椿に向けて伸びる。

「む！」

それを紅椿は回避し、刀で斬り掛かる。

「貴様も恐竜帝国の一味か！」

箒がバットに問い掛ける。

「そうだ！我が名はバット、恐竜帝国の部隊長なり！」

「そうか…ならば倒させて貰う！」

穿千を展開し、零距离で発射しようとする箒。

「我がボアをその程度で倒そうとする等…笑止千万！」

ボアウィップを紅椿に巻き付け、動きを止めるバット。

「し、しまっー」

「ぬうおりゃああああっ！！！」

そのままバットは紅椿をハンマー投げの要領で振り回す。

それにより、学園側のISを弾き飛ばしていき、紅椿と学園側のISにダメージを加えていく。

『うわああああああああっ！！！！』

「苦しめ、苦しめえ！！ハッハッハッハ！！！」

だが、紅椿を振り回すボアに何処からともなく飛来したビームが炸裂する。それによって、触手が緩み、その隙に紅椿は脱出した。

「ぐおおおおおっ!？」

大きく後退するバット。

ボアの戒めから解き放たれた箒は体勢を立て直していた。

「今は…一体…？」

その時、聞こえる筈のない声を箒は聞いた気がした。それは、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、楯無、簪、千冬も同様だった。
『待たせたな』と。

その声は聞き間違える訳も無い。

箒達が必ず帰って来ると信じていた相手。

そして、その相手が帰って来たという事は確信に変わった。

何故なら、ビームが飛来した方向から赤、白、黄の戦闘機が飛来して来たのだから。そして、その戦闘機、ゲットマシンを操る者はむしろん、今までゲッターと共に闘っていた転生者、滝沢光牙だ。

「ぐ…な、何が起こったというのだ……あのビームはまさか…」

「その通りだぜ!」

「な!？」

ボアの付近を3機のゲットマシンが通り過ぎて行く。それに対し、

メカザウルスが攻撃を仕掛けるが、光牙はそれを全て回避行動で無効化する。

「新たなゲッターの力を見せてやる！」

その言葉と共に、ゲットマシンが飛翔していく。

「チエエンジ！ファルコン！」

ゲットマシンが赤色のファルコン号を先頭に、白色、黄色の順番で合体し、変形する。

腕、脚、頭部が変形によって出現し、頭部の目に光が灯った。

全体的に、真ゲッターとネオゲッターGを混ぜたような外見の赤をメインカラーとしたゲッター。 それこそが、真ゲッターの生まれ変わった姿『ゲッターロボ聖』の第1形態、『ゲッターファルコン』だ。合体が完了したファルコンは赤き翼、ファルコンウイングをはためかせ、メカザウルスに向かっていく。

「みじん切りにしてやる！」

光牙はファルコンウイングを振り回し、メカザウルスを切断していく。

「チエエンジ！フェンリル！」

そう言うところファルコンが分離し、白色のフェンリル号が先頭に、黄色、ファルコン号の順番で合体する。

右腕に銀色に輝く細長いドリルを、左腕に三股のペンチのようなトライハンドを装備し、白をメインカラーとした第2形態、『ゲッターフェンリル』が現れる。

「ゲッタアア！チャアアジッ！」

フェンリルが白く輝き、それが全身を包む。
そして、巨大な白い狼となった。

「フェンリル！ファアアング！」

白い狼がメカザウルスに突っ込んでいき、前足を振り抜く。
そこから放たれた衝撃波が多数のメカザウルスを爆散させる。

「チェンジ！アトラス！」

声と共に、フェンリルが分離する。

黄色のアトラス号を先頭にファルコン号が合体し豪腕が出現する。
その背後にフェンリル号が合体し、キャタピラーが付いたタンクとなった。

黄色をメインカラーとした第3形態、『ゲッターアトラス』がその姿を現す。

「一気に行くぜ！ゲッタアア！チャアアジッ！」

黄色に輝くアトラス。

次の瞬間、黄色の巨大な巨人が現れた。

「アトラス！クラアアツシュッ！」

巨人が腕を振り上げ、一気に振り下ろす。
その腕に当たったメカザウルス達があっという間に爆煙に変わっていった。

「ば、バカな…我がメカザウルス達がこうも簡単に全滅するなど…」

バットは驚愕のあまり、開いた口が塞がらなかった。何故なら、ゲッターの二発の攻撃（正確には三発）によってメカザウルスが全滅したからだ。

「後はお前だ！」

そこへ、ファルコンにチェンジした光牙が迫る。

その手には剣が握られていた。

ファルコンにチェンジした時、千冬から投げ渡されたドラゴンソードが進化した剣、『ファルコンソード』が。

「おのれええ！！」

ボアが右手から触手を射出する。

「せいやあああっ！！」

その触手をファルコンソードで両断し、腕に格納されているマシンガンを左腕の方だけ展開して引き金を引く。

銃口から放たれた弾丸の群れがボアに突き刺さり、動きを鈍らせる。

「ゲッターの力を！舐めるなあああ！！」

叫びと共に、大上段からのファルコンソードが振り下ろされる。

その切っ先は、ボアの胴体を軽々と袈裟斬りにした。

「ぬあああああ！！」

バットの叫びと共に、切り口から紫の血が噴出し、ボアが崩れ落ちていく。

「ま…まだ死ねぬ…偉大なる帝王ゴール様降臨の為にも……」

そう言つて、ファルコンを睨み付けるバット。

「我が命尽きようとも！ゲッターロボの破壊あるのみ！」

突如ボアが体勢を立て直し、ファルコンに突進して腕触手を絡ませる。

「うわっ！？」

そのまま組み付くボア。そして、ボア全体の温度が上昇しているのをファルコンのセンサーが捕らえた。

「フッフッフ…共に…死への旅へといざ参ろうではないか、ゲッターロボ！」

だが光牙は、バットの行動を阻止するべく直ぐ様行動を実行した。

「チッ！もう自爆は懲り懲りなんだよ！」

ファルコンの腹部の中心のカバーが開き、砲口が出現する。

「ゲッタアアアア！ビィィムッ！！」

砲口が輝き、桜色のビームがボアに放たれる。

当然、ファルコンに組み付いているボアは避けることなど出来ず、まともに喰らう。

それによつて、ボアが少しずつ溶解していく。

「お許しをゴール様！このバット、お先にマグマの中に還ります
！恐竜帝国、ばんざあああいつ！」

バットが言い終わった直後、ボアが爆発し、その煙の中から現れたのはファルコンだった。

く????く

「メカザウルスが全て破壊され、バットまでやられるとは…」

ゴールがモニターに映るファルコンを凝視する。

「生きていたか、ゲッターロボ。仕方ない…ガリレイ！」
「はっ！」

「発進用意に入れ！」

「御意！」

そう応えガリレイは立ち去っていった。

く南極く

突如、南極で変化が生じていた。
気温と水温が急上昇し、気温成分までもが変化していた。
そして氷山に亀裂が入り、広がっていく。
氷が崩れていき、その中から白いものが出現した。
その白いものは丸い円盤、UFOだった。
それは浮遊し、回転しながら移動していく。
日本に向けて。

第27話 降臨！聖なるゲッターロボ！（後書き）

オリジナルゲッターの2体目を登場させてみました。感想等、お待ちしております。

第28話 決戦前夜、そして幕開け

「ナレーションSIDE、IS学園、食堂」

戦闘が終わり、教師陣は怪我人の手当てや破損したISの回収、修理に追われていた。

その頃食堂には、千冬達8人とそれに光牙が居た。

千冬達はひたすら光牙を見ている。

「えーと…」

その視線に戸惑う光牙。

「光牙、何か言いたい事はあるか？」

「…一応ありますけど、皆さんから良いです」

「そうか、なら…」

千冬は光牙に近付き、抱き締めた。

「この馬鹿者が…私がどれだけ心配したと思っているのだ…」

涙を流しながら、更にきつく抱き締める千冬。

「…すいません、姉さん」

光牙はそれ以上何も言えなかった。

千冬達を心配させたのが、自分の責任だと感じているからだ。

千冬が離れると、光牙は簞達が涙目になっているのに気付いた。

「皆さん。本当にごめんなさい」

光牙は箒達に深々と頭を下げ、謝る。
それに箒達は光牙に少し文句等を言いつつも、ちゃんと許したのだ
った。

「じゃあ、今度は僕から話しますね」

そう言うと、その場の全員の顔が引き締まる。

「あの時、メカザウルス デスに組み付いて自爆する直前、ネオドラゴンだけが分離したんです。それによって僕はなんとか助かったんです」

(((((予想通りだ…)))

「でも僕は酷い怪我を負っていて、しかも気付いた時には深い山奥にボロボロになったネオドラゴンと一緒に居たんです」

「それからどうなったんだ？」

千冬が問い掛ける。

「実はその時、僕の右腕にこれがあったんです」

光牙は右腕のガントレットを見せた。

「それは…新しいゲッターなのか…？」

「はい、こいつは『ゲッターロボ^{セイント}聖』。真ゲッターが進化したゲッ

ターです。こいつはネオドラゴンと融合し、その間僕は傷を癒しながら恐竜帝国の動きを探っていた訳です」

「それで1ヶ月経ち、今日現れた。という訳か」

「まあ、そういう事です」

「だが、光牙のお陰でメカザウルスは全滅し、幹部らしき者も1人倒せた。おまけに光牙も戻って来た事だし、後は恐竜帝国を叩くだけだな」

「いや、それなんですが…」

光牙が言いかけたその時、食堂のモニターに黒い影のようなものが映し出された。

「なんだこれは!？」

『全人類に勧告する!我らは恐竜帝国!そして我が名は帝王ゴール!この地球の支配者なり!』

モニターから声が流れた。

「はあ?こいつ何言ってるの?」

鈴が声を漏らす。その直後、映像が切り替わり、海に浮かぶ巨大な白いUFOが映し出された。

「な、なんだあれは…?」

『我は力を手に入れた。太古の力、オーパーツと融合した事によって。その力を見せてくれるわ!』

そして、UFOの下部に紫色の光が集まっていき、海に向かって放たれた。

その瞬間、光が着弾した所が大きく割れ、とてつもなく巨大な水柱が上がった。その瞬間、全員の顔が驚愕に染まる。水柱が治まった後には巨大な渦潮が渦巻いていた。

『分かったか？我らの力を。分かったのなら人類は全ての武力を放棄して貰おうか。だがせめてもの情けに1日の猶予をやろう。期限は明日の午前10時までだ。だがもし！10時までに武力放棄をしなかった場合、我らは日本を始めに攻撃を開始する！それまで最善の手を考えておく事だな！』

それを最後にモニターは正常に戻る。
それでも食堂には静寂が流れていた。

「どうすんのよ…まさかあんな物を隠し持っていたなんて…」

「あんなものに勝てるのか…？」

「いつそのこと降伏した方が…」

「いや、それは止めておいた方が良いです」

それに反論したのは光牙だ。

「連中の目的は人類の抹殺ですよ？おそらく降伏した所で、奴らは攻撃を開始するでしょう」

「なら闘うしかないだろう」

それに賛同するように篤が声をあげる。

「私もそう思うわ」

「私もだ」

鈴も賛同し、ラウラも軽く手を挙げて同意を示す。

セシリア、シャルロット、楯無、簪の4人も少し考えながらも同意した。

残るは1人。

光牙達はその1人、千冬に目を向けた。

「はあ…どうせ止めても行くのだろう？委員会には私が掛け合ってやる。安心しろ」

「千冬姉さん、ありがとうございます！」

「任せておけ」

そう言つて、千冬は食堂から去つていった。

「じゃあ、僕達も出来る事をしましょうか？」

その問い掛けに、篤達は直ぐ様承諾の返事を返した。〈ナレーショ
ンSIDE OUT〉

〈光牙SIDE〉

僕達は明日に備え、出来る事をした。

といつても皆さんはISの修理や整備で、僕はゲッターロボ聖の調

整位しかなかった。

その途中、千冬姉さんが戻って来て、なんとか姉さんの説得で降伏は無くなったらしい。そんな事をしている内に夜になり、僕は明日に備えて眠りについた。

〓次の日〓

次の日の朝、グラウンドに集まっていた。
僕達の戦力は以下の通りだ。

- ・ 箒（紅椿）
- ・ セシリア（ブルー・ティアーズ）
- ・ 鈴（甲龍）
- ・ シャルロット（ラファール・リヴァイヴ・カスタム2）
- ・ ラウラ（シュバルツェア・レーゲン）
ミステリアス・レイディ
- ・ 楯無
- ・ 簪（打鉄式式）
- ・ 千冬（暮桜）
ラファール・リヴァイヴ
- ・ 真耶
- ・ 光牙（ゲッターロボ聖）

「各員、準備は良いか？」

千冬姉さんが問い掛ける。

『はい！』

それに応える僕達。

「ではISを展開しろ！」

その言葉に応えるように、篤さん達がISを展開する。

「チェレンジ！ファルコン！！」

僕もゲッターファルコンを展開し、ファルコンウイングで上空に舞い上がる。

それに呼応するように、皆さんも上昇した。

そして僕達は、恐竜帝国のUFOに向けて疾駆していった。

（光牙SIDE OUT）

（ナレーションSIDE）

「ガリレイ、応答は？」

「はっ、ありません」

UFOのコントロールルームでゴールの問い掛けにガリレイが応える。

「人間どもめが…もうよい。我らはこれより攻撃を開始する！進路を日本へ向ける！」

「了解。進路を日本に向けます」

トカゲ兵が応え、計器を操作する。

「ガリレイ。貴様も準備をしておけ」

「御意」

ガリレイが応え、コントロールルームから出ていく。
UFOは緩やかに回転しながら日本に向かっていった。

「海岸沿いの山岳地帯」

「後どれ位で首都にたどり着く？」

「はっ。このまま行けば、後20分程で東京に辿り着きます」

トカゲ兵が応え、それに「そうか」とゴールは返答する。
だがその時、別のトカゲ兵が声をあげた。

「ご、ゴール様！」

「どうした？」

「前方に敵機がー」

だがその声は、突如UFOを襲った衝撃に遮られる。

「な、なんだ!？」

「山岳地帯」

「初弾命中！」

ラウラが声をあげる。

レールカノンからは僅かながら煙が出ていた。そしてUFOにレールカノンが命中した所からも、僅かながら煙が出ている。

「よし、ボーデヴィツヒはそのまま狙撃を続ける！」

「了解！」

「第2陣、攻撃開始！」

指示を飛ばしたのは千冬だ。

その後方からセシリア、シャルロット、簪、真耶がUFOに向けて引き金を絞った。

その攻撃がUFOに命中する。

「第3陣、攻撃開始！」

今度は、簪、鈴、楯無、光牙が現れ、UFOに向かって突進していく。

そして、UFOにたどり着くと、簪は刀で、鈴は青竜刀で、楯無はランスで、光牙は右手のファルコンソードと左手に握ったゲッタートマホークで接近戦を加えた。

これは光牙のゲッターロボ聖の『サーチマーキング2』を利用して位置を特定し首都までの進路を予測。そしてそこへやって来たUFOに攻撃を仕掛けた、という訳だ。

「恐竜帝国！お前らの野望は皆さんと、このゲッターロボ聖が打ち砕く！」

光牙はUFOに向け、宣言し、再度突進していった。

第28話 決戦前夜、そして幕開け（後書き）

いよいよ最終決戦まで来ました。
感想等、お待ちしています。

オリジナルゲッターについて2

機体名

ゲッターロボ聖^{セイント}

待機状態 赤、白、黄のラインが刻まれたガントレット

真ゲッターが進化したゲッターロボ。

見た目は新ゲッターロボ。ネオドラゴンを取り込んでおり、動力源はネオゲッターG同様、プラズマエネルギーシステムを組み込んだゲッター炉心だが出力は遥かに上回る為、性能はネオゲッターGを越えている。だが、代償としてツインモードが無くなり、完全に兵器となっている。光牙ですら分らない力を秘めている。

特殊能力

・サーチマーキング2

サーチマーキングの強化版で、更に細かく情報が表示される。

・ゲッターヒーリング3 ゲッターヒーリング2の強化版で、常にゲッター線を吸収し、装甲を修復する。エネルギーも補給出来るが、装甲の修復と比べ、長い。『ゲッターダイナモ2』にエネルギーを貯蔵し、増幅して使用出来る。

・Wマッハ・イグニッション

マッハ・イグニッションの進化版。

連続で2回まで行えるようになり、どの形態でも使える。

1回目はマッハ12まで、2回目を使用した時はマッハ18まで加速する。

・ゲッターバースト

ゲッターエネルギーを解放し、性能を5倍に上げる。発動中は機体が緑色に輝く。

10分で解除され、その後、5分は性能が60%に落ちる。

形態について

（ゲットマシン^{セイント}聖の時、光牙はファルコン号と融合している）

・ゲッターファルコン

ファルコン号、フェンリル号、アトラス号の順で合体する空中戦闘形態。

メインカラーは赤。

ドラゴンソードが進化した『ファルコンソード』を、両腕にはゲッターブレードの進化版が装備されている。また、トマホークは両刃になっている。

ゲッタービームは腹部のみだが出力を変えられる。

最大にすれば山を吹き飛ばす事も出来るがエネルギーの3分の1を消費する。他の2形態と違い、名前を模した技が無く、謎が多い。

武装

ファルコンウイング

ゲッターマシンガン3

ゲッターブレード2

ゲッタートマホーク2

トマホークランサー

ファルコンソード

ゲッタービーム（桜色）

ファルコンスラッシュ

聖ゲッターチェンジアタックR

ゲッタービームフルパワー（水色）

・ゲッターフェンリル
フェンリル号、アトラス号、ファルコン号の順で合体する地上戦、
地中戦、高速戦を得意とする形態。
メインカラーは白。
下半身は赤色。ドリルは右腕にあり、細長くなっている。左腕のト
ライハンドにはビームガンが格納されている。最大速度がマッハ2
3になった。

武装

ビームガン
トライハンド
ドリルミサイル
プラズマドリルストーム
ロケットブレイク
マッハ・ビジョン
聖マッハスペシャル
フェンリルファンゲ
ミラージュランサー

・ゲッターアトラス
アトラス号、ファルコン号、フェンリル号の順で合体し、地上戦と
水中戦を得意とする形態。
見た目はほぼ真ゲッター3だが、腕の色が赤くなり、ネットが搭載
されている。電流を流す事も可能。
パワーが更に上がり、ダイヤモンドの壁すら一撃で粉碎出来る。

武装

ゲッターホーミングミサイル2
ハンマーエレキナックル
フィンガーネット2

スーパーゲッターエレキ

ミサイルストーム

超・大雪山おろし

アトラスクラッシュ

超・大雪山おろし・二段返し

単一仕様能力

『???』

第29話 決戦の序章！VSガリレイ！

〈ナレーションSIDE〉

「どりゃああああ！」

ゲッターファルコンがファルコンソードとゲッタートマホークでUFOに接近戦を仕掛けるべく突進していく。

だが、UFO下部から突如出現した触手から放たれた電撃を喰らいファルコンは吹っ飛ぶ。

「なに！？」

吹っ飛んだファルコンが体勢を立て直すと、触手が出現した部分から円柱の形をしたカプセルのようなものが出てきた。

上部にトカゲの頭のようなものがあり、中は水のようなもので満たされており、真ん中の辺りに小さいクラゲのようなものが浮いている。

「貴様らの相手はこのガリレイが引き受けようぞ！」

それを操るのは恐竜帝国科学長官のガリレイ。

そして愛機はガリレイが開発したメカザウルス ゲラだ。

『ガリレイ、ここは任せる。見事ゲッターを討ち果たせ！』

「御意！」

そう言ってUFOは回転しながら移動を始めた。

「くっ、待て！「行かせばせぬわ！」な！？」

ファルコンがUFOを追いつけようとするが、ゲラのカプセル下部から伸びた触手がそれを許さなかった。

「光牙！」

「今助けるぞ！」

それを見た鈴と箒が光牙を救出すべくゲラに接近する。

「来ないで下さい！」

だが、光牙の言葉に、2人は接近を中断した。

「こいつは僕が引き受けます！皆さんはUFOを追って下さい！」

「で、でも……」

「必ず追い付きます！だから早く！」

「…分かった」

「織斑先生！？」

「ここは光牙を信じよう。我々是我々に出来る事をするしかないんだ」

「先生……」

「私達はUFOを止めるんだ。早くしなければ甚大な被害が出てしまう。分かるな？」

「…はい」

そして千冬達はUFOを追い掛けていった。

「フン！仲間を向かわせようと誰1人ゴール様には敵わぬわ！」

触手から電撃が流れ、ファルコンを襲う。

「ぐあああつ！くつ、オープンゲット！」

ファルコンがゲットマシン聖に分離し、隙間からすり抜け、再びファルコンに合体した。

「喰らえ！ゲッタービィイムツ！」

腹部の砲口から桜色のビームが放たれ、ゲラに向かう。

だが次の瞬間、信じられない事が起こった。

ビームはカプセルを貫通し、クラゲに直撃したが、クラゲは爆発せず、膨れ上がりカプセルを突き破った。上部のトカゲ頭の部分は巨大化したクラゲの上部に合わさっている。

そして巨大化したクラゲからビームが放たれ、ファルコンに命中した。

「ぐあつ！」

ファルコンが落下し、土煙があがる。

「ゲッタービームを跳ね返した!？」

起き上がった光牙は巨大化したクラゲを見る。

「ハッハッハ!どうだ、このガリレイが開発したゲラは?あらゆるものをエネルギーとし自分のものとする事が出来るのだ!最早ゲッター線等敵では無いわい!」

そう言う間にも、ゲラは触手で森を取り込み、もう片方の触手で付近の電線から電力を吸収し、巨大化する。

「だったら物理的に圧倒するまで!オープンゲッター!」

ファルコンが分離し、3機のゲッターマシン聖が飛翔していく。空中でUターンしたゲッターマシン聖はアトラス号を先頭に降りてきた。

「チエエンジ!アトラス!」

声と共に、パワーを重視する形態、ゲッターアトラスにゲッターマシン聖は合体し着地する。

「行くぜええ!!」

キヤタピラーを回転させ、高速でゲラに突進して豪腕で殴り付けるアトラス。

だが、ゲラの軟体な体の前ではダメージを与えられず、それどころか、ゲラが放電をした事によって反撃を喰らってしまった。

「負けるかあ!!」

今度は光牙が反撃に出た。両腕を伸ばしてゲラ上部のトカゲ頭を掴み、それを力任せに引きちぎった。

それでも、先程と同様にゲラに大したダメージを与える事は出来なかった。

「それで勝ったつもりか？片腹痛いわ！」

光牙の行動を嘲笑うガリレイ。そしてゲラはアトラスを触手で絡み取り、そのまま内部に飲み込んで強烈な電撃をアトラスに浴びせた。

「うわあああっつ!!」

それにより、光牙の全身に爆ぜるような激痛が走る。だが彼は諦めなかった。

「まだまだあああ!!」

光牙はキャタピラーを回転し、ゲラに飲み込まれたまま、山岳地帯を爆走していく。

その2つはそのまま山岳地帯を抜け、その先である海に落下していった。

海に入ると、ゲラはアトラスを吐き出し、距離を取った。

「馬鹿めが。このゲラに水中で勝てると思っているのか？」

ガリレイの言う事は正しく、水中ではゲラは有利だ。だが光牙はそんな状況にも関わらず、笑みを浮かべていた。

何故なら、ゲッターアトラスも水中戦を得意とするからだ。

「こいつならどうだ！ゲッターホーミングミサイル！！」

そう言つて光牙はアトラスの両肩から2発のミサイルを放った。

ビーム等と違い、実弾であるミサイルは吸収出来ないと光牙は思ったからである。

だがそれは裏切られた。

命中したミサイルの爆風をゲラは吸い取ったのだ。

「なに！？ミサイルの爆発エネルギーまで吸収したつて言うのかよ！！」

光牙の言葉を裏付けるように、ゲラは更に巨大化した。

だがその瞬間、ゲラの全身に僅かな電流が流れたのを光牙は見逃さず、光牙の脳裏に1つの仮定が浮かび上がった。

「もしかしたら…ゲッターホーミングミサイル！」

仮定を立証すべく、ミサイルを放つ光牙。

そして、ミサイルはゲラに着弾するがゲラは巨大化しなかった。

この瞬間、“仮定”は“確定”に変わった。

「やつぱりそうか…こいつ、飽和状態の時はエネルギーを吸収出来ないんだな」

ここで光牙の確定を分かりやすくしてみよう。

まずエネルギーを塩、ゲラをコップに入れた水と置き換えてみる。

ゲラがエネルギーを吸収するというのは“コップに入れた水に塩を溶かす”という事だ。

だが現在のゲラはエネルギーを吸収しすぎ、塩を完全に溶かしきつ

たいわゆる飽和水溶液の状態。

そこへ塩を入れても、それ以上溶けない。
その溶けない塩がダメージという事だ。

「はああああ！」

その事を頭で計算した光牙はアトラスをゲラに向け、突進した。

「万策尽き果てたか！？」

もし、ゲラがアトラスを放電で攻撃し続ければゲラが勝っていたかもしれない。だが、ガリレイはそれをしなかった。

アトラスがゲラに潜り込むと同時に、凄まじい電撃が光牙を襲う。
その電撃をこらえ、光牙は勝つための行動を実行した。

「エネルギーを鰭腹ご馳走してやる！ミサイルストームッ！！」

アトラスのコンテナが開き、多数のミサイルが出現した。

「ゼロ距離点火！！」

その声と共に、ミサイルが爆発していき、膨大な爆発エネルギーが発生し、ゲラが膨れ上がっていく。それはゲラが吸収しきれない量を遥かに越えていた。

「ば、馬鹿な、ワシの計算に間違い等……」

だがどんなに足掻こうと、ゲラの膨らみは止まらなかった。
水溶液に塩を入れても溶けないのだから。

「む、無念なり！ゴールさまああああーっ！！！」

ガリレイの叫びも虚しく、ゲラは爆発した。
海から盛大に水柱があがる。

その水柱の大きさがゲラが吸収したエネルギーの量を物語っていた。
水柱の中からファルコン号、フェンリル号、アトラス号が飛び出す。

「あとは…帝王ゴールだ！」

そう言つて光牙はUFOが移動していった方角に飛翔していった。

その頃、千冬達はUFOに対して攻撃を仕掛け続けていた。

だが、UFOは紫色のビームで攻撃を仕掛けてくる。更に途中で展開した紫色のシールドに阻まれ、ダメージを与えられずにいた。
いたちごっこが続き、遂に首都の上空にまでUFOは辿り着いた。

「首都に対して攻撃を開始しろ！」

ゴールが指示を飛ばす。

そして、紫色のビームは千冬達ではなく、首都に向かって放たれた。

「いかん！」

それに反応した幕が展開装甲からエネルギーシールドを展開し、ビ

ームを防ぐ。すると今度は別の方角にビームが放たれるが、シャルロットがシールドを展開して防いだ。

「自らを盾にして攻撃を防ぐか…だがどこまで保つかな？」

ゴールの言う通り、ビームの威力はかなり高く、幕とシャルロットはシールドエネルギーを3分の1近く持っていなかった。

「ゴール様！」

「今度はなんだ！？」

トカゲ兵の報告にゴールは不満げに声を返す。

「ゲッター線の反応が近付いて来ます！」

「なに！？」

その刹那、UFO全体に衝撃が走る。

「ぬうつ！まさか！？」

モニターを見るゴールの目には“まさか”が映っていた。
赤いボディの宿敵。

右手に剣を、左手に斧を持ち、Vを描くような特徴的な頭部をしたゲッターロボが。

「ガリレイがやられたというのか！？おのれゲッターめ！」

憎々しげにゴールはモニターのゲッターロボを睨み付けた。

「光牙！」

「皆さん、戻って来ましたよ！」

近寄って来た千冬達に応える光牙。

「あのクラゲみたいな奴はどうしたんだ？」

そこヘラウラが疑問を投げ付けた。

「内部に潜り込んでミサイルぶっ放してぶっ倒しました」

「そ、そうか」

あまりにも大雑把な説明に少しもるラウラ。

「それより、状況はどうなんですか？」

「はつきり言って、あまり芳しくない。ビームで首都を攻撃してくる上、無駄に強力なシールドのせいで全く決定打を与えられないんだ」

「確かに。さっき僕がゲッタービームを撃ってもあまり効いていませんでしたからね」

確かに光牙は先程ビームを放った。

だがそれでも、UFOに少しの衝撃を与えるのが精一杯だった。

「一体、どうすれば良いんだ…」

篤が考え込む。

『それならばお任せあれ!』

「え!？」

「この声、まさか!？」

千冬と篤にだけ通信が入っており、それが聞こえていた。

その瞬間、上空が輝き、光牙達の付近を何かが高速で駆け抜け、地面に突き刺さる。

それはあの巨大なニンジンだった。

それが真ん中から割れ、中から出てきたのは当然――

「やつほー!天才の束さんだよー!」

「姉さん!？」

「束!？」

篠ノ之束だった。

第30話 降臨のゴール！ゲッターロボ、絶体絶命！？

くナレーションSIDEく

「やあやあ、久しぶりだね、ちーちゃんっ！」

「束、お前どうしてここに？」

千冬が束に問い掛ける。

「天才の束さんはなぐんでもお見通しなんだよ！あのUFOのシールドをどうにかしたいんだよね？」

「あ、ああ。そうだ」

(((((なんで分かったんだろう…？))))))

「だから、これを持って来たんだよ！」

そう言う束の手に、先端にアンテナのようなものがついた銃が量子変換された。

「この私が開発した『超振動パルスガン』を使えば、どんなエネルギー防壁も突き破る事が出来るよ！」

束はパルスガンを箒に渡す。

「姉さん…」

「だって世界の危機だもん！天才の私が放っておく無いでしょ？」

「束…お前という奴は…」

千冬は俯いて震えていた。

「あれ？ちーちゃんもしかして泣いてる？」

束がいたずらっ子のような笑みを浮かべながら千冬に近寄る。
だが、それは束の命取りとなった。

「そんなものが有るならもっと早く持ってこいっ！！」

「ぎゃー！？ちょ、ちーちゃんIS展開した状態で首絞めないでえー！？」

千冬は束の首を思いっきり絞めた。苦しそうに束がもがく。

「お前の頭脳なら人を生き返らせる位容易いだろう！？一回死んで頭を冷やせえ！！」

「んぎゃあああああああ！！！」

盛大な叫びをあげ、束は倒れ込んだ。

「よし、行くぞ」

『はい』

「ちょっと！私を無視しないでよ！」

(((((復活、早っ)))

とりあえず、パルスガンを持った箒を守るように千冬達が展開し、箒の後ろにはゲッターフェンリルにチェンジした光牙が待機する陣形で10人はUFOに向かっていった。

迫り来るビームを千冬達が防ぎながら、パルスガンの射程に入った箒が引き金を引いた。

パルスガンから青い光がシールドに放たれ、当たった部分を弱める。

「よし、シールドが弱まった！光牙！UFOに風穴を開けてやれ！」

「了解！」

千冬に返答する光牙。

右腕を奥に構え、フェンリルのドリルが虹色に輝いていく。

「ミラージュッ！ランサアアアーッ！！」

右腕のドリルを突き出すと同時に、巨大な虹色の槍がシールドが弱まった部分に向かって一直線に疾駆していく。

シールドは数秒抵抗したが、パルスガンによって弱体化した為、敗北を期した。弱体化した部分が砕け、そのままミラージュランサーはUFOに突き刺さった。命中した部分が爆発し、爆煙が晴れるとそこには巨大な穴がぽっかりと開いていた。

「よし、UFOに突入する！」

そう言う千冬を先頭に、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、

楯無、簀、真耶（と束）が穴に入っていた。

内部に侵入した千冬達は現れたトカゲ兵の大群を相手にしていた。だが、千冬達にとってトカゲ兵は然程苦戦する相手でもなく、短時間で全て撃破した。

トカゲ兵を倒した千冬達が通路を進んでいくと、中央に柱のようなものがあり、その周囲に多数の入り口がある所に出た。

「ちっ！コントロールルームは一体何処にあるんだ！？」

「おい、ちーちゃん！篝ちゃん！こっちこっち」

声のした方には束が手を振りながら、頭に付けているウサミミと同じ形の探知機のようなものを持っていた。

束が入り口の1つに入っていく、千冬達もそれに続いていった。

「って束！そんなものがあてになるのか！？」

「天才の束さんが開発したこの『コントロールルーム探知機』は百発百中だよ」

束が持っているウサミミのような探知機はぴくぴくと動いている。

「そんなものがあてになる訳…」

千冬が脱力する。
だが、数分後。

「な、なぜここが分かった!？」

「ね?言っただでしょ?」

『嘘おおおおい!!???』

千冬達はコントロールルームに辿り着いた。

「お前が帝王ゴールだな!？」

「そつだ。我が帝王ゴールなり!まずはここまで来たことを誉めてやろつ、人間共よ!」

簾の問い掛けに立ち上がりながら応えるゴール。

その姿は半分が機械になっており、左目はレンズに、口は下に枝のように4つに割れている。

一言で言えば、“異形”だ。

そんなゴールの前にライフルを構えたトカゲ兵2匹が現れる。

「悪の帝王め!この天才の束さんの開発した『細胞破壊光線銃』を受けてみよー!」

千冬達の前に出た束が持っている銃の引き金を引くと、銃からリング型の光線が発射される。

それはゴール付近にいたトカゲ兵2匹をまるで砂の像を崩すように倒したが、肝心のゴールは瞬間移動のようなもので逃げてしまった。

「ありゃゝ逃しちゃった。テヘツ」

「テヘッじゃ無いですよ！姉さん！また何危ないもん作ってんですか！？」

箒が束の胸ぐらを掴み、ぐわんぐわん揺する。

「ああ〜目が回る〜」

「山田君、早くコントロールを」

「はい！」

そんな姉妹のやり取りを華麗にスルーした千冬達だった。

その頃、UFOの上部の中央のハッチが開き、そこからゴールが現れた。

十字を描くように上部の隅から4つのアンテナのようなものが現れる。

ゴールの視線の先には、ゲッターフェンリルが映っていた。

「この帝王ゴール！逃げも隠れもせん！今こそ、雌雄を決する時だ、ゲッターロボ！！」

ゴールが言い終わると同時に、アンテナからゴールに向かって紫色のビームが照射された。

「ぬおおおおおおお！！」

雷が飛び散り、耳にあたる部分から巨大な一対の上を向いた角が生え、腹部にはおぞましい顔のようなものが出現した。ビームの照射が止むと、ゴールは視線をフェンリルに向けた。

「来い、ゲッターロボ！」

右手を突き出すとそれが紫色の光を帯びる。

次の瞬間、それを見たゲッターフェンリルがゴールに引き寄せられていった。

シールドを突き抜け、なんとか着地するフェンリル。その目の前にゴールが佇んでいた。

「帝王ゴール！お前を倒して、世界を救う！オープンゲット！」

掛け声と共に、フェンリルが分離する。

「チエエンジ！ファルコン！」

空中でファルコンに合体した光牙は、ゲッタービームをゴールに放った。

だがゴールの角に黒い雷が走り、それがゲッタービームを拡散させた。

そして腹部の顔の口が開き、そこから現れた砲口から放たれたビームがファルコンを弾き、叩き落とした。

「無駄だ。我は力を手に入れた。最早ゲッター線等恐るるに足らん」

「ならこいつだ！トマホークランサー！」

両肩からトマホークの刃の部分だけを多数ゴールに投げ付ける。
ゴールは手で殆どを払い除けるが、1つがゴールの首の左横に刺さった。

だが、ダメージにならなかったのか、ゴールは刺さった刃を力任せに引き抜き、ファルコンに投げ返した。それを回避した光牙は右手にファルコンソードを持ち、左腕はゲッターブレードを展開してゴールに斬り掛かった。

連続で、何度も、ゴールを斬り付ける。

だがゴールはダメージを受けていないのか、平然としている。

「まだまだ！この世界を、お前の好きにさせてたまるか！！」

その時、ゴールは右腕でファルコンを殴り付け、吹っ飛ばした。衝撃でファルコンソードが宙を舞い、量子になって消える。

「勘違いするな！地球は元々我ら八虫人類のもの！後から出てきた人類に好きにする権利等ないわ！」

「それはあくまで、元の世界での事だろう！第一、それがこんな非道を許す理由になんかならない！どうして共存の道を考えないんだ！？」

「共存だと？」

その言葉にゴールは反応した。

「貴様ら人間は地球に湧いた害虫だ！駆除あるのみ！！」

「ふざけるな！人間は害虫なんかじゃない！れっきとした、1つの生き物だあああ！！」

非情の言葉を放つゴールに光牙は体当たりを喰らわせた。
だが、それもダメージにはならず、ゴールは懷に飛び込んだファルコンの左腕を掴み、それを無理矢理引きちぎった。

「ぐあああああああつー！」

腕を引きちぎられた事によって激痛が走り、光牙はたまらず叫んだ。
ファルコンは倒れ込み、ゴールは引きちぎった左腕を踏み潰す。

「貴様等ゲッター線が無ければ只のメカザウルスにも勝てぬのだ！
思い知れ！」

倒れ込んだ光牙は痛みをこらえ、左腕を押さえながらよろよろと立ち上がった。

「コントロールルーム」

その頃、コントロールルームでは千冬と真耶が攻撃システムとシールドを止めるべく、コンピュータと格闘していた。

「よし、攻撃システムは止める事が出来たぞ！山田君、シールドはどうなっている！？」

別のコンピュータを操作している真耶に問い掛ける千冬。

「駄目です！変更を受け付けません！」

「あ、ちよつとどいて。私がやるから」

そこへ束が乱入し、忙しく指を動かし始めた。

だが数秒後、突如コンピュータから奇怪な音が発せられた。

「おい束！何をした！？」

「ごめーん、暴走させちゃった！逃げてー！」

『わああああ！？』

脱兎の勢いでコントロールルームから千冬達は退散する。

その数秒後、コンピュータが爆発し、シールドは消滅した。

〈侵入場所〉

侵入した場所に戻ってきた千冬達だが、そこには3匹のトカゲ兵が待ち構えていた。

「人間共めが！もう許しておけぬ！」

「我ら恐竜帝国の最強のメカザウルスを見せてやる！」

「全ては恐竜帝国の為に！」

3匹のトカゲ兵が角の絵が描かれた腕輪、黒い腕輪、灰色の腕輪を構える。

そして次の瞬間、黒い光が辺りを包んだ。

それが晴れるとそこには、牛のような頭部をした二足歩行のメカザウルス、ブル、黒い亀のようなメカザウルス、モバ、灰色の蛇のような頭部と胴体に昆虫のような6本の足が生えたメカザウルス、ギ

シャが居た。そして3体の最強のメカザウルスは千冬達に襲い掛かっていった。

くUFO上部く

左腕を引きちぎれた光牙にゴールの鉄拳が叩き込まれ、ファルコンを吹っ飛ばす。

更にファルコンに尻尾を巻き付け、ギリギリと締め付け始め、更に電撃を加える。

「がああああああああああ！！」

光牙の叫びが響く中、尻尾をほどかれボロボロになったファルコンが落下する。そこへゴールは、追い討ちを掛けるがごとく足で踏みつけた。

「一気に殺しはせん。ジワジワと痛ぶって我らの苦しみを教えてくれるわ！」

ゴールがそう言う中、突如、UFOの下部から爆発が起こり、光牙は分からなかったが、その爆煙の中から9つの物体が首都の至る所に落下し、3体のメカザウルスが降り立った。

「どうやら残るは滝沢光牙。お前だけだな」

「ど…どう…どう…事だ…？」

弱々しく応える光牙に、ゴールは右手に紫色の光を集め、それを見せた。

「……………！！！」

光牙は目を見開いた。

その光には首都の様子が映っていたのだが、そこには3体のメカザウルスと至るところに、ボロボロになり、身動き1つしないまま倒れている千冬達の姿があったからだ。

「…嘘だろ……………？」

心に悲しみの感情が溢れる。

それと同時に怒りの感情も沸いてきた。

恐竜帝国が、メカザウルスが、帝王ゴールが。

死ぬほど憎い！！！！

その瞬間、ファルコンがとてつない輝きを放ち、ゴールを後退させ、立ち上がる。

ファルコンの全身からゲッターエネルギーが噴き出し、どんな姿なのか分からないような姿になっていた。

「あああああああああああああああああああああああ！
！！な、なんだこれは…体が…体がバラバラになりそうだ…！！！
がああああああ！！」

光牙がとてつもない叫びをあげる。

その様子をゴールは僅かに笑みを浮かべながら眺めていた。

「怒りで我を忘れ、そこをゲッター線に漬け込まれて同化を始めた
か…哀れなものよ…」

「があああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！！！」

そして次の瞬間、光牙の意識は無くなった。

第30話 可能性の覚醒！ その名はゼクスファルコン！

今回、ジンオウガさんから許可を頂き、ジンオウガさんの執筆中の作品からキャラが1人ゲスト参戦します！それではどうぞ！

第30話 可能性の覚醒！ その名はゼクスファルコン！

「ナレーションSIDE、……」

光牙は気を失っている。

周りが真っ黒な空間に浮かびながら。

「こ、ここは……？」

意識を取り戻した光牙が辺りを見渡す。

光牙にとっては、いつぞや以来の真っ黒な空間だった。

「やっと起きたか」

光牙の後ろから突如声が響く。

後ろを振り向くと、IS学園の制服を着用し、首に少しボロボロの赤いマフラーを巻いた光牙と同じくらいの背の青年が立っていた。

「あ、貴方は……？」

「俺の事より、まずお前は自分を心配しろ。お前は怒りで我を忘れてゲッター線に取り込まれたんだぞ？」

「ええ……！」

青年の言葉に驚愕する光牙。

「全く……お前が望んだのはそんな力なのか？怒りで全てを破壊するようなそんな力か？」

青年は呆れたように光牙に言った。

「違う！僕が望んだ力はそんなじゃない！」

「じゃあどんな力なんだ？」

青年が光牙に問い掛ける。

「僕が望んだ力は…怒りじゃない！皆を守る力だ！だから…」

「分かった分かった。お前の望んだ力は分かったよ。やっぱ、神様の言ってた通りだな」

「神様を知ってるんですか！？」

「ああ。なんとって俺は神様から頼まれて来たんだからな」

そう言くと、青年は光牙から離れていく。

「ま、待って！神様から頼まれたってどういう事ですか！？」

「その内分かるさ！じゃあな！」

そう言つと青年は消えた。

「何だったんだあの人は…？」

『汝、ゲッターの力を求めるか？』

今度は、反対側から声が響き、再度振り向くと緑色の光のようなも

のがあった。

「ゲッターの…力？」

『そうだ。可能性を秘めた力だ。神にも、悪魔にもなれる力。それを汝は求めるか？』

「…僕は…悪魔にはならない」

『では神になるか？』

「いや、神にもならない」

『では何になるのだ？』

「…わからない」

『わからない？』

声の問い掛けに首を振って光牙は応える。

「でも、これだけは言える。ゲッターの力があっても、僕は神様になんかなれる訳ないし、悪魔にもなりたくない。でも僕は闘う！その力で、僕を信じてくれた人達を、その世界を守る為に！！」

『ほう……汝は面白い事を言うな……』

緑色の光から発せられる声が感心したように言った。すると、光牙の周りに多数の映像のようなものが映し出された。

そこには、龍の胴体にネオドラゴンの上半身が付いたゲッター、身体中に様々なゲッターのパーツが付いた巨大なゲッター、3つの戦

艦のようなものが変形合体するゲッター、真ゲッター1が青くなつたようなゲッター等が映っていた。

『ここに映し出されたのはゲッターの可能性のほんの一部だ…』

「ゲッターの可能性…」

『汝よ。汝は皆を守りたいと言ったな？ではその可能性を与えよう…』

緑色の光から光り輝く球体のようなものが出現し、光牙の手におさまる。

『その光の玉に、汝の望む力を示せ。さすれば、ゲッターの可能性が目覚め、望む力を手に入れるだろう…』

そう言うとき緑色の光も消え、球体を持った光牙だけになった。数瞬後、光牙は叫んだ。自分の望む力を。

「僕の望む力……それは皆を……守る力だ！！！！」

その瞬間、球体が目映い光を放ち、光牙の視界を覆い尽くした。

（UFO上部）

「ファイナル！！ゲッタアアア！！！！チエエエンジッ！！！！！！」

ゲッターエネルギーが溢れるファルコンから光牙の声が響き渡った。直後、ファルコンがとてつもない輝きを放った。

「ぬっっっ！？」

思わず目を反らすゴール。その輝きがおさまり、ゴールは視線をファルコンに戻した。

そのファルコンの姿が若干変わっていた。

頭部と胴体はあまり変わらないが、ボロボロになっていた装甲の傷は全てふさがり、引きちぎられた左腕が元通りになっており、両腕のゲッターブレードが真ゲッター1並になり、足には真ゲッター1のように緑色のクリアブーツがはめられ、かかとの部分にもブレードがあった。

「腕が再生しただと？」

少し驚いた様子でゴールはゲッターを見るが、ゲッターはまるで石像のようにぴくりとも動かない。

「何をしたか知らんが、歯向かうなら叩き潰してくれるわ！」

ゲッターに向かって黒い電撃をゴールは発射する。

だが、その電撃をゲッターは右手を振り抜き、弾いた。

「なに！？」

それを見てゴールは驚愕した。

「お前に見せてやる…このゼクスファルコンの力を！皆！僕の力を

受け取れ!!」

光牙はゴールを指差しが言い放つ。

そして、ゼクスファルコンから9つの光が放たれた。

その光の内、3つは赤い光に、2つは白い光に、1つは青い光に、残る3つは黄色の光となつて首都の至るところに倒れている千冬達の所へ向かっていく。

1人につき、1つの光がそれぞれのISと融合し、光と同じ色の輝きを放った。

同時に、搭乗者の意識も戻る。

「う…この輝きは…一体…？」

そして次の瞬間、千冬達9人を輝きが包む。

その輝きが晴れると、9人の姿は一変していた。

「これは、ゲッターファルコン…？」

「真ゲッター2なのですか、これは？」

「ネオドラゴンじゃないのよ、これ!」

「僕、ネオライガーみたいになつてる…」

「私はネオポセイドンだ…」

「私はゲッターフェンリルかしら？」

「私は…ゲッターアトラス…？」

「この姿…真ゲッター1なのか？」

「わ、私は真ゲッター3です！」

9人のISの姿はこれまで光牙が使用して来たゲッターロボのパーツや武装が組み込まれた形態に進化したのだ。

これが光牙の新たなゲッターの特殊能力の1つ、『ゲッターマルチフォーム』だ。

『皆さん！』

そこへ光牙から通信が入った。

「光牙！この姿は一体なんなんだ？」

『それは僕が今まで使っていたゲッターの力を皆さんに分け与え進化した姿です！』

「ゲッターの力で進化した姿？」

『その姿と今の皆さんならメカザウルスだって倒せます！僕はゴールと闘います！だから皆さんも頑張ってください！』

「そうだったのか…よし、メカザウルスは任せておけ！」

『頼みます！』

光牙からの通信が終わり、千冬達は互いに通信を開いた。

「各員、今の話を聞いていたな？これより我々はメカザウルスと戦

闘を開始する！ゲッターの力を見せてやろうじゃないか！」

『はい！』

「よし！では行くぞ！！」

そう言つて、千冬達はメカザウルスに向かっていった。

9人はメカザウルス1機につきそれぞれ3人ずつで向かっていく。

千冬、セシリア、真耶はブルを、鈴、シャルロット、ラウラはギシヤを、箒、楯無、簪はモバを相手に戦闘を開始した。

箒達は亀のようなメカザウルス、モバに接近していく。

すると、モバの甲羅から筒のようなものが多数出現し、そこから緑色の触手のようなものが3人に向かって伸びてきた。

だが3人はそれをなんなく回避する。

「来い！ファルコンソード！！」

箒の声と共に、光牙が使っていた剣、ファルコンソードが現れ手におさまる。

「うおおおおお！」

背部の展開装甲を展開し、モバに向かって箒は加速していく。その手に持つファルコンソードはゲッターエネルギーがチャージされていく事によって緑色に輝く。

「ファルコンスラッシュ！！」

ファルコンソードを振り下ろし、モバの筒のようなものを箒は一閃した。

するとモバは簪と楯無の2人に目を付け、口を開く。その口の奥から火球が出現し、モバはそれを2人に向かって発射した。

「簪ちゃんはやらせないわよ!」

簪の前に出た楯無はドリルランスを構え、それを高速回転させる。それにより発生した竜巻と、ミステリアス・レイディが生み出した水が合わさり、水の竜巻となった。

「スプラッシュ!ハリケエエェン!!」

水の竜巻は火球をかき消し、そのままモバに命中する。するとモバは2人に向かって突進を始めた。

それを見た簪は楯無の前に出て、突進を真正面から受けた。

「はあああああ!」

だがマルチフォームによってパワーアップしている簪はアトラスのパワーを利用し、そのままモバをひっくり返した。

「これで止めよ!箒ちゃん!簪ちゃん!」

「はい!」

楯無に返事を返す2人。

箒は肩をスライドさせて出現した砲口にエネルギーをチャージし、楯無はドリルランスを高速回転させながら構え、簪は両肩について

いるミサイルコンテナをモバに向けた。

「ゲッターアア！ブラスターアアッ！」

「ミストルティンドリルッ！！」

「ミサイルバーストッ！！」

両肩からは赤いビームが、ドリルランスからは螺旋状に回転する巨大な槍が、コンテナから放たれた大量のミサイルがモバに炸裂する。ひっくり返ったモバはどうする事も出来ず、全ての攻撃を受け、爆散した。

メカザウルス ギシャの胴体から放たれるミサイルと、鋭利な足の攻撃をよけた鈴達は攻撃に入った。

「フィンガーネット！」

そう言つてラウラは右手を突き出す。指先が変形し、ネットが放たれギシャを絡めとる。

「ドリルショット！」

「ゲッターキャノン！」

そこへシャルがドリルライフルからドリル状のビームを、鈴が龍砲の砲口からゲッターエネルギーの塊をギシャに放った。

それぞれが命中し、爆発が起きる。

「一気に決めるわよ！」

「OK！」

「任せろ！まずは私だ！」

ラウラが両肩のファンから放たれる竜巻を爆煙の中から現れたギシヤに向けて放った。

「ゲッタアアア！サイクロン！！」

竜巻によつてギシヤは空中に吹っ飛ばされていく。

「シャルロット！頼んだ！」

「任せて！音速を越えた闘いを見せてあげるよ！」

吹っ飛ばされていったギシヤにロケットブースターを噴かしたシャルが両手のドリルライフルを突き立てる。

そこからUターンして再度加速しながらドリルライフルを突き立てる。それを繰り返し、シャルロットはギシヤの周りを駆け巡りながらドリルライフルを突き立てていった。

「グレートマツハススペシャルッ！！」

それにより、ギシヤの至るところに裂傷が刻まれていく。

「鈴！最後は任せたよ！」

そこでシャルロットは最後の1人にバトンを渡した。

「最後は私よ！ダブルトマホークッ！！」

鈴がダブルトマホークを両手に持ち、満身創痍になったギシャに突撃していく。

「せやあああああつ！！」

2本のダブルトマホークを思い切りギシャに叩き付ける鈴。
ギシャは両断され、爆発し金属片と肉の塊と化した。

「蒼月刃！」

蒼い太刀を呼び出し、それを手にして千冬はブルに向かっていく。

「ゴオオオオオオ！」

ブルは胸のミサイルランサーを迎え撃つように発射する。

だがそれは蒼月刃の一閃のもとに真っ二つになり、爆発して金属片と化した。

「はあああああつ！」

そのまま勢いを緩めず、千冬はブルに接近し、すれ違い様に逆袈裟払いを放ち、右腕を斬り飛ばした。

「ゴオオオオオオオ!!」

ブルが激昂の叫びをあげ、左腕でリアットを放つが、千冬はそれをかわして距離をとった。

「トマホーク! ブーメラッ!!」

蒼月刃を収納した千冬は両手にトマホークを呼び出し、それを投げ付けた。
2つの回転するトマホークがブルに裂傷を付け、地面に突き刺さった。

「山田君! 頼んだ!」

「了解です!」

そこで千冬は真耶にバトンタッチした。

「ゲッターホーミングミサイル!!」

両手に持っているランチャーから4発のミサイルが放たれ、ブルに着弾する。

「オルコットさん! 決めて下さい!!」

「任せて下さい!」

ミサイルが着弾し、ダメージを負ったブルに、ライフルをドリルモードにしたセシリアが突っ込んでいき、ドリルを突き刺した。

「ゴアアアアアアア！」

「まだ終わりませんことよ！」

セシリアの言葉と共に突き刺した状態のドリルが高速回転を始める。

「プラズマドリル！ハリケエエエン！！」

プラズマを纏った竜巻がブルを貫く。

ブルからスパークが散った瞬間、セシリアは離脱し、その直後、ブルは爆散した。

（UFO上部）

「どりゃああああ！」

「ぬおおお！！」

突き出したゼクスファルコンの拳がゴールに迫る。拳は右肩に炸裂し、右肩の鎧が砕ける。

「もう一丁！！」

そこから光牙は左腕のゲッターブレードを展開し、斜め上に振り抜く。

ゴールの胴体に斜めの裂傷を付け、紫色の血が吹き出た。

「があああつ！？こ、これがゲッターのパワーだと言うのか！？」

「チエエストオオオオ!!」

そこへ止めとばかりに、光牙は右手を手刀のようにして、がら空きになったゴールの腹部の顔の部分に突き刺した。

「ガハッ……!!」

ゴールが吐血する。どうやら今の一撃が致命傷となったようだ。右手を引き抜くと、ゴールは踞る。

「諦めろ、ゴール！お前の負けだ！」

踞るゴールに光牙は言い放つ。

「わ、我は死ぬ訳にはいかぬ……恐竜帝国の為に……」
ゴールはよろよろとふらつきながら立ち上がった。

「こうなれば……“あれ”を使うまでよ!!」

そう言うゴールの体から紫色のスパークが迸った。

「くっ！」

それを危険だと判断した光牙は、ファルコンウィングを展開してUFOから離脱する。

そこへメカザウルスを撃破した千冬達も集まって来た。

「光牙！あれは一体!？」

「僕にも分かりません！」

「ぬおおおおおおおおおおお！！！！」

紫色のスパークが激しさを増し、次の瞬間、光牙達の視界を真っ黒な光が覆った。

その光が晴れ、視線をUFOに戻した光牙達は信じられない光景を見た。

なんと、UFOの上部から巨大化したゴールの上半身が、まるで一体化したように生えていたのだ。

その光景に、光牙や千冬達も見開いて言葉を失っている。

「ハッハッハッハッハッハ！！どうだ恐れ入ったか？我はこのオパーツと完全に融合し、無敵となった！」

そう言い放ち、ゴールの腹部の顔にエネルギーがチャージされている。

「最早貴様等……」

言い終わると同時にチャージが完了し、太い紫色のビームが発射された。

「虫けら同然！！」

紫色のビームが光牙達に迫る。

「やらせるか！ゲッタアアア！バリアッ！！」

千冬達の一番前に出た光牙は両手の手のひらを構え、ゲッターエネルギーのバリアを張った。

半球体状のバリアがビームを防ぐ。
しかし敵機のビームが高出力の為、バリアにヒビが入り、少しずつ広がっていく。

「このままじゃ…押し切られる…!!」

その時、ジリジリと押し込まれる光牙の背中が軽くなる。
振り向くと、千冬達が光牙を支えていた。

「皆さん…よし！ゲッターバリアフルパワー…!!」

それに応えるようにバリアの出力をフルパワーにする光牙。
するとバリアはビームを拡散させ、なんとか耐えきったようだ。

「こしやくな…ならば今一度吹き飛ばしてくれるわあああ!!」

再び、顔にエネルギーがチャージされていく。

しかも今度は砲口にスパークが散り、より強力なビームをゴールは放とうとしていた。

再びバリアで防ごうと光牙は身構える。

だが、幸運な事に砲口からビームは放たれなかった。突如飛来した“高速回転する何か”がゴールの右目を切り裂き、チャージを中断させたのだ。

「ぬあああああ！い、今のは一体!？」

鮮血が溢れる右目をおさえ、高速回転する何かが飛来した方向にゴールは目を向け、光牙達もその方向に目を向けた。

その瞬間、光牙は驚愕した。

その方向には赤をメインカラーにした全身装甲の人型の物体、光牙

の愛機だったゲッターファルコンそつくりの機体があったからだ。
そのゲッターはゴールの右目を切り裂いた高速回転する連結させた
斧を右手でキャッチする。

「ゲッターファルコン!？」

「馬鹿な!ゲッターがもう一体だと!？」

「てめえの好きにはさせねえぜ!トカゲ野郎!！」

ゲッターから青年の声が発せられる。
光牙にはその声に聞き覚えがあった。

「貴方は…もしや…？」

「俺の名前は流竜牙!!お前と同じ、ゲッターを使う者だ!!！」

第30話 可能性の覚醒！ その名はゼクスファルコン！

感想等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2270w/>

IS インフィニット・ストラトス ゲッターを継ぐ者

2011年11月24日13時12分発行